空母ずいかく194　THE　GREAT GAME［更新停止・改修作業中］

特殊作戦群

【注意事項】

このＰＤＦファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にＰＤＦ化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でＰＤＦファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

２０ＸＸ年、尖閣諸島を巡る日中の紛争から数年時は新たな火種を生んだ。大国の干渉を嫌う島嶼国が結束し東亜連邦を名乗る国が立ち上がった。過激な主義主張その緊張は周辺諸国、そして此処日本においても軍事衝突の危機が迫りつつあった。日本政府は先の紛争から「いぶき」の検証をあらゆる角度から行いその結果「いぶき型航空機搭載型護衛艦二番艦」が誕生する。先の有事から数年、新たな艦隊による、日本の領土を海を守る為の新たな戦いが始まろうとしていた。

目　次

キーワード　1
第１話～有事から時は流れ～　4
第２話～解任～　10
第３話～苦難の時～　13
第４話～第６護衛隊群（仮）～　15
第５話～その名は「ずいかく」～　18
奈６話～演習航海～　22
第７話～東亜連邦～　25
第８話～台風突破～　28
第９話～優希の過ごす一日～　31
第１０話～想い～　34
第１１話～調査航海～　40
第１２話～重い政府の腰～　46
第１３話～対空戦闘～　50
第１４話～つのる危機感～　54
第１５話～病院での再会～　57
第１６話～変わりゆく時間～　64
第１７話～日・中・台・比・首脳会談～　68
第１８話～演習第２クール～　71
第１９話～恐ていた事態～　76
第２０話～第６護衛隊群現場海域へ～　79
第２１話～西ノ島の空に散る命～　86
第２２話～記者会見・防衛出動～　89
第２３話～各国の反応～　93

第２４話～奇襲～ 98
第２５話～防衛出動の余波～ 102
第２６話～昨日の敵は今日の友～ 107
第２７話～第５護衛隊群～ 110
第２８話～敵潜撃沈～ 113
第２９話～事実の重さ～ 124
第３０話～各国の反応２～ 128
第３１話～第９４航空団～ 132
第３２話～東亜連邦議会～ 135
第３３話～統合任務部隊１５１～ 138
第３４話～奇襲パート２～ 141
第３５話～捕虜～ 147
第３６話～第９４航空団の初陣 150
第３７話～大空の剣、音速の戦い～ 154
第３８話～東亜連邦外交部との接触～ 163
第３９話～パイロットの苦悩～ 167
第４０話～オペレーション・イーグル～ 172
第４１話～交渉決裂～ 175
第４２話～動き出す自衛隊～ 177
第４３話～始動！オペレーション・イーグル～ 180
第４４話～先制攻撃～ 184
第４５話～空戦～ 188
第４６話～プレッシャー～ 193
第４７話～障害～ 198
第４８話～この一撃に込めて～ 201

第４９話～５インチの意思～ ―― 205
第５０話～春島空爆戦～ ―― 212
第５１話～忍び寄る影～ ―― 215
第５２話～拡大する戦火～ ―― 220
第５３話～決断～ ―― 223
第５４話～最良の一手と信じて～ ―― 226
第５５話～第５護衛隊群、春馬群島へ～ ―― 229
第５６話～流動的状況～ ―― 232
第５７話～東亜連邦北方艦隊～ ―― 235
番外編～航空機搭載型護衛艦「ずいかく」諸元～ ―― 239
第５８話～島民の様子～ ―― 242

キーワード

第５護衛隊群

戦後日本初となる事実上の空母機動部隊。便宜上「航空機搭載型護衛艦」と言われている。いぶきお旗艦としイージス艦２隻・汎用護衛艦２隻・潜水艦１隻という編成で誕生した事実上の空母機動部隊。

ＤＤＶ１９２「いぶき」

戦後日本初となる空母。分類上は軽空母に属する。搭載艦載機機数は１５機尚予備機含む、搭載機はステルス戦闘機Ｆ―３５ＪＢ・汎用ヘリを搭載。尚、有事集結後検証した結果、当初の１５機搭載艦載機の機数を三機減らし１２機としその分汎用ヘリを追加搭載。

第９２航空団〈再編成後〉

アウル隊×５機

ホワイトホーク隊×５機

予備機×２

合計１２機

ＤＤＧ１７７「あたご」

ＤＤＧ１７６「ちょうかい」

第５護衛隊群所属艦隊防衛イージス護衛艦。

ＤＤ１５３「ゆうぎり」

ＤＤ１５６「せとぎり」

第５護衛隊群所属艦隊防衛汎用護衛艦

ＳＳ５０４「けんりゅう」

第５護衛隊群艦隊防衛潜水艦

第６護衛隊群

有事集結後第５護衛隊群のデータを元に編成された新艦隊。旗艦ＤＤＶ１９４「ずいかく」はいぶきの検証データを元に開発され艦載機搭載機数は当初の１５機の三倍の４５機搭載し汎用ヘリも搭載可能というバランスを重視し開発された。尚艦隊規模は第５護衛隊群と同じ。

ＤＤＶ１９４「ずいかく」
先の有事の検証データを元に造船された新型空母。対空戦闘・対潜哨戒とバランスよくこなせるよう艦を大型化しその分艦載機は「いぶき」の三倍の４５機搭載し尚且つ汎用ヘリも５機搭載可能となり先の有事のデータが生きた結果となった。
ＤＤＧ１７９「まや」
ＤＤＧ１８０「はぐろ」
第６護衛隊群所属艦隊防衛イージス護衛艦〔配備されたばかりの最新鋭イージス艦〕
ＤＤ１１６「てるづき」
ＤＤ１２０「しらぬい」
第６護衛隊群所属艦隊防衛汎用護衛艦
ＳＳ５０９「せいりゅう」
ＳＳ５１０「しょうりゅう」
第６護衛隊群艦隊防衛潜水艦
Ｆ―３５ＪＡ
Ｆ―３５ＪＢ
航空自衛隊に配備されている最新鋭ステルス戦闘機、Ｂ型に関しては艦載機用となっており。主に「いぶき」「ずいかく」に配備されている。
特殊作戦群　［ＳＦＧＰ］
陸上自衛隊初となる特殊作戦部隊。初めて実戦投入されたのが尖閣有事となってる秘密のベールに包まれた陸自衛隊特殊部隊。
特別警備隊　［ＳＢＵ］
海上自衛隊に創設され尚且つ全自衛隊初となる特殊部隊。日本版ＳＥＡＬとも呼ばれる。先の尖閣有事にて特殊作戦群同様に初出動。
水陸機動団
「島嶼防衛を主任務とする日本版海兵隊とも言われている。創設されまだ日は浅いが先の尖閣有事で初出動している」
尖閣有事

数年前に勃発した日中の武力衝突。中国の尖閣諸島占やその他諸島の占領に対し、日本は自衛隊創設以来初となる「防衛出動」を発令し実力行使で中国軍の排除を行った。両軍互角の戦いを演ずるも最終的には敵空母「広東」の甲板を突入したＦ―３５ＪＢの機銃掃射で破壊し空母機能を喪失させ決着となる。

尖閣諸島

数年前の有事の原因となった島。今現在は日中両国による共同油田開発を行っておりかつてのような負の感情はほぼ見受けられない。

東亜連邦

数年前に一方的に建国された非承認国家。アジアの様々な場所で問題を起こし紛争の火種になりつつある。

第1話～有事から時は流れ～

小笠原諸島近海

海上自衛隊　汎用護衛艦ＤＤ―１１８「ふゆづき」

「艦長、この海域に来てもう二週間ですが特に問題があるようには見受けられませんね」

左舷ウィングに本艦艦長一ノ瀬優希二等海佐、副長高本翼三等海佐が出て言った。

「そうだな、しかしここ一帯の西ノ島・そして春島・無人の秋島の特に西ノ島の住民は常に東亜連邦の驚異に晒されている。海域に駆逐艦や巡洋艦が目撃されている報告も上がっている」

俺一ノ瀬は言い

「艦長、やはり・・・ですかね」

副長高本三佐も頷いた。東亜連邦は西ノ島・春島・秋島の領有を激しく主張し自衛隊と一触即発の事態を何度も起こしている。

「中に戻りましょう、艦長」

高本三佐に言われ俺は艦橋に戻り

「副長、では艦橋で指揮を頼む」

言い

「了解」

高本三佐は敬礼し俺はＣＩＣ「戦闘指揮所」に行く。戦闘指揮所に入り自分の椅子に座る。

「砲雷長、どうだなんかあったか？」

尋ね

「いえ、ソナーにも何も反応はありませんオールクリアです」

砲雷長は答えた。

「ふぅ・・・・・・」

一息吐いた時

「レーダーコンタクト・・・・中国船籍の貨物船です・・・距離１４キロ」

レーダー要員は言い

「貨物船か・・・」
　この海域はよくもわるくも緊張する海域であり東亜連邦の潜水艦もしくば駆逐艦がの出没地帯とも言われている。
「黙って見送ってやれ」
　俺は言った。今の日中にあの時のような戦闘が集結した時のような憎悪の感情はない、互いに未来に目を向ける為にも。
　一人感傷に老けていると
「艦長、ソナーに感あり・・・・識別信号に反応ありません。」
　ソナーマンが言い
「おいでなすったか」
　どうやら東亜連邦の潜水艦のようだ、俺は言うと席に座り
「!!艦長魚雷発射官開口音探知」
　突然の事で一瞬真っ白になりかけるが
「こんちにわで挨拶がわりにズドンか?それでどっちだ?本艦かそれとも中国船籍の貨物船か!」
　言うと同時に
「自衛艦隊司令部に報告しろ、事は緊急だ民間の船舶にも関わる」
　直ぐに通信員に指示を飛ばすと同時にインカムを取り
「艦長より総員へ対潜戦闘用意ッ、繰り返す対潜戦闘用意ッこいつは演習にあらず」
　艦内に警報が鳴り響き直ちに戦闘態勢に移る。
「艦長、艦隊司令です」
　言われインカムを付け
「一ノ瀬二佐です。」
　言い
「一ノ瀬二佐、報告は直ちに官邸に上げる、貴官らがいる海域はグレーゾーンだと言う事はわかっているな事戦闘は許可しない万が一撃ってきたら回避行動に徹せよいいな撃ち返してはならんいいな!!」
　命令を受け
「了解しました」
　言い通信を切る。それと同時に

「艦長、魚雷発射音探知ッ」
ソナー要員は叫び
「魚雷の目標は?」
すぐさま席に着き
「中国船籍です、マズイ・・・距離２０キロ」
言い
「あの豚足じゃ魚雷を回避は出来ないぞ・・・・」
俺はモニターを見つつ言い
「中国船籍、救難信号を発信」
通信員は言い、
「・・・・・・・・・・・・ソナー魚雷と貨物船までの距離は?」
言い
「はっ、本艦の位置から魚雷まで距離１０キロちょうど貨物船の中間ポイントです」
艦の艦長として俺はこの船の乗組員２００名と７２６億円のこの船を守る義務がある、だがそんな体裁は「人と命」があっての話だ。魚雷が命中すれば貨物船といえどもただでは済まない
「間に入らねばなるまい・・・・」
呟き
「艦長、しかしそれは艦隊司令部の命令から大きく逸脱する事に・・・」
砲雷長は言い
「責任は俺が取る、機関最大、最大戦速魚雷と貨物船の間に割って入るッ」
命令を下した。自分の首が飛ぼうが構いやしない、艦はスピードを上げて魚雷と貨物船の間に向かって突っ走る。

貨物船籍ｓｉｄｅ
「船長、魚雷です!!」
乗組員は言い
「馬鹿な、この海域で民間船舶を攻撃だと!!」
船長のワン・リーカンは言い

「機関室、エンジン出力最大!!魚雷をかわせッ!!」
　指示を出し
「国際救難信号を出せ」
　言い
「付近を航行中の艦は・・・いました、日本海上自衛隊所属護衛艦「ふゆづき」です。」
　乗員は言う中
「船長、「ふゆづき」接近します・・・・このコース・・・・まさか魚雷と我々の間に割って入ろうと・・・・」
　貨物船ｓｉｄｅアウト

「総員テッパチを付けろ、左舷要員退避急げッ」
　命令を出し
「マスカー開始ッ、デコイ一番、三番、発射準備ッチャンスは一回こっきりだスカせばドテッ腹に魚雷をご馳走される羽目になるぞ」
　叫び
「艦長、所定のポイントに入ります」
　レーダー員ソナー要員が言い
　マスカーの気泡で魚雷のセンサーを攪乱、デコイを発射し魚雷を攪乱する。距離的には一回ターンすれば燃料切れで魚雷は貨物船までは到底届かない、だがチャンスは一度きりしくじった場合は貨物船の楯となり我「ふゆづき」を持ってして貨物船を守る。
「デコイ一番、三番発射ッ」
　命令し魚雷の射線上にデコイを打ち出す。
「頼む・・・・食いついてくれ・・・・」
　言い
「魚雷、二本ともデコイに食付きました。魚雷ターンしデコイを追っています。」
　ソナー要員からの報告に胸をなでおろしつつも
「敵潜の位置は」
　言い

「当海域から離脱した模様です・・・・」
報告を聞き
「ふぅ・・・・・」
中国船籍の貨物線より回線開けのコールです」
通信員が言い
「わかった回線開け」
俺は言いインカムを取る
「こちら日本国海上自衛隊護衛艦「ふゆづき」艦長の一ノ瀬二佐です」
言い
「中国船籍貨物船船長ワン・リーカン船長だ、貴官らのおかげで無事に帰れそうだ本当にありがとう、本当に・・・・・・」
船長は感無量といったようで
「ご無事で何よりです、今のうちに海域を離脱しましょう何があるかわかりません」
そう言っていると自衛艦隊司令部より緊急の通信が送られてきたようで
「直ちに帰投せよ」
の一文字だった。
「〔了解って返信しとけ〕」
小声で通信員に言い
「本艦も帰投命令が出ています道中の途中まで護衛したいと思っていますが」
言い
「それは・・・・よろしいので」
いわれＣＩＣ内部の乗組員を見るが誰ひとり嫌な顔をしていない
「ハイ、」
答え
「よろしくお願いします」
こうして「ふゆづき」は中国船籍貨物線を護衛しつつ海域を離脱した。これが俺の最後の航海になるその時感じ俺は海を目に焼き付ける為に艦橋に上がった

「ご苦労」
俺は言い
「艦長・・・・・」
翼は・・高本三佐は言うが
「人として間違った事はしていない、自衛官としては大間違いかもしれないがな」
俺は言い艦長席に座った。

第2話～解任～

横須賀　自衛艦隊司令部

「将来有望なお前にこんな事は言いたくはないだが、上からだ」

艦隊司令の脇坂裕次郎海将は俺に向かい治り

「一ノ瀬優希二等海佐、現時点を持って護衛艦「ふゆづき」艦長の任を解任するものとする」

辞令を読み上げ

「ハッ」

俺もそれを受け入れた。俺が独断でやった事は皮肉にも中国では大きく取り上げられ日中友好の一つとして大きく取り上げられているらしい

辞令書を受け取り

「一ノ瀬、ようやく言えるが中国大使館からは防衛省と首相官邸に抗議の電話が言ってるそうだ。「なぜ英雄を処罰するのだと」防衛省としても貴官を処分するのは痛いが」

脇坂艦隊司令は言い

「いいえ、あの艦の責任者は私です私が独断で貨物船を守る為に「撃つな」という命令を無視しデコイを撃ちました、立派な「命令違反」です誰かを処分せねば終わらないでしょうこの問題は。私一人が解任される事でこの問題が沈静化されるなら安い物です」

俺は言い

「一ノ瀬二佐・・・・・」

脇坂艦隊司令は言い

「くすぶるなよ、お前は海自になくてはならないんだ少し休みをもらったと思え必ず現場にお前が必要とされる時がくる」

言われ

「そう言って頂けるだけで十分です、それで俺の後任は？」

聞くと

「直ぐに来る」

言われ

待っていると
「失礼します」
室内に入ってきたのはなんと翼だった。俺は一歩下がり
「高本翼二等海佐、本日付けで護衛艦「ふゆづき」艦長に任命する」
辞令書を受け取り敬礼する翼を見てこいつなら安心だと思えた。
翼が
「一時の別れです、また先輩と一緒に艦隊勤務に付けると信じて待っています」
翼は言い
「ああ、そうだな」
俺は翼に言い
「ではこれで失礼します」
俺は配属先になる「古巣」に戻る事に。そして一歩基地の外に出ると
「一ノ瀬二佐、貴方の暴走がこの国を危険にさらしたのですよ、国民を守る自衛官が暴発して謝罪などはないのですか??」
直ぐに情報を嗅ぎつけたマスゴミに追いかけられる
「ノーコメント」
俺は言い切り基地を後にした。

首相官邸
「伊部総理、今回は苦渋の決断だったな」
副総理の天羽良治が言い
「ああ、彼ほど優秀な艦長はいないと艦隊司令も庇うくらいだったからね」
伊部は言い
「さっき艦隊司令と話したが一ノ瀬二佐は「誰かを処分せねば終わらないでしょうこの問題は。私一人が解任される事でこの問題が沈静化されるなら安い物です」と言っていたそうだ、また俺達は若者に責任を押し付けてしまった。彼一人に「ハラキリ」をさせてしまったようなものだ。」

天羽は言い
「だが一ノ瀬二佐をくすぶらせるつもりはない。彼は最善の判断を下したそして両艦共に無傷で帰還した。これは大きく評価できる所だ」
伊部は言った。その時
「総理、中国の集金平国家主席からホットラインです」
一人の職員が来る
「わかった」
伊部は言いそれで察したのか天羽副総理も下がる。
「伊部総理です」
電話を取り
「伊部総理、今回はうちの船が迷惑をかけてしまったようで済まないそれから在日の大使から聞いたが本当に一ノ瀬海軍中校〔中佐の意味〕を解任したのか？」
集主席にも言われ
「私も心苦しいですが事実です。「命令違反」や「一触即発」の事態を招いたことも艦長としての責任を問うべきと委員会でもありました本人もそれを認めています」
言うと
「私が言えた事ではないと言うのは十分に分かっているが伊部それは間違っている、中校は確かに命令違反をしたし艦の長として艦と乗員を危険にさらしただが先に仕掛けてきたのは「東亜連邦」だ。中校になんら落ち度はないはずだ違反行為を除けば。」
言われ
「一ノ瀬二佐に伝えておきます、わざわざありがとうございます」
言い
「中校に伝えて欲しい迷惑をかけてすまなかったとな」
主席は言われ
「確かに伝えます」
言い電話を切った。しかし伊部はこの時思っていた。一ノ瀬二佐には申し訳ないがこれであの計画が一気にオールクリアになると。

第3話～苦難の時～

海上自衛隊　江田島
特別警備隊本拠地
「指導教官またお世話になります」
当時の指導教官今は司令に昇格していたに俺が頭を下げて言うと
「確かに腕利きを寄越せと言ったがお前がくるとわな頼もしい限りだ。それとな心配すんな、あの時の事を言う奴は部隊内にいない特殊部隊員としてのお前は「ピカイチ」だからな」
司令は言ってくれた。あの後俺のインタビューや写真などが新聞に掲載され
「自衛隊暴発！」
「先の紛争から何を学んだ?!」
「現場指揮官の暴走！」
など色々と叩かれ迷惑をかけてしまい制服は違えど同じ志を持つ仲間に申し訳なくなっていたのもまた事実だった。だが仲間達が
「お前はよくやった」
「耐えろよ、今は我慢の時だ」
「二佐、指導よろしくお願いします」
気遣ってくれたお陰でがんばれている。事実俺の事は数ヶ月で鳴りを潜めそしてべつの問題に変わっていっていた。

特別警備隊射撃場
「ドンッ」
最終弾を打ち切り89式小銃折曲銃床式のマガジンを外し弾倉内部に新しい弾倉を入れセレクターをスリーショット・バーストに切り替える
撃っている時は嫌な事を忘れる事ができる。そして射撃終を皆で見て
「すげぇ・・・見てみろよ二佐の腕前」
隊員らも言い

「バイタルラインばかり穴だらけ・・・だ先の尖閣紛争でＳＢＵの隊員として戦ったのは伊達ではありませんね二佐」
　言われ
「自慢出来る事じゃないよ・・・人殺しの腕なんて」
　俺は言った。戦場での悲鳴ほど嫌な物はないそこに敵も味方も関係ない。
「どれほどの中国人を俺は殺したのだろうな・・・・あの時」
　俺はぼそっと呟いたのだった。そこから時は流れそんな中とうとう「東亜連邦」がやらかしたと聞いたのはその時だった。中国の船舶を撃沈し漂流者を銃殺している映像が流れあわや戦争にと機運が国内に高まった。そして皮肉にもその現場を自衛隊の護衛艦が通過しており艦の艦長はマニュアルに則った対応しかできず非難の的となったその時の中国ネット内での一言が大きく広がった
「もしこの艦の艦長が一ノ瀬中校だったら」
「彼ならこんな対応見て見ぬふりなんてしないだろうね」
「日本は本当に愚かだ、彼のような優秀な艦長を解任し無能な奴が何食わぬ顔してやがる」
「カムバック一ノ瀬中校」
「彼は本当に日ノ本のサムライ、英雄だった」
「日本政府と役人はかれを現場復帰させろ」
　そんな事は知らずに特別警備隊で勤務していた。そしてこの事件から日本も危機感が一気に跳ね上がり新たな護衛艦が生まれる事になる。

第４話～第６護衛隊群〔仮〕～

海自幕僚

「ふむ・・・・・・・」

新たな編成として生まれる航空機搭載型護衛艦を旗艦とした艦隊その主要幹部を選出する場所に「その男」はいた。

「イージス艦が２隻に汎用護衛艦が２隻それに潜水艦が２隻そして航空機搭載型護衛艦ですか」

配置予定の艦も書かれていた

「航空機搭載型護衛艦」

航空機搭載型護衛艦ずいかく　ＤＤＶ１９４

「イージス護衛艦」

イージス護衛艦まや　　ＤＤＧ１７９

イージス護衛艦はぐろ　ＤＤＧ１８０

「汎用護衛艦」

汎用護衛艦てるづき　ＤＤ１１６

汎用護衛艦しらぬい　ＤＤ１２０

「潜水艦」

ＳＳ５０９　せいりゅう

ＳＳ５１０　しょうりゅう

推薦する者や、昇進させその任につかせる者様々な人選が出る中

「よろしいか？」

先の紛争で日本を勝利に導いた男「第５護衛隊群群司令官」秋津竜太海将補が手を上げる

「秋津群司令」

言われ

「イージス艦枠の一つＤＤＧ１８０はぐろに関してですが皆さんお忘れでは？最も優秀な指揮官がいる事を」

言い

「私は「はぐろ」艦長に一ノ瀬優希二等海佐を昇進させた上で艦長職に復帰させる事を推薦します」
言い
「おお、確かに彼は数年前のあの事件以降前線からは遠のいていたが優秀な指揮官という事に変わりない」
一人は言い
「確かに、柔軟な状況に柔軟に判断するその通りだ」
もう一人も言い
「ならば彼とは阿吽の呼吸とも言える副長には高本翼二佐を推薦する。」
もう一人が言いあれよと決まってしまい翌日には俺は横須賀の艦隊司令部に来ていた。
脇坂艦隊司令は
「長かったな時は・・・・」
言い
「は・・・はぁ」
俺は答え
「一ノ瀬優希二等海佐本日付けで一等海佐に昇格の上イージス護衛艦「はぐろ」艦長に任命するものとする」
辞令書を渡され現実が追いつかない中今度は翼が部屋に来る。
「高本翼二等海佐現時刻を持ってイージス護衛艦「はぐろ」副長に任命する」
俺と翼を見て
「迷子のドリームチームが戻ってきたな、おっと一ノ瀬渡しそびれていたが一佐の階級章だちゃんと制服につけとけよ」
受け取り
「ハイ、了解しました」
言い
「また先輩と組める時がきたのは嬉しいです」
翼が言った。
「一ノ瀬一佐君を推薦したのは第５護衛隊群の群司令秋津海将補だ」

話を聞き
「群司令がですか」
言い
「ああ、海将補は君を高く評価していた。無論私もだがこれで君も晴れて第一線に復帰したという事だ。君がいずれ艦隊を率いる時が来るだろうそれもそう遠くない未来にな」
脇坂艦隊司令は言い
「精進致します。」
俺は言い
「就役式典にもちゃんと出ろよ、いぶき型二番艦のな」
言われ
「ハイ」
頷いたのだった。

第５話～その名は「ずいかく」～

横須賀

「大きいな・・・・」

言った。基準排水量４５０００ｔ満載排水量６５５００ｔ、いぶき型一番艦いぶきの倍以上の大きさと排水量を誇る。

艦を見上げて俺は言った。先の一番艦「いぶき」を圧倒的に上回る大きさに俺は圧倒されていた。

「そうですね」

翼も言い

「搭載戦闘機数　Ｆ―３５Ｊ／Ｂが予備機を含め４５機」

「対潜哨戒・救助汎用ヘリが５機、計５０機だ」

言い

「先の尖閣紛争からの戦闘を検証した結果、対潜哨戒も対空戦闘も両立させる為に艦を大型化させその分搭載機数を倍以上に増加したんですよね」

俺と翼は制帽をかぶり「ＤＤＶ１９４ずいかく」の中に入る。そこには懐かしい顔をも

「優希、戻ってきたなイージス護衛艦の艦長任せるならお前も当然居ないとな」

ＤＤＧ１７９まや艦長に就任した同期の木村哲郎一等海佐が言った。

「ありがとう」

俺は答えた。そのほかにも見知った顔が幾つかあった。

「一ノ瀬一佐、艦長就任おめでとう」

声をかけられ振り返るとそこには、先の紛争で「第５護衛隊群」を率いて日本を勝利に導いた秋津竜太海将補がいた。

「ありがとうございます。なんでも海将補が私を推して下さったとか」

言い

「貴官には状況を柔軟に判断しあらゆる情報をまとめ判断する能力が

ある。だから私は貴官を押した期待している」
言い
「ハイ、ご期待を裏切らぬように全力を尽くします」
握手し答えた。
第６護衛隊群の群司令官には白谷圭一海将補、「ずいかく」艦長には米軍で５年の研修をうけ航空自衛隊から秋津海将補同様に海上自衛隊に配置転換した風吹空一等海佐そして副長兼航海長は矢口達也二佐が就任。
首相の演説が終わり俺は「ずいかく」の飛行甲板に出るそこには防衛大学からの同期でこの度空自からの転換で海自に移った風吹一佐がいた。
「よう大任だな、航空機搭載型護衛艦の艦長は」
言い
「ああ、そうだなでもそれはお前もだろ一ノ瀬」
振り返り言われ
「そうだな」
俺も横に並ぶ。
「かつての戦いから大きく時が流れた、今のアジアは不安定だ」
風吹は言い
「ああ、それは俺も身を持って感じているよ、「東亜連邦」だろ？」
俺は言い
「そうだ、東亜連邦は規模こそ小さいがあちこちで問題を起こしている。一ノ瀬が艦長だったふゆづきの時ももそうだ。民間船舶を攻撃するなんて国際法無視も甚だしい。」
風吹は言い
「一ノ瀬一佐」
風吹は言い
「俺達の最初の艦隊演習は先の紛争地だった先島諸島だ。もしあの海域に行けば一気に海自と東亜連邦北方艦隊と一色即発になりかねないからな。それにみすみす敵にこの「ＤＤＶ１９４ずいかく」の情報をくれてやる必要はないだろう。」

風吹は言い、俺は
「第三国経由で既に第６護衛隊群の情報はもたらされてるさ」
言っていると
「自衛官に求められる覚悟は戦闘への覚悟ではないぞ」
後ろから声が聞声、二人で振り返るとそこには副長の矢口二佐がいた。
飛行甲板を歩き俺達の横に並び
「求められる覚悟は戦闘を阻止する覚悟だ」
言い
「それは違うな」
俺は即座にそれを否定する。
「矢口、防衛大時代から変わっていないな」
言い
「俺達がすべき覚悟は国民を守る事その為に戦闘になるならば手加減容赦はしない。お前のその半端な覚悟で艦隊を道連れにしないでくれ」
俺は言った。
「一ノ瀬一佐も考えは変わってないようだな」
厳しい顔で言うが直ぐにほぐれ
「せっかく三人が揃ったんだ、不毛な話はやめよう」
矢口は言い海を見て
「この向こうだよな・・・・東亜連邦は」
言い
「ああ、奴らに常識は通用しない、現に中国船が魚雷で沈められ漂流中の乗員が虐殺されている。」
風吹は言い
「ああ、ヤバイ事極まりない」
俺も言った。
「「・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・」」
俺達は海の向こうを見た。向こうには敵性国家がいるのだ。
「気引き締めてかからねぇとな」

俺は言い
「ああ」
二人は答えた。俺達が守るのだ日本の海を・・・・決意を新たにした日だった。

奈６話～演習航海～

先島諸島海域
第６護衛隊群　旗艦　航空機搭載型護衛艦ＤＤＶ１９４「ずいかく」飛行甲板
「はぁ?!燃料を３０パーセントカットして飛行する?!」
間の抜けたような声を上げたのは「ずいかく」副長の矢口二佐だ
「一応艦長の風吹一佐の許可は得ているぞ」
第９４航空団司令深町一佐は言い
「これからは離着艦訓練も待ったなしだ、我々は第５護衛隊群に比べれば圧倒的に経験値不足だ。飛行隊の状況把握も兼ねて私も飛ぶ」
風吹一佐は言い
「艦長には敵いませんよ、でもくれぐれも気をつけて下さいお二人共」
矢口二佐は言い艦内艦橋に戻り、風吹、深町両一佐とも既にエレベーターで甲板上に上げられていたＦ―３５Ｊ／Ｂに搭乗しそして発艦して行く。
ずいかく艦橋
「全く、鮮やかに決めてくもんだあいつも」
矢口二佐は言い
「あいつには空がどのように見えてるんだろうな・・・」
矢口二佐は呟いたのだった。

艦隊防空イージス護衛艦ＤＤＧ１８０「はぐろ」右舷　ウィング
「鮮やかに決めて行ったな」
発艦して行くＦ―３５Ｊ／Ｂを見て俺は言い
「ええ、国内でも先の尖閣紛争でくう・・・ゲフンゲフンゲフン、大変失礼しました艦長「航空機搭載型護衛艦いぶき」の活躍で中国の尖閣奪取を阻止。これが国民に受け入れられたようで今回の二番艦の建造時も騒いだのは例の党のみですよ」
航海長の山本裕樹三佐が俺の横で言う
「山本三佐、厳密には「いぶき」はその先駆けとなっただけだ、確かに

いぶきがなければ中国軍を止める事は出来なかっただろう。だがそれももう過去の話だ。」
　俺は言った。先の紛争後日本は尖閣の領土問題を解決し中国に尖閣に眠る油田の共同開発を持ちかけ日中で正式かつ公式に書面を交わし開発を始めこれがきっかけとなり互いに抱いていたしこりがなくなり未来を見据える一つになった。
「今は日本も中国も互いに共通の敵さえある始末だものな」
　俺は艦上空を飛んでるＦ―３５Ｊ／Ｂを見ながら言い
「「東亜連邦」ですか艦長」
　言われ
「ああ、中国にとっては憎たらしい事この上ないだろう。国民を虐殺されれば」
　俺は言い
「あれは衝撃的な映像でしたね、まるでアジア中えの見せしめとでも言うかのような」
　山本三佐は言い
「だが奴らも心穏やかではないだろうな、「いぶき型二番艦ずいかく」の登場で」
　言った。すると
「どう言うことですか艦長」
　山本三佐は俺を見て言い
「東亜連邦の空母機動部隊は共産圏のお古いわいる中古品を買ってアップデートしたいわば半分ボンコツ空母だ。それに随伴する護衛もお粗末だ。米国・中国・そして日本どの国も空母を運用するならば「イージス艦」による艦隊防空は必須とも言える。以前にデータだけは見た事があったが奴らは確かに駆逐艦・巡洋艦と頭数はこれでもかというくらいにあるがイージス艦は一隻もないそれに「ずいかく」の艦載機は「いぶき」の二倍以上だ。確かにあっちの旗艦「グルシャ」は６０機積んでるが我国の空自のパイロット練度的な事を考えると例え４５機対６０機でもほぼ互角かそれ以上の戦いができる。」
　データ上の話を航海長に言い

「なる程、艦長さすがですね敵を調べ対策練る敵を知れば百戦危うからずですね」
山本三佐は納得したかのように言った。
「〔東亜連邦でも「ずいかく」は脅威になるだろう。自衛隊の空母としては今の所は搭載機も互角かそれ以上の戦いをする事ができる〕」
思いながら艦橋内に入り
「この先何もなければいいがな、山本三佐此処を頼む私はＣＩＣに行く」
言い俺はＣＩＣに趣いた。遠き海の向こう東亜連邦では既に第三国経由で「第６護衛隊群」の情報がわたっていた。そして経験浅き艦隊の運命の針が動き出す。

第７話～東亜連邦～

東亜連邦議会

「日本は航空機搭載型護衛艦と行っているが事実上の空母ではないか」

議員の一人は写真を見て言い

「搭載艦載機機数も一番艦「いぶき」の比ではないぞ４５機だぞ４５機戦闘機だけでも」

もう一人の議員は喚くが

「空母機動部隊と言うからにはどれほどの物かと思っていたがたかだが７隻ではないか我々の主力艦隊「北方艦隊」の敵ではない、駆逐艦、巡洋艦を合わせれば空母の護衛は十分に事足りる」

楽観ししているが

「これを見てもか、愚か者!!!」

議場に居る議員が怒鳴り艦隊の映像が出ると議場は静まり返る

「情報部が第三国経由で入手した断片的な日本自衛隊空母機動部隊の情報です。」

担当者は画面を指し

「空母を挟むように前衛に陣取っているのが日本艦隊の防空の要「イージス巡洋艦」です艦番号からこの二隻のイージス巡洋艦は１７９が「まや」、１８０が「はぐろ」両艦共に造船上から完成し部隊に引き渡されたばかりの最新鋭のイージス巡洋艦であります。先ほどおっしゃった「たった７隻」とありますがこれが二隻いるだけで我々にとってはとてつもない脅威となります。両艦共に最新鋭のイージスシステムを搭載し艦隊の目となります。ＶＬＳのミサイルも従来のイージス艦とは違う可能性を考慮しなければなりません」

イージス艦の説明をし

「次に問題のいぶき型二番艦「ずいかく」ですがこれは「いぶき」とは全くの別物と考えるのがいいかと思われます。」

担当官は書類をめくり

「一番艦「いぶき」は搭載機数１５機予備機含む哨戒ヘリが二機と比較

的軽空母ですがその実力は侮れません。「尖閣紛争」の際には四倍以上の戦力の広東を無力化し日本が勝利した実績があります。なにより現艦隊司令秋津竜太海将補が当時艦長として采配を取り数で勝負は決まらないという驚愕の結果を産みました」

更に資料をめくり

「二番艦「ずいかく」は「尖閣紛争」のデータをあらゆる角度から検証した結果が艦の大型化そして搭載機数の増加を決定づけたと思われます。いぶきが１５機に対してずいかくは倍以上の４５機哨戒ヘリを含め５０機と離島防衛の要となる事は必須と言えます」

ここまで説明し

「何か質問のある議員の方居ますか？」

言い、一人が手を挙げ

「イージス巡洋艦や空母の事はよく分かった。空母の後ろ、後衛の艦の説明はないのかの」

言われ

「わかりました。艦隊の後衛をになっているのはあきつき型駆逐艦が一隻にあさひ型駆逐艦が１隻、まずあきつき型駆逐艦ですが日本が独自に開発した艦で防空戦にやや比重が置かれていますが柔軟に事に対処可能な言うなれば「日本版ミニイージス艦」と言うべきでしょう。次にあさひ型駆逐艦ですがこれは対潜戦闘にやや比重をおいた対潜警戒駆逐艦と言えます。最後に日本の最新鋭の潜水艦もおそらくは艦総数から言えば１～２隻が海中に潜むと思われます。」

説明し

「国防大臣、日本の新空母機動部隊を前に西ノ島の奪取は可能なのかね」

官僚は言い

「はい、正直に申せば厳しい戦いになります。敵の艦載機は最新鋭のＦ―３５Ｊ／Ｂが１飛行隊が５機編成としても８個飛行小隊、８機編成としても５個飛行小隊があり護衛のイージス巡洋艦、汎用駆逐艦、潜水艦共に最新鋭いかな我々が艦載機数で１５機優っていても自衛隊の前には不利などとは合ってないようなものヘタを打ては機動部

隊を失う事になります。」
言い
「なる程、軍には覚悟してもらわないといけないというわけか」
官僚は言い
「上に報告を入れた上で指示を仰ぐ。」
言い
「その新しい機動部隊の第６護衛隊群の現状の居場所はどこかは把握しているのかね」
声が飛び
「情報によれば先島諸島において演習中との情報もあります」
不穏な動きは既に出ていた。

第８話～台風突破～

先島諸島　第６護衛隊群　旗艦「ずいかく」
「艦隊司令、艦長、至急ＣＩＣへおいで下さい」
艦内放送の後、白谷司令と風吹艦長がＣＩＣに入る。副長の矢口二佐がモニターを見つつ
「我々がこのままの予定航路で行けば明日の接触は避けられません」
矢口二佐は言い
「なる程、つまり「敵は」進路を変えつつあるのだな」
白谷司令は言い、同じくモニターを見る風吹一佐は
「しかし・・・これは・・・・大きいッ!!」
風吹一佐は言い
「現在台風は中国大陸向きになっており、時速１５キロのスピードで進んでいます中心気圧は８５０ｈｐａ、中心付近最大風速は７５メートル、中心から半径４５０キロ以内は２５キロ以上の暴風域となっています。気象・観測班によれば過去で二番目に大きいと」
矢口二佐は説明し
「演習航海を終え、母港に帰港する途中に大きな敵と遭遇するとわな」
白谷司令は言い
「司令、ここは安全策を取り迂回すべきではないでしょうか？いぶき型の発展型とはいえ「ずいかく」には経験はありません」
矢口二佐は言い
「いえ、ならばこそ経験すべきでしょう。艦隊にとっても航空団にとっても良い経験となるでしょう」
風吹一佐は言い
「空自は海の怖さをご存知ない!!」
矢口二佐は風吹一佐に言うが
「だからこそ「経験」すべきだ。戦闘中にでも台風が来たからと言って戦闘は中断できない」
風吹一佐は言い
「ふむ・・・よかろう。就役したばかりの「ずいかく」での台風下で

の航海訓練は必要だ、各艦に通達、針路はこのままだと」
白谷司令は言い
「了解」
風吹一佐と矢口二佐は言った。各艦に通達され

イージス護衛艦　ＤＤＧ１７９　「まや」
「ほう・・・・風吹の奴このまま台風に突っ込むか・・・願ってもない良い訓練になるな。」
イージス護衛艦「まや」艦長の木村哲郎一佐は帽子をかぶり直し
「風速７０キロメートルを突っ切ろうってか、副長、総員配置で万全の状態で備えろ」
木村一佐は指示をだし

イージス護衛艦　ＤＤＧ１８０　「はぐろ」
「過去二番目に大きい勢力の台風に突入だと?、風吹の進言か」
俺は言い
「高本二佐、総員配置で万全の状態にせよ」
俺は翼に言い
「了解しました艦長」
翼は言い指示を手早く出しつつ俺は
「いくらアメリカ海軍で5年訓練をしてても海の環境が違えば状況もまるっと変わってくる。さぁて海の怖さを思い知ってもらおうか、風吹一佐」
俺も言いつつ帽子をかぶり直す。

ＳＳ５０９　せいりゅう
「台風を突っ切るってか、艦長も司令も思い切った決断をしたな」
指示書を見てしょうりゅう艦長の深町洋一等海佐は言い
「無茶をしますね、上も」
速水健治二等海佐は言った。
「でも船酔い続出で航空団の連中がぶっ倒れないといいですがね」

航海長の渡瀬吾郎三等海佐は苦笑しつつ言い
「洋上艦は大変だぜ・・・・」
深町一佐も紙を握りつつ笑った。

ＳＳ５１０　しょうりゅう
「艦長、艦隊はこのまま突入するようです」
副長の山中栄治二等海佐は言い
「ふむ・・・確かに経験が必要だろう。台風下においての訓練は貴重な経験となるだろう、航空団や新任の艦長にとっても」
海江田四郎一等海佐は言い
「今頃、洋上は戦場だな・・・・」
そう呟いた。無事艦隊は母港に戻ったが台風での経験は貴重な経験となったのは言うまでもないだろう。

第9話～優希の過ごす一日～

第6護衛隊群　イージス護衛艦「はぐろ」　甲板

「ふぅ・・やっと終わった・・・やはり此処でないと落ち着かない」

俺はイージス護衛艦「はぐろ」甲板上にいた。先程まで防衛省が許可したマスコミの取材の為軍服を着て取材を受けていた

「艦長、お疲れ様ですようやく休暇ですね」

甲板にいた乗組員に言われるが

「まぁな、でも海上自衛官の性かな・・・護衛艦の上にいないと落ち着きそうにない」

俺は言い艦を見上げる。そして

「例え艦の中でも休めるうちにゆっくり休んでおけよ・・・今に目の回るレベルで忙しくなる」

言い艦を下りた。俺はそのままレストランに入り昼食を取る。

「ビーフシチューランチとブラックコーヒー一つ」

お冷を飲みつつメニューが運ばれてくるのを待っていると

「お客様、申し訳ありませんが相席よろしいでしょうか?」

店員に言われ

「構いませんよ」

答えそのままお冷をついで飲んでいると

「しつれいしま・・・・」

顔を上げると、そこに居たのは高校の先輩だった佐伯真珠だった。

彼女は座り

「ひ、久しぶりね・・・」

彼女は恐る恐る俺に声をかけ

「びくつかないで下さいよ、[色彩の女王]の名が泣きますよ?」

言った。方や海自一等海佐、方や世界に名が知れた名画家思ってると

「そんな事ないわ、私も日向も菖蒲も父さんもお母さんもずっと心配してた、先の事件でハラキリさせられて閑職に追いやられたって。せっかく護衛艦の艦長になったのに解任されたと・・・・」

真珠先輩は言い
「仕方がなかった事です、艦のトップが全責任を負うのは当然の事ですからね。命令を逸脱し、艦を乗組員を危険に晒せば責任はとらねばなるまいそれが幹部の責任ですよ」
俺は言った。ランチがが運ばれ
「ふぅ・・・うまい」
俺は言い真珠はサンドイッチを食べ終え会計を済ませ外に出ると
「一ノ瀬、少しいいかな?」
真珠先輩は言い
「ええ、構わないですよ」
俺は言い真珠先輩に案内されるままに連れて行かれ
「ここは・・・・」
俺は呟く。ここはよく高校の時俺や翼それに木村とも来ていたもちろん真珠ともそして真珠は振り返り
「一ノ瀬、今の日本に・・そこまで・・貴方が命を賭けてまで守る価値はあると思う?」
真珠先輩は悲しそうな顔をして言い
「政治家はなんでもかんでも嘘を付き、この前のような時もそうだった。絵かき仲間に中国の方がいたけども「なぜ一ノ瀬中佐が処罰されるんだ、日本の法律は明らかにおかしい」言う方もいた、貴方の行動が間違っていないと言う人も、それでも貴方は処罰されて艦長職を解任された。ねぇ優希もう十分じゃない、国にそして私達国民に対する義務・責任は十分果たした。先の尖閣紛争時にだって自衛官としてそして軍人としても戦ったもう十分だよ。」
普段あまり感情を表に出さないような真珠先輩がそこまで言うのは珍しいと思いつつも
「いつも気にかけてくれてありがとうございます。それと行ってなかったですけども俺、もう一線に復帰したんです。どの艦とは言えないですけれど昇進付きで艦長職に復帰したんです」
答え
「えっ・・・・・」

真珠先輩は言い
「イージス艦の艦長に推薦されてね、それとさっきの問いに答えるならば、どんなに腐っていても俺は今の国は守るべきだと思う。自分の命を賭ける価値があると思っています」
答え
「そう・・・言うと思った」
真珠先輩は言い
「私はこれ以上貴方に危ない事をして欲しくない、仕事ならいっぱいある。私や日向に菖蒲達と一緒に絵の道に戻る事だって」
真珠先輩は言い
「木村や部下の高本それに風吹に大勢の仲間をほおりだしてそんな無責任な事は俺にはできない。真珠が絵を書く事に誇りを持ってるならば俺も同じだ、制服の袖の印に誇りを持ってる。」
自分の意思を言い
「それが貴方の答え・・・・・」
真珠先輩は言い、俺は時計を確認し
「スミマセン、おじさんやおばさん達によろしく言っていたと伝えてくれ」
俺は言うとそのままその場を後にする。その場に残された真珠先輩は
「・・・・いい加減気づいてよ・・・・・・・鈍感・・・・」
つぶやいたのだった。優希が第６護衛隊群所属と知る事になるのは先の話。休暇明けに第６護衛隊群は更なる練度向上の為に演習に出航するのだった。

第１０話～想い～

佐伯宅
夕食時

「今回は、防衛省の許可が降り新たに新編成された海上自衛隊の事実上の空母機動部隊「第６護衛隊群」について取材してまいりました」
テレビのキャスターは言いイージス艦の映像や潜水艦の浮上する所そして搭載している艦載機のＦ―３５ＪＢの発艦するシーンなどが流れる
「第６護衛隊群と言いますと目玉はやはりいぶき型二番艦「ＤＤＶ１９４ずいかく」でしょうか」
もう片方が言い
「そうですね、先の３年前の有事の戦闘をあらゆる角度から検証されそのデータの元新造された「護衛艦」です」
説明している
「新しい護衛艦か、確かに必要だな。自国の領土を守る為にも、有用性は既に３年前に証明済みだからな」
私の父は言い、
「でも戦闘になるような事はもう起きて欲しくないわ」
母も言っている。
「戦後の世代にはご苦労をかけて申し訳ないとずっとおもってた。ようやくあるべき姿に帰りつつある」
祖父もお茶を飲みつつ言い
「うん、身近に自衛隊員いるからよくわかるよね。」
「そうだよね!!」
日向や菖蒲が言った。恐らくは一ノ瀬や木村達の事だろう。家族と共にテレビに視線を戻す。
「第６護衛隊群は旗艦「ずいかく」を筆頭に海上は２隻のイージス護衛艦・２隻の汎用護衛艦でずいかくの護衛を担当し海中においても潜水艦が数隻随伴するとのことです。」
テレビでは解説している。そして

「今回は第６護衛隊群の幹部の方にお話を伺う事が出来ました。」
　次の瞬間に私は驚きを隠せなかった。
「第６護衛隊群　所属　一ノ瀬優希一等海佐」
　テレビにはテロップが流れており
「本日はお時間ありがとうございます。」
　レポーターは言い
「いえいえ、国民の皆様に知って頂くには重要な事と思っています。」
　何と優希が制服姿で写っていたのだ。これには両親も日向も菖蒲もそして祖父も
「左遷させられたと聞いていたが、現場復帰していたのかそれも一佐に昇格して」
　父は言い
「一佐・・・か、わしらの時代で言えば海軍大佐か出世したな。となると巡洋艦の艦長か潜水艦の艦長かはては空母の艦長か、流石一ノ瀬中将の孫だ転んでも唯では死ない」
　祖父も自分の事のように喜んでいる。
「すごーい、制服姿も似合ってるし絵に書き残したいな」
　菖蒲も言い
「記念に描いてプレゼントする？」
　日向も言っている。
「まだ、必要とされているから呼び戻されたという事かしら」
　母は言い
「当たり前だ、先の有事に実際に出動し実戦を経験した自衛官は日本でもそうそいない「特殊部隊」や「海兵隊？」「空挺団」そして「第５護衛隊群」戦闘経験がある人間が指揮官である隊とそうでない隊は雲底の差がある」
　祖父は語っている。そんな中、
「一ノ瀬一佐は先の有事の際にも出動なさったと伺っておりますが、それを踏まえまして今のこの危うい状態をどう見ていますか？」
　質問され、優希は
「はい、先の有事においてですが私は、自衛官として国民の皆様をそし

て領土と国家を守ると入隊の際に宣誓しました。ですので思う所は人それぞれあったかと思いますですが、私は自衛官として自分に課された任務を遂行したに過ぎないと感じています。ただ、血を流すのは敵も味方も関係ないとても痛く、苦しいと思います。そこに敵か味方なんて関係はありません。」

優希は言っており

「実戦を、防衛出動を経験したからこそわかるんだろうな。戦えば人が死ぬ。唯々それは悲劇でしかないと彼は思ってるんだろうな」

父は言い、テレビでは

「次にお伺いしたいのですが、一ノ瀬一佐は先の東亜連邦の蛮行とも言える中国商船の撃沈・漂流していた乗組員の虐殺など如何思いでしょうか？」

言い

「国際法ましてやシーマンシップに反する行為は同じ海に生きる人間としてはあのような行いは決して許されるものではないと思っております。被害に遭われた中国商船乗員のご遺族の方々にはお悔やみを申し上げたいと思っています。」

優希はスッパリと言い切った。私もニュースで知った時は東亜連邦＝「イカれた国」と言う概念しかない。

優希の言いに

「うむ、海軍士官は常に紳士でなければな」

祖父も頷いている。だが、報道が「マスゴミ」と呼ばれる本領を発揮し始めてくる。

「ありがとうございます。では一ノ瀬一佐は万が一東亜連邦と事を構える事になった場合迷いはありませんか？」

質問し

「汚い質問してッ」

私は怒り

「落ち着いてよおねぇ」

菖蒲になだめられ

「どうどう、落ち着こうよ」

日向にも言われる。
「万が一と言っていますが、戦闘にならないに越した事はありません。ですが我々は常に「万が一」に備え鍛えてきました。命令が降れば私達は皆様を守る為に武器をとります。大事な物を守りたいだから私はこの「制服」を着います。」
優希はそれにも答えた。だが最も汚い質問を最後に持ってきたこれに私は激怒せずにはいられなかった。
「ありがとうございます。最後になりますが、一ノ瀬一佐は護衛艦「ふゆづき」の艦長時代に東亜連邦海軍と一触即発の事態を起こしておりますこれについてはどう思っていますか?」
明らかに関係ない質問であった、それに優希にとっては汚点扱いされている暗部でもあるしかし
「はい、その件につきましては国民の皆様や当時の乗員に多大な迷惑と命の危険に晒した事については艦長として今現在でも責任を感じている所存です。私が命令を無視し勝手に動いた事により危機的事態になりかねなかった事など大変申し訳なく思っている次第です。今後はこの様な事がなきように規律・命令を遵守し一層精進していく所存です」
語った。最初に口を開いたのは祖父だった。
「何なんだこの報道は彼を公開処刑にでもするつもりか!!」
激高し、次に
「なんなのあれ、中国籍商船を守る為に止む終えずにやったって事が綺麗さっぱり抜けているじゃない!!、ふざけるんじゃないわよ!!」
私や祖父が激高し
「お義父さん落ち着いて下さい」
父がなだめようとするが
「同じ海軍士官としてあんなことされて黙ってられるか」
旧海軍出身の祖父は激昂し
「あ〜〜〜もう我慢できない、局にクレーム入れるわ。命令無視したのは事実だけども関係ない質問したり都合のいいように歪曲しているし」

私は私でスマートフォンを取り出そうとするが
「おねぇ、落ち着いてって後先考えない行動は身を滅ぼすって」
「おねぇってば!!」
日向と菖蒲にも言われ、テレビでは
「では艦内にご案内致します、どうぞ」
優希はそう言い最新鋭護衛艦「ずいかく」の一部ではあるが案内していた。
「広い格納庫ですね、此処に艦載機を収納するのですか?」
一部はモザイクが掛かっている映像が流れ
「はい、そうです。詳しい機数は特定機密につきお答えはできませんが」
優希が釘を刺している。
「一番艦の「いぶき」以上と伺っていますが」
レポーターは言い、優希は再度
「詳しい機数は特定機密につきお答えは致しかねます」
機密以外の箇所を案内し
「本日はどうもありがとうございました」
レポーターは言い
「こちらこそどうもありがとうございました。」
優希も言っている。でも私は
「汚い・・・ホンットにやり方が汚い。確かに一部は事実でも都合の悪い所隠しているじゃない。本当に納得できない」
私は言い
「おねぇちゃん」
「・・・・・・・」
菖蒲は言い日向はテレビ画面を見ている。
「ごちそうさま」
佐伯真珠自室
私はそのまま自室に入り、ベットに倒れこみ
「ここまでされてまで守る価値のある国なの?、国会議員は平気で大嘘を垂れ流して現場で問題が起きれば責任取らずに現場の人間にハ

ラキリさせて、報道は報道で一部事実を歪曲するし、腐りきってる・・・・命かけて国を守る人達がなんでこんな屈辱的な目に合わないといけないの、なんで私は、私は優希を守ってあげる事ができないの」

わかってはいた、軍人の優希と画家の私とでは生きる世界が違うと言う事も。でも優希は言っていた。

「どんなに腐っていても俺は今の国は守るべきだと思う。自分の命を賭ける価値があると思ってる」

と優希は言っていた。

「守られてばかりの人生って・・・」

私は思っていた。

第11話～調査航海～

第6護衛隊群　イージス護衛艦「はぐろ」
小笠原諸島近海
イージス護衛艦「はぐろ」　艦橋
「一ノ瀬艦長、今回は艦隊での任務ではなく我が艦単独でとのことでしたが」
航海長の山本三佐は言い
「任務内容は海底調査とある」
俺は言い副長の高本二佐が
「東亜連邦の仕業ですかね」
言い
「おそらくはな、領海に侵入し、ソナーでも仕掛けてるんじゃないか」
見解を述べる
「ソナーですか艦長」
言い
「ああ、東亜連邦のバックにいて糸を引くとしたらどこだ？」
高本二佐と山本三佐に訪ね
「・・・・ロシア・・・ですね」
二人は言い
「そうだ、東亜連邦の装備のほとんどが半島経由ともあるがほぼがアッチ製だ。それに当海域でも何かを海中に投げ込んでいる東亜連邦の駆逐艦2隻が哨戒活動中のP―1哨戒機によって目撃されてる。つまりは奴らは「人の庭に盗聴器」を堂々と仕込もうとしてるわけだ」
俺は答え
「なる程、我々の潜水艦の諺文を取ろうとしてるわけですね」
山本三佐は言い
「なる程な・・・・あん畜生め」
翼も言っている。
「艦長、話変わりますけどあのインタビュー酷かったですね。マスコミの奴ら艦長いとって一番触れられたくない所をほじくり返しや

がって」
山本三佐は言い
「ホントですよ、当時も今も先輩を支える俺としては悔しくてテレビに思わずマグカップ投げつけちゃいましたよ」
高本二佐も言っているが
「だが事実だ。命令を逸脱し艦と乗員を危険に晒した。これは俺に一生付いて回る事だよ。本来ならもう除隊するまで閑職だろうと覚悟していた自分を呼び戻してくれた上層部や秋津海将補に感謝している」
俺は言い
「でも、中国では一佐は英雄扱いされてますよ。昨日のインタビュー中国でも取り上げられていたそうですけど、テレビ局に対する非難轟々だったそうですよ。」
山本三佐が言った。
「どうあれ、俺は命令系統を逸脱した事に変わりはない」
言い
「じゃぁ、航海長ここ頼むぞ」
俺は山本三佐に言い
「了解しました」
俺は翼と「ＣＩＣ」に向かった。

数時間後

「これで何個めだ」
海中のモニターを確認しつつ俺は言い
「確認しただけでも7個は発見しました」
砲雷長子林三佐はモニターを確認しつつ答え
「対処は如何しますか、艦長」
聞いてくる。
「とりあえず、司令部に報告を入れろ。「領海内にてソナーらしき音響装置を発見」とな」

指示をだし
「上の判断を仰ごう。」
俺は言った。しかし
「艦長、艦橋より報告、漂流者を目視、指示を求む。」
報告に俺や高本二佐それに子林三佐も顔を見合わせ
「司令部に報告を入れた後救助だ。」
俺は言い直ぐに内火艇を下ろす命令をだし漂流者を救助する。

「一体どうなってるんだ?」
翼は言い
「俺にも皆目検討もつかんよ」
答える。そして
「艦長、救助活動終了致しました。彼らから話を伺いましたが彼ら台湾の漁師だと言っています。」
「台湾?!」
高本二佐は言い
「はい」
聞き取りを行った乗員は言い更に
「怪我人も何名かおります。それが銃で撃たれたような傷としか言いようがないものです」
「重傷者はいるか?」
俺は聞き
「いいえ、不幸中の幸いですが軽傷者のみです。」
「東亜連邦か・・・・」
話を聞き俺は呟き
「はい、彼らも言っています。「船を東亜連邦の駆逐艦に沈められた」と」
部下は言い
「彼らと直接話す事は?」
聞き
「大丈夫です、艦長」

部下が頷き
「それと近海に僚艦はいるか?此処は危険海域だ。ヘリで後送しちゃんとした治療を受けさせたほうが良い。」
通信士に言い
「直ちに取り掛かります」
付近に僚艦がいないかを確認し始める中
「艦長、こちらです」
部下に案内され漂流者のいる救護室に向かう。

救護室
「海上自衛隊護衛艦「はぐろ」艦長の一ノ瀬一佐です」
敬礼し、乗組員の方々に話を伺う。
「奴ら警告もなしに撃ってきおった」
「本当だ、この海域もあぶない艦長さん」
怯えたように言い
「ほかの乗員の方々は?」
尋ねると
「最初の砲撃で船ごと・・・我々は運良く海に放り出されたおかげで助かりました。でも東亜連邦の奴らは血も涙もない悪魔です。海で漂ってる我々を銃殺しようとするんです」
「でも俺達は幸運だ、日本海軍の巡洋艦に助けてもらえた」
もう一方の乗員はよほどの恐怖だったのだろう。泣いていた。そこに
「艦長、付近の僚艦でＤＤＨ「いずも」とその護衛についているＤＤ１０７「いかづち」に連絡が着きました。救護ヘリを飛ばすとのことです」
通信員が来る。それを皆に伝え
「救護ヘリがもう少しできます。不自由な思いをさせて申し訳ありませんが今しばらくお待ち下さい」
俺は頭を下げ
「とんでもないです。皆さんは私たちにとって命の恩人です。こちら

こそ本当に有難うございます。」
救護室を後にしＣＩＣに戻る。
「艦長、艦隊司令部より入電です」
通信員は言い、ヘッドセットを装着し
「一ノ瀬一佐です、司令」
言い
「おお、良かったつながった」
司令官は言い
「艦の水中カメラの映像を上にあげたがやはり音響ソナーの可能性が高いとの事だ」
司令官は言い
「では、本艦の任務は」
尋ね
「例の音響ソナーの回収を行えとの事だ。ここまでナメた真似をされっぱなしというのもだろう。」
司令は言い
「でしたら一個を回収し残りの６個については魚雷で破壊しては如何でしょうか？」
お伺いを立てるが
「一ノ瀬一佐、流石に武器の使用は不味い。それは許可できない。」
まぁ宛にはしていなかったが仕方がない・・・・と思っていた時
「艦長ッ、レーダーにコンタクト」
レーダー要員が報告し
「この距離まできづかないとなると・・ステルスか」
俺は言い
「東亜連邦機となればＭＩＧ３５です・・・つまり近海に敵空母が居る事になります。」
更に
ピーーーーーーー
「艦長ッロック・オンされました」
艦内に警告音が鳴り響き

「司令、緊急です。領空侵犯したとおもしき東亜連邦機より警告なしでロック・オンされました。」
ヘッドセット越しに報告し
「何?!」
司令は驚愕し
「恐らくは近海に北方艦隊旗艦空母「グルシャ」がいるものと思われます。」
言い
「砲雷長、向かってくる機数はッ」
叫び
「ＭＩＧ３５が三機本艦に向かってきます。ミサイル射程まで分とありません、艦長ご決断を」
子林三佐がレーダーを見ながら言い
「武器の使用は・・・認められていない、回避だッ」
事は非常事態に発展しようとしていた。

第１２話～重い政府の腰～

首相官邸
日本国総理大臣　伊部仁三
副総理兼財務大臣　天羽良治
防衛大臣　西郷孝頼
外務大臣　木戸繁晴
官房長官　福澤富雄

「小笠原諸島で海上自衛隊のイージス護衛艦「はぐろ」が火器管制レーダー照射を受けただと」
　総理大臣伊部仁三は言い
「はい、先ほど艦長の一ノ瀬優希一等海佐より報告を受けております。東亜連邦の艦載機ＭＩＧ３５かと思われます。更に「はぐろ」には東亜連邦により襲撃され沈められ漂流していた所を「はぐろ」に救助された台湾漁船の乗組員もいます。」
　西郷防衛大臣は報告し
「それで護衛艦「はぐろ」に対処は」
　天羽副総理は言い
「はぐろは回避行動に徹しています。ですが総理ここで「撃たねば」彼らは殺されます相手は、東亜連邦が常識の通じるような相手ではないという事はよくわかっているはずです。なにより東亜連邦が付け上がる事になります。「自衛隊は一発も撃ってこない」いや「撃ってくる事ができないと」総理ッご決断を」
　西郷防衛大臣は言い伊部総理に武器使用の決断を迫るが
「バカを言うな、一発でも撃てばもう後戻りはできなくなるんだぞッもっとよく考えろ、東亜連邦と事を構える事になれば大事なるんだぞ、先の有事を忘れたのか」
　外務大臣の木戸が西郷防衛大臣を怒鳴り返し
「この状態で撃たずしてどう切り抜けろと言うのだ貴様は現場の自衛官に死ねと言うのかこの大馬鹿野郎ッ」

木戸外務大臣を怒鳴り散らしたのは官房長官の福澤だった
「ッ」
木戸外務大臣は黙り
「総理、事は緊急です。敵機への攻撃は許可しない方針で「対ミサイル防御」のみに限定し武器の使用を許可すべきです。」
冷静に官房長官の福澤は伊部総理に進言し
「敵機が放つミサイルのみです。敵は自衛隊の優秀さを全く知らない。かつての尖閣有事の際に艦隊の防御を中国はほぼ突破できなかった、絶壁の守りを誇ったその腕を彼らに見せれば良い。自衛隊と事を構える事がどう言う事かを教えれば良いのですそれにはぐろは日本の領海に居るのですから」
極めて冷静に福澤官房長官は言った。
「敵機の発する対艦ミサイルに限定しての防御か」
伊部総理は言い
「確かに、それならば筋は通っている「防衛戦」は我々の十八番だろ」
天羽副総理が言うなか
「外務省としては認められない、一発でも撃てば東亜連邦に口実を与える事になりかねない」
食い下がる中
「ではお聞きします、木戸外務大臣。先の中国籍商船の撃沈や乗員の虐殺等などを行うやからを誰が信じますか?外交とは互の信頼があって成り立つものでは?人の庭に銃を持って入って来るやからに警告し引かないなら実力を持って排除する。こうして不毛な争いをしている間にも一ノ瀬一佐以下３００人の乗組員が危険に晒されているんだぞ」
福澤官房長官は言い何かに気づいたように
「さてはお前、前のように一ノ瀬一佐が暴発でもすればとか考えてんじゃないだろうな。」
言い
「・・・・・・・・・・・・・・・」
何も言えずに木戸が黙り

「情けない・・・本当に情けない。一ノ瀬一佐がかつて中国籍商船を東亜連邦海軍の潜水艦の雷撃から救った時、自分の首が飛ぶのを承知で命令に背いた。彼はあの時艦隊司令に言った言葉がある、伊部総理はご存知ですよね」

福澤官房長官は尋ね

「もちんろんだ彼は「誰かを処分せねば終わらないでしょうこの問題は。私一人が解任される事でこの問題が沈静化されるなら安い物です」そう言ったんだ。」

伊部総理は言い

「その意味が分かるか?事態の沈静化のため、政権にダメージがいかぬように自ら人身御供になった、ハラキリを行った。彼は世間中からの非難に晒された。「暴発した自衛官」と言うレッテルを貼られそれでも彼は燻らなかった。今度は我々が現場を守るべきではないのか?今考える事は己の保身なのか?外務省の人間ならお前だって知っているはずだろう、あのあと当時の一ノ瀬二佐が世間の非難にさらされる中、中国政府は公式の場で彼を指して国家元首が感謝の意とそして謝意を表明した事日本にある中国大使館から外務省・官邸と抗議の電話が鳴り響いた事、それを知っていてそういう考えを持ってるのなら、お前は官僚失格だ」

福澤官房長官は言い

「私は現場の乗員の身の安全を守る為、並びに自衛隊法第９５条の２「武器等防護」が十二分に適用されると思われます。よって武器の限定的使用の許可を進言致します。」

伊部総理に向き直り、福澤官房長官は言い

「なる程な確かに法律に則っている。問題はないだろう。」

伊部総理は言い

「天羽副総理はどう思うかね」

尋ね

「はい、私も総理と同じ考えです。依存は全くございません」

天羽副総理は頷き

「西郷防衛大臣」

次に聞き
「依存ありません」
防衛大臣も頷く。
「木戸外務大臣・・・・・・言わなくとも分かるね」
伊部総理は言い
「はい・・・・全面的に同意致します。」
木戸外務大臣は不服そうではあったが渋々というように従った。
「西郷防衛大臣、艦隊司令に通達、イージス護衛艦はぐろに連絡「武器の使用」を限定的に許可すると。但し「敵機」の撃墜は許可しない。これを厳守してくれ」
西郷防衛大臣に命じ
「了解致しました」
部屋から出ていくそして
「木戸外務大臣君は少し待ってくれ、話す事があるんだがいいかね」
伊部総理は物腰柔らかく言っているが目が笑っていないと見えるのはまた別の話。

第１３話～対空戦闘～

小笠原諸島近海　イージス護衛艦「はぐろ」ＣＩＣ
「本当ですか、司令」
俺はヘッドセット越しに言い
「ああ、だが「対ミサイル防御」のみだ。敵機の撃墜は許可しない。防御能力の高さを見せてやれ」
司令は言われ
「感謝します」
言い艦長の席に座り
「総員対空戦闘用意ッ、繰り返す対空戦闘用意こいつは訓練にあらず」
乗組員たちは頼もしい事に慌てる事なく配置につき
「艦長、対空戦闘総員配置につきました」
砲雷長の子林三佐は言い
「敵機三機共に対艦ミサイルを発射確認ッ」
レーダー要員は言い
「対ミサイル防御、目に物見せてやれ」
俺は言い
「６発接近」
レーダー要員は言う中この艦の欠点とも言える物が一つあった。本来なら最初にミサイル攻撃を受けた際にはＥＣＭ妨害電波を発して目潰しをかけるがこのはぐろにはＥＣＭは装備されていない、というより機能を排除されている形になっているのだ。
「クソッ目潰しができないんじゃ対処法は限られる」
俺は毒付き
「艦長、敵対艦ミサイル接近距離１２６００」
レーダー要員は言い
「対空ミサイル発射用意ッ」
子林三佐が言い
「ぶちかませっ」
俺も言い

「テーーーッ」
前甲板ＶＬＳから６発の対空ミサイルが発射され、敵機から発射された対艦ミサイルに向かう
「・・・・・・・」
「・・・・・・・」
「・・・・・・・」
息を呑みディスプレーを見る本艦より発射されたミサイルは４発に着弾したが
「二発すり抜けました、距離７６００」
言い
「主砲で対処」
俺は子林三佐に指示をだし
「主砲用意ッ」
子林三佐は言い
「左７５。まっすぐ突っ込んでくる」
主砲のけたたましい射撃音が聞こえ
「一発撃墜、更に一発突っ込んできます」
レーダー要員は言い
「近接防空火器オープンコントロール」
２０ｍｍ機関砲の射撃音が鳴り響き最後の一発を叩き落とす。がまだ安心はできない
「レーダー、敵機からの再度突入は」
言い
「諦めの悪い連中ですよ、最初の三機は撤退したようですが、更に４機確認、ミサイル発射を探知ッ、数８発」
レーダー要員は報告し
「砲雷長ッ」
俺は言い
「お任せをッ、データー入力発射用意ッ」
「撃てっ」
俺が言い

「テーーーーッ」
更に前後甲板から４発づつ合計８発のミサイルが飛んでくるが
「５発名中、３発が突っ込んできます、距離２５００近すぎますッ」
状況を報告され
「主砲じゃ間に合わない、ＣＩＷＳで対処、チャフ発射ッ」
命令する。２０ｍｍ機関砲の射撃音と共にチャフが発射され
「ＣＩＷＳで２発仕留めましたッ」
「残り一発はッ」
翼が言い
「本艦命中コースですッ」
焦ったように報告する、当然だイージス艦は被弾しない事を前提に作られている。一発でも被弾しようものなら確実に海の藻屑だ。
「チャフの効力はッ」
俺は横から聞き
「以前本艦上空に」
「チャフをくらえッ」
「くらいやがれ」
「くらえっ」
俺達は叫んでいた。
「命中軌道それますッ」
その刹那に振動と揺れが艦を襲い
「うおっ」
「うわっ」
「おわっ」
「艦首右舷破損浸水、命中軌道を逸れた敵対艦ミサイルの爆圧により破損したと思われます。」
報告と共に警報が鳴り響く
「破損付近に応急班を送れ、浸水を止めろッ」
その時俺の視界がぐにゃりと歪み
「{まさか・・・・さっきの}」
爆圧の衝撃でよろけた際に近くの機器に頭部を強打してしまって

いたのだ。
「く・・・くそっ・・・・・・」
翼や山本三佐が何か言っているように聞こえるが、そこで俺の意識はぷつっと途切れてしまったのだった。

第１４話～つのる危機感～

首相官邸
「何?!」
伊部は報告を聞き
「はい、はぐろはなんとか帰港しましたが艦長の一ノ瀬優希一佐が重症を負い意識不明のまま病院にヘリで搬送されました、指揮は副長の高本翼二佐がとっているとの事です」
西郷防衛大臣により報告を受け
「おのれ・・・・東亜連邦の奴ら・・・・」
伊部は言い
「人的被害は奇跡的にもといいますか不幸中の幸いというか彼一人で済みました。」
西郷防衛大臣は言い
「そんな縁起でもない事を言うんじゃない!!」
天羽副総理が怒鳴り
「失礼しました。」
西郷防衛大臣は謝罪し
「それで艦の損傷は」
努めて冷静に伊部総理は言い
「はい、艦首付近に対艦ミサイルの爆圧でやられたと見える浸水一箇所です」
報告し
「彼が指揮官だからここまで軽微な損害で済んだ共言えるな」
伊部総理は言い
「それと現場からでＮＯＬＱ―２Ｃ電波探知装置ではなくＮＯＬＱ―２Ｂ電波探知妨害装置に換装するべきという声があります」
報告を聞き
「何が行けなかったんだ?」
総理は耳を傾け
「はい、分かりやすくご説明するとミサイルに対しての電子妨害いわ

いる「目潰し用の妨害電波を出すか出さないかですが、護衛艦まや・はぐろの電波探知装置は妨害電波を出しません。その機能がオミットされた状態です。最初の一撃を見舞う事ができないため戦闘においてはいささか不利である事はいがめません」
説明を聞き
「なる程、だとすれば貴重な実戦でのフィートバックになる。まや・はぐろの改修を直ぐにでも行おう。名義はいくらでもたつ。既に護衛艦「はぐろ」は修復用のドックに向かったとなれば改修するように手配を進めよう」
その頃

佐伯宅

「姉ちゃんお疲れ」
「おつかれ!!」
「うん、お疲れ、ヒナ、アヤ」
今日も姉妹で納品の為の絵を書いていたが
「ちょっと、真珠、日向、菖蒲こっち来なさい、大変よ」
お母さんに呼ばれ
「何?」
3人で居間に入るとそこには父も祖父も居たがテレビで
「東亜連邦がまたも問題を起こしたとの事です、政府発表ですと調査任務についていた海上自衛隊イージス護衛艦はぐろが東亜連邦海軍空母艦載機により攻撃を受けたとの事です。両軍共に死者は出ていないとの事ですが、このこの不測の事態において海上自衛隊イージス護衛艦「はぐろ」艦長一ノ瀬優希一等海佐が重症を負い、意識不明との事です。尚一部艦の損傷もある事から「はぐろ」は修復の為ドックに入る事となるとの事です。」
「う・・・・嘘・・・・・」
数日前まであんなに元気だのに・・・「重症」・・・「意識不明」
「い・・・いや・・・・・」

私の頭の中で最悪の方に最悪の方にと進んでいく。優希が・・「死ぬ?!」話したいこと言いたい事がいっぱいあるのに、でも頭の中は「殉職」その二文字が頭をぐるぐるとよぎっていた。そこに

「おねぇ、大丈夫だよだって一ノ瀬君だよ?前おねぇ庇って轢かれた時も無傷で生還した悪運の強さだよ、大丈夫だよ」

菖蒲は言い

「そうだよ、鋼の肉体って言われていたくらいだよ?」

日向も反応し

「一ノ瀬君の事だ、ひょっこりとまた遊びに来るさ」

父も言い

「簡単に死ぬような人間じゃないよ彼は」

祖父も言っている。私はいてもたってもいられなくなっていた。

第15話～病院での再会～

佐伯真珠・木村哲郎

「全く佐伯先輩には参りましたよ、そこまで頼み込まれちゃ俺も人の子だ断りきれませんよ」

木村君は海自制服の制帽をかぶり直し

「それで、意識は戻ったの？」

私は聞き

「ええ、全く心配させやがって。でも俺達は優希がそんなに簡単にくたばるような男じゃないと知ってますからね」

彼は言いながら病院に入ろうとしたが

「げっ・・・マスゴミの奴ら・・・・ハイエナ並みの嗅覚だな・・」

東亜連邦との武力衝突が限定的に起こった為マスゴミはどうやら自衛官関係者、特に優希や木村君が属する第6護衛隊群関係者に話を聞こうと躍起になっている。

「マズイな・・・俺と一緒に行ったら佐伯先輩も色々言われますよ。」

木村君は言っている。あの後知ったが、優希はイージス艦「はぐろ」の艦長で木村君も同じくイージス艦「まや」の艦長職についている。木村君は不何がってるが

「いいわ、上等じゃない。私も色々と「マスゴミ」のクズ共に言いたい事あったものいい機会だわ」

私は言い

「だが、俺達と同じく制服を着ていない民間人に迷惑はかけられれません」

木村君は言うが

「私ね、この前の報道見てたもの、都合よく「歪曲したり」「隠す」このどこが真実を伝えてると言えるの？」

私は木村君に言い

「でも佐伯先輩も売れっ子の画家でしょう？マスコミ敵に回すと面倒ですよ」

言われるが

「そうなったら、画家辞めるしそうだなぁ・・・優希に責任とってもらうのもいいかもしれないな」
　私は答え
「先輩・・・怖いですよ・・・・」
　木村君はドン引きしていたが
「行きましょう」
　私は一歩を歩み出そうとしたが
「ダメです、佐伯先輩に迷惑はかけられん、俺が先に行くからその後何気ないふりしてそのまま病院に入れ。病室のある階で合流しよう」
　言うやいなや木村君はスタスタ行ってしまい、早速マスゴミに捕まる
「おい、あれ第６護衛隊群のイージス艦「まや」艦長の木村一佐だ」
　直ぐに木村君を囲み
「木村さん、なにか一言お願いします。」
「第６護衛隊群の一員としてコメントお願いします」
「一ノ瀬一佐の容態についてなにかお聞きになっていませんか」
「また、一ノ瀬一佐が独断による暴走したとの噂もありますがソコの所どうでしょうか」
　私はその間にスタスタと病院の中にはいる。その頃木村君は
「艦隊の一員としては基本的にはノーコメントです。ですがあえて一言言わせて頂くならばあいつは、一ノ瀬一佐は独断でなど暴走していないとだけ彼の名誉の為に言わせていただきます。以上です」
　木村君も病院に入ってきた。
「全く、マスゴミの奴ら」
　木村君は毒付きながら合流し
「よし、行くか」
　木村君と私は彼の病室に行き
　こんこん
　ノックすると
「どうぞ」

声が聞こえ中に入ると、私も木村君その光景に驚いた
「西郷防衛大臣ッ」
木村君は慌てて敬礼するも
「敬礼は必要ないよ、一佐。私はここに防衛大臣としてではなく個人としてきている」
言われ
私はベットに目を向けると申し訳なさそうに優希がいた。
「なにはともあれ、無事で良かった。一ノ瀬君。艦は作れるが優秀な艦長はお金では買えない。」
西郷防衛大臣は言い
「ご心配をおかけして申し訳ありません、それに引き渡されたばかりの艦を傷モノにしてしまって何といって詫びればいいのか」
優希は艦長としての責任を感じているのかもしれない、しかし
「君の指揮は適切だったと検証結果が出ている。むしろ謝らねばならないのはこっちのほうだ。電子戦装備の脆弱さに気付けなかった。今「はぐろ」修復の為ドックに入っているがその際に対電子戦装備もアップグレードする事が決まった。君達に現場に不便な思いはさせないよ」
言われ
「はい、ありがとうございます」
優希は言っているが元気がない。
「ゆっくり体を休めてくれ。では失礼するよ」
言われて退室していった。私はやり取りを見ていたが我慢の出来る人間じゃないとも言えた。
「優希、災難だったな」
木村君は言い
「すまん、艦隊に穴開けて」
優希は言い
「気にすんな。むしろお前は自艦だけじゃなく。台湾の人達も守った。いずもにヘリで搬送されるその時までお前の事を心配していたぞ漁師の方々。」

木村は言い続けて
「それとなんだが、お前が送った画像なんだがやはり音響ソナーだった。それも露助製のな」
木村は言い
「あの後、第５護衛隊群を日本海から呼び戻してあの海域に送って音響ソナーを1個回収し全て破壊したとの事だ。」
報告を聞いて
「そうか・・・・秋津群司令に迷惑をかけてしまったな」
優希はいった。
「東亜連邦の奴ら悔しそうに遠目に見てたとさ。流石に知将・勇将とも言われる秋津司令率いる第５護衛隊群「いぶき」相手じゃ東亜の奴らも分が悪いと踏んだんだろう。」
丁寧に木村は説明してくれた。私は
「はい、これ見舞いの品」
クッキーを置き
「はは、退屈しなくてすみそうですね、スミマセン先輩・・・」
優希は笑いながら言うなか
私は真剣に
「木村君がいる前で今こと聞くのは卑怯だってのわかるけど、もう除隊してもいいと思う。ううん一ノ瀬は十二分に戦ったし、尽くしてきた。私は一ノ瀬がこういうふうな姿になるのを見ているなんて耐えられないよ」
言い
「・・・・・・・」
「席外そうか？」
木村君が言ったが
「そうして」
私は言ったが
「いや、このままでいい」
優希は言い
「そう思ってくれるのはありがたい、でも俺だけ尻尾巻いて逃げるな

んてできない、艦隊の皆は俺にとって家族同然だ。真珠先輩がそう言ってくれるのもありがたいことだけども」
優希は言い
「また現場に戻ってきてくれるのか？」
木村は言い
「当然だろ、俺は「艦長」だぞ。東亜のやつらにやられて黙ってられるか、次にやり合う時がくれば倍返しだ。」
優希は木村君に言っている
「それは頼もしいが・・・・その・・・・なんだ・・・・えっと」
木村君は口ごもり
「はっきりしろ、お前らしくもない」
優希は言い
「分かった、言うぞ。「佐伯先輩の気持ちにも気付いてやれ」と俺は言いたいのさ」
木村君はバツが悪そうに言い
「・・・・・・・・・」
優希は
「へっ?!」
間抜けな顔をして
「この鈍感野郎」
優希は木村君に怒られ
私は顔を赤くし俯くなか
「はっ?!、えっ?!」
状況を飲み込めて居ないのは優希だけだった。その後、混乱する優希を放置し私達は外に出る
「佐伯先輩、頑張って下さい!!」
グッドラックとでもいいたそうな顔をし
「おっと、俺はこれから艦隊の艦長会議なので失礼します」
木村君は行ってしまった。

第６護衛隊群　旗艦　ＤＤＶ１９４　「ずいかく」

「しかし今回は本当に一ノ瀬一佐にとっては災難だったな」
　艦隊司令の白谷群司令は言い
「中国の次は台湾ときましたか、懲りない国だ」
　ずいかく艦長の風吹一佐も頷き
「だがこれではっきりした事がある。」
　口を開いたのは海江田一佐だ
「かの国は我々と一戦交えるしたくをしていると判断出来る。」
　海江田一佐は言い
「ああ、俺も海江田に同意見だ」
　深町一佐も言い
「先の襲撃は我々に対するメッセージかはてまた最新鋭のイージス艦の性能がどれほどのものか探りを入れに来たか」
　言い
「いずれにせよ、一ノ瀬一佐はよくやってくれた。東亜連邦の奴らも防御能力の高さを目の当たりにしただろう。１１発撃って到達しかけたのが一発のみ。それもＥＣＭさえ装備していれば事実上は被弾０」
　白谷海将補は言い
「今日、一ノ瀬の見舞いに行きましたが「艦隊に迷惑をかけて申し訳ない」とのことでした。」
　木村一佐はいった。
「いや彼はよくやってくれている。」
　白谷群司令は言い
「だが「まや」「はぐろ」が改修・修復で抜けたイージス艦の穴は大きい事はいがめない」
　白谷群司令は腕を組み悩み
「そうですね、「まや」だけなら改修作業と言っても大掛かりなものではないのでそうそう時間はかからないと思われますが」
　木村は言い
「問題は「はぐろ」か・・・爆圧により右舷艦首付近破損、電子戦装備換装か。こっちは少し時間がかかりそうだな」

白谷群司令も言い
「そうですね」
艦隊幹部もイージス艦が抜けた事による穴埋めに頭を抱えていた。

第16話～変わりゆく時間～

あの事件からより「東亜連邦」に対する世界の目は厳しくなった。奴らはやり過ぎたと言っても言い「中国籍商船撃沈・乗員虐殺事件」「台湾籍漁船襲撃事件」そして極めつけは「自衛隊イージス護衛艦襲撃事件」と日に日に危機感が募っていく。

そして日本でも「東亜連邦」に対する警戒論は強くなり防衛の空白地帯になっている西ノ島一体に自衛隊を配備する案が出されたが、相手に口実を与えかねないとし却下となる。そして、先の事件から修復と改修作業を受けていた護衛艦「まや」・「はぐろ」の2隻は部隊に再度引き渡され艦隊に復帰した。

佐伯宅

「優希、これここでいいの？」

呼ばれ声の主の所に行き

「ああ、ここでいいよ」

俺は言い真珠に向き直った。

「今更だけど本当によかったの」

真珠は俺に言い

「何が？」

聞くと

「えっと、私達家族との同居」

真珠は言った。そう。あの事件以降、艦は修理＆改修でドック入りし俺は入院している為真珠先輩は毎日見舞いに来てくれたそして、俺達の距離はいっきに近づき交際を始め最終的に俺達は結婚し家族になる道を選んだ。俺は別に同居やそういったものに抵抗はなくむしろ真珠先輩のご両親や義妹の日向や菖蒲そして祖父など大変に良くしてもらって感謝している。

「いや、お義母さんやお義父さんに大先輩のおじちゃんにそして義妹の日向や菖蒲、家族ってこんなにも暖かいんだなって再認識してたところ」

俺は言い

下から
「真珠～～、優希く～～ん」
呼ばれ
「ご飯ね行こう」
下に降り
皆で席に付き夕食を食べる
「いやぁ、やっぱり娘はいいものだ。相手を咥えて戻ってくる。」
お義父さんは言い俺は
「あはははは・・・」
苦笑するしかなく
「お父さん、義兄さんに失礼でしょ。私たちに気使って同居してくれてるのに。」
菖蒲が言い
「お父さん、飲んだくれはダメだからね!!」
日向も釘を刺す中
「どんな形でもいいじゃないの皆がこうして笑顔でいられるなら」
お義母さんが言い
「いいえ、こちらこそ至らない所があるかもしれませんがどうぞよろしくお願いいしたします。」
俺は言い
「一ノ瀬中将の孫さんがわしの孫になるとはもうわしは思い残す事はない冥土のお土産になる」
おじいさんは言い真珠が
「もう、おじいちゃんたら曾孫抱くまで死んだらダメだよ」
言い
「はい、是非」
俺も言い
「嬉しい事を言ってくれる」
おじさんは泣きそうになっている。そんな中
「東亜連邦による蛮行が後を断ちません」
そのニュースに皆が釘付けになる

「フィリピン・台湾の漁船の拿捕・乗員の殺害と言う残虐な事件が後を断ちません。両国政府が抗議する中「東亜連邦」は
「領海内での操業は一切認めない、我々の領海での操業は万死に値する」
と声明発表しております。
このニュースに
「血も涙もない悪魔のような連中だな・・・・」
俺は箸を置きながら言い
「まったくじゃ」
同じ海軍の出身の真珠や日向と菖蒲の祖父も憤慨している。
「日本政府は、この東亜連邦の蛮行とも言える行為に対して抗議すると共に領海防衛の為に海上自衛隊の「第６護衛隊群」の派遣も視野に入れて検討している段階です」
レポーターは原稿を読む。
「嫌な世の中になったな。前にあった尖閣有事から日本と中国がせっかく手を取り合える所まできたのに、次は「東亜連邦」とは」
お義父さんは言い
「そうですね、私もそう思います」
俺は言い
「でも、くれぐれも無理はしないようにね貴方はもう一人じゃない真珠という妻が家族がいるんですから。私達も同じですけども」
お義母さんに言われる
「ええ、無理はしないです」
答え
「本当に約束よ？」
真珠に日向や菖蒲が言い
「もちろん、約束だ」
俺も言い、食後
「真珠、今更なんだが本当にごめん。」
俺は謝り
「新婚旅行の事？」

真珠は言い
「気になんてしてないよ、私は全部覚悟して承知の上で貴方と一緒になったんだよ。自衛官である夫がそう簡単に休みが取れない、ましてや今この情勢支える側の私がワガママ言ってどうするのよ。後で休みが取れそうな時二人で近場でもいいからゆっくり旅行でもしましょう？」
真珠は言い内心ここまで出来た妻に感謝しなければいけないのは俺の方だと痛感する。
「また明日から海の上だけど頑張れそうだよ」
俺は言い真珠をそっと抱きしめた。

第17話～日・中・台・比・首脳会談～

議長国　日本
中国　主席
台湾　総統
比　大統領
と集まった。

「此度の犠牲者に対して日本国民を代表し哀悼の意を捧げます」
伊部総理は言い
「我が国も同様です」
中国の集金平国家主席も賛同し
「ありがとうございます」
台湾総統は言い
「先のイージス艦襲撃事件の際に国民を助けてくださったイージス艦艦長の一ノ瀬大佐に是非お礼が、いいえお礼では言い表せないと思っています。我国は大佐に勲章の叙勲をと考えています」
台湾総統は言い
「ありがとうございます、ですが本人は消して大した事をしていないというでしょうただ一言「シーマンシップに法っただけです」と」
伊部は言い
「しかし今後あのならず者国家を相手にどう対応するかですな」
比大統領は言い
「・・・・・・・・・・」
「・・・・・・・・・・」
「・・・・・・・・・・」
「・・・・・・・・・・」
全員が黙ってしまう。
「そもそも東亜連邦は空母機動部隊がある事をいい事に好き勝手やっている。対抗馬となるとすれば」
比大統領は言い
「我が国ですと「第5護衛隊群」と「第6護衛隊群」ですな」

伊部は言い
「うむ・・・我が国も出せない事はないがせっかく各国と友好的にできているこのタイミングで空母機動部隊を出すとまずは日本の国民に不安を煽る事になりかねない過去の有事を思い起こさせてしまうのではないかと」
集主席は言い
「我々も半島監視の意味を含めて第５護衛隊群は日本海に貼り付けているような状態ですし第６護衛隊群に至っては遺憾ながらまだ乗員の練度不足が歪めず昼夜を徹して訓練にしている段階です。」
伊部総理は言い
「ふむ・・・・アメリカ軍は宛にならんしな」
比大統領は言い
「確かに」
集主席も言った。米軍はアジアプレゼンから後退気味であり「米軍」はあてにならんとようやく気づいた日本は空母を持つに至った経緯がある。
「うーん・・・」
伊部は唸り
「難しい状況だな・・・」
集主席も
「うむ・・・国内でも「報復」を望む声があるがおいそれと戦闘になれば大事になる。アジアを巻き込んでの大問題になりかねない。」
集主席も言い
「我々も先の有事でいかに対空母戦が難しいかを実感したとこであって実際に「東亜連邦」と仮定し「グルシャ」を沈めるとなると・・・護衛の駆逐艦と巡洋艦を排除し潜水艦の雷撃で沈めるか、空爆で沈めるか難しい所だ。」
伊部もいう。先の有事では「いぶき」艦長秋津一佐の立案により撃沈ではなく空母機能を奪う作戦に出てそれが功を奏し勝利へと繋がった。しかしそれが毎度毎度通用するとは限らない。
「「「うーーん・・・」」」

頭を抱える一同だった・・・

第１８話～演習第２クール～

佐伯宅
真珠・日向・菖蒲　アトリエ
私達が結婚しはや数９ヶ月
「は～あ」
ため息を私は付き
「もう、おねぇちゃん何回目の溜息よ」
「ホントホント」
筆を置き日向と菖蒲は私に言い
「何回目だろう」
私は答える
「もう・・・しっかりしなよ「母親」になるんだからシャキっとしないと」
菖蒲に言われ、お腹をさすりつつも今は海の上であろう最愛の人の顔を思い浮かべる。

先島諸島　第６護衛隊群

夜間飛行訓練の為に動いていた。

艦隊防空イージス護衛艦ＤＤＧ―１８０はぐろ
ＣＩＣ
「順調か？」
副長の翼に声をかけ
「はい艦長、発艦・着艦問題なく進んでいます。」
言い
「海図を出してくれ」
俺は言い
「どうしたんですか艦長」
俺はディスプレーに表示される海図を見て

「先島諸島から・・・小笠原諸島まで・・・やはり距離があるか」
言い
「艦長？」
翼は言い
「嫌な予感がしてな・・・」
俺は言い
「嫌な予感ですか？」
砲雷長の子林三佐が言い
「ああ、こうも距離が離れているとどうしても先の有事を頭に連想してしまってな、あの時はその隙を突かれて中国軍の占領を許してしまった。」
頭を掻きつつ答え
「確かにそうですね。あれ以降は海保の巡視船がいますがあそこは空白地帯になっています。連中ならやりかねない、巡視船じゃ軍用艦は止められない。」
翼も言い
「杞憂に終わってくれればいいんだが」
俺は言った。そんな中
「そういえば、艦長の奥様今妊娠何ヶ月なんですか、今度皆でお祝いだそうって話していたんですよね」
砲雷長の小林三佐が言い
「は?!小林三佐なんで知ってるんだ」
俺は言い直ぐに副長の翼を見ると目が泳いでいた。
「お前って奴は・・・」
翼を見て言い
「艦長すいませんでもおめでたい事なんですから皆にもと」
翼は言い
「ま・・まさか」
言うと
「艦隊の皆が知っていますよ。ずいかく艦長の風吹一佐も副長の矢口二佐も白谷群司令もまや艦長の木村一佐に、せいりゅう艦長の深町一

佐にしょうりゅう艦長の海江田一佐もご存知です」
小林三佐は言い、俺は震えながら言い翼に振り返り
「つ～～～～～ば～～～～～さ～～～～～～～っ」
俺は翼を怒鳴り
「艦長、勘弁してください」
翼は怯えきっていた。

艦隊防空イージス護衛艦ＤＤＧ―１７９まや
「どうも胸騒ぎがする・・・・嫌な予感がするんだなぁ・・・」
イージス護衛艦まや艦長の木村哲郎一等海佐は言い
「何が嫌な予感なんですか？艦長」
副長の大室二佐が言う
「先島諸島から小笠原諸島は距離が離れている。第５護衛隊群が日本海側に張り付いた状態で俺達第６護衛隊群は先島諸島だ。もし、東亜の連中が行動を起こすなら今をおいて他にはないと思ってな」
木村一佐は言った。そして此処でも
「そういえば話は変わるが副長、「はぐろ」艦長の一ノ瀬一佐が親父になるってもう知ってるな」
木村は言い
「ええ、おめでたいことです。何ヶ月か前にご結婚されたばかりで式には艦隊代表で艦長や司令達が参列したと」
大室二佐は言い
「まぁ、俺は新郎の高校の同級生だからわかるがようやくっていった所だな。まぁでも副長はしってるかは分からないが相手は世界で有名な画家だからな」
木村一佐は言い
「誰ですか、もったいぶらずに教えて下さいよ艦長」
大室二佐は言い
「佐伯真珠って知ってるか？」
言い
「知ってますよ、超が付く有名な方じゃないですか。」

大室二佐は言い
「はぁ・・・いいな一ノ瀬一佐も所帯持ちか・・・・」
勝手に落ち込む大室二佐を前に
「そういえばお祝いうちの艦は何出すんだ？」
木村一佐は言い
「それがまだ全然です。まぁ仕方がないですよね目が回るくらい忙しいんですから」
大室二佐は言った。

第６護衛隊群　旗艦　航空機搭載型護衛艦ＤＤＶ１９４ずいかく
ＣＩＣ
「・・・・・・・・・」
「・・・・・・・・・」
海図を見ながら二人無言になる
「艦長、よろしいでしょうか」
矢口二佐は言い
「多分同じ事を考えていると思うよ私も」
ずいかく艦長風吹一佐も言い
「先の有事の際もこの距離を突かれて占領を許しました、まして今回は現地に陸自の基地はない。いわば防衛の空白地点とも言える場所です。」
矢口二佐は言い
「ああ、俺も同じ事を考えていたよ副長もし「東亜連邦」が動くならば今をおいて他にはないと」
風吹一佐も言い
「何事もなければいいんですが」
矢口二佐は言い
「ああ、だが正直な所俺は胸騒ぎがするんだ、なんかこううまく伝えることができないんだが・・・」
風吹一佐はバツが悪そうに言い

「・・・・・・・・・」
矢口二佐も不安げな表情をしていたのだった。
「艦長、話変わりますけど、一ノ瀬一佐が父親になるって話でお祝いをとのことでしたが何か案浮かびましたか？」
暗い話を変えるために矢口二佐は言い
「そうだな、俺も何か考えていたがありすぎて絞りきれない状態だな」
風吹一佐は言い
「お二人共幸せそうなでしたものね、挙式の時のあの顔」
矢口二佐は言い
「ああ、それに今度はオメデタと来たもんだ」
風吹一佐は言い返し
「でもそうすると育休とか取るんだろうかな？」
腕を組みつつ矢口二佐は言い
「当たり前だな、奥さんに任せっきりなんてする訳無いだろあいつに限ってな」
風吹一佐も言い
「だとすると、高本二佐苦労しますね・・・」
苦笑し矢口二佐は言ったのだった。そんな中各員が抱く「嫌な予感」は最悪の形で当たる事になってしまうという事をこの時彼らはまだ知る由もなかった。

第１９話～恐ていた事態～

小笠原諸島
春島
「なんだ、騒がしな」
島民は外に出る。外でその異常に気づく。
「大きな音だったな」
外に出てきた住民も言い
「なぁ、さっきから携帯通じないんだけどもさ」
もう一人も言い皆がスマートフォンを見ると
「電波が・・・・０?!、まさか」
後ろを振り向くと山あいの電波塔の鉄塔方面から火の手が上がっている。
「どうなってるんだ・・・・」
そして空を見上げた時
「「ッ・・・・・!!」

その頃
西ノ島
「大変だって、早く本島でも沖縄でもいいから連絡をつけろ」
交番に住民が来ていた。
「まずまず、落ち着いて下さい」
駐在の警察官は言うが
「東亜連邦」の攻撃じゃ」
老人が言い
「ほんとまずいって。今まで俺とじっちゃん沖合居たけども海保の巡視船が沈められているし、俺達漁船にも撃ってきたんだって。」
「嘘こいてなんになるよ」
乗組員が言い
「ああ・・・もう手遅れだ・・・」
空を見上げた若者は言った。空一面に、白い花のごとくパラシュー

トが咲いており素人が見ても「空挺部隊」だというのが分かる。
「ああッ最悪だ」
数分とせずにその手にＡＫ７４自動小銃を持った兵士達がこっちに来るのが見える
「逃げろッ」
交番の警官が言いホルスターから拳銃を取り出し警告、発砲のタイミングと東亜連邦兵士のタイミングは重なる。その場に物言わぬ、死体が二つ出来上がってしまった事は言うまでもない。こうして西の島・春島の住民は拘束され、公民館に軟禁される事になる。そして東亜連邦の国旗が三島の頂に突き刺されたのだ。

そこから数時間後
総理官邸　対策室
「やはり東亜連邦じゃないか!!」
官邸では怒号が飛び交い
「だから自衛隊の基地をあそこに置くべきだと言ったんだ」
官僚の怒号・罵声が飛び交い
「福澤官房長官、確認されている被害は？」
伊部総理は言い
「海保の巡視船２隻が沈められ、救助された乗員の話では奴らいたぶるように撃ち殺したとの事です。西の島では駐在の警察官と東亜連邦の兵士とで銃撃戦になり警官一名の死亡と東亜連邦兵士一名の死亡が確認されています。」
報告を聞き、
「住民らの状態は・・・」
尋ね
「その後の通信は一切ありません。恐らくは電波塔を破壊したものと思われます。住民の安否については一切不明です」
報告を聴き終え
「西郷、防衛大臣。自衛隊に対し「統合任務部隊」の編成を命じます。」
伊部総理は言い

「総理、事はもう「防衛出動」レベルの事案です。せめて「防衛出動待機命令」をお願い致します。」
西郷防衛大臣は言い
「記者会見の後、直ちに承認するものとする。」
伊部総理は答え
「海上自衛隊は先島諸島での夜間訓練中の「第６護衛隊群」に演習を切り上げ、現場海域への急行を命じました」
再び西郷防衛大臣は報告し
「第６・・・・・」
官僚達は言い
「「ずいかく」か・・・・」
伊部総理は言った。再び恐れていた事が現実のものとなってしまった日本。そして現場海域へ急行する事になる「第６護衛隊群」彼らは暴虐に立ち向かう日本の切り札になり得るだろうか・・・・

第２０話～第６護衛隊群現場海域へ～

先島諸島　第６護衛隊群　旗艦「ずいかく」
ＣＩＣ
乗員達はモニターに釘づけになっていた。
「やはりか・・・」
風吹一佐は言い
「艦長の嫌な予感が当たってしまいましね」
矢口二佐も悲痛な表情でモニターを見る。
そこに
「風吹一佐、矢口二佐、本艦隊に命令が下った。演習を切り上げ先島諸島から現場海域の小笠原諸島へ急行せよとの事だ。防衛大臣より自衛隊全部隊に対して「防衛出動待機命令」が発令される見通しだ。現場に向かうまでに「東亜連邦」の妨害がある事が予想される。」
群司令の白谷司令は言い
「「防衛出動待機命令」」
風吹一佐も矢口二佐も言い
「我々が対東亜連邦の先鋒を担う事になる。奴らは交渉に応じるような国じゃないと言う事はよく知っているはずだ。」
群司令は言い
「「了解しました」」
風吹一佐、矢口二佐は言い
風吹一佐はインカムを取り
「「ずいかく」艦長より各艦へ、本艦隊は演習を打ち切り小笠原諸島海域に向かう。これは訓練ではない、繰り返す、これは訓練ではない、自衛隊全部隊に対し「防衛出動待機命令」が発令されるとみられる。ここから先の我々が向かう海域は既に戦場である事を心せよ。対空・対潜警戒を厳せよ」
言い風吹一佐はインカムを置いた。
「とうとう起こっちまった・・・・か」
風吹一佐は言い

「大丈夫か」
矢口二佐は言ったのだった。

艦隊防衛イージス護衛艦ＤＤＧ１８０「はぐろ」
ＣＩＣ
「防衛出動待機命令?!」
艦内放送を聴き、モニターを見ながら翼は驚きつつ言い
「難しい判断の中よくぞ防衛出動待機命令まで一気に出してくれました。」
冷静に俺は言い、
「艦長これは・・・・」
砲雷長の小林三佐は言い
「ああ、確実に出るだろうな、戦後二度目となる「防衛出動」命令が」
俺は言い
「防衛出動」
小林三佐も言い
「ああ、要件は満たしている。領土が不法に他国の軍隊・武装集団に占領され既に日本国民が亡くなっている、それも武力衝突でだ。」
言い、インカムを取り
「艦長より総員へ、本艦は演習を切り上げ小笠原諸島へと艦隊の一員として急行する。皆、怖いと思う者もいるかもしれない、不安に感じるかもしれない。だが島民の方々はそれ以上の恐怖に晒されている事を忘てはならない、全てはこの日の為に備えてきたと思え、最後になるが、誇りを持て。領土奪還にこの艦を含む第６護衛隊群が選ばれたということを…!!、総員の奮闘を期待する。以上」
言いインカムを置く。
「そうですね、艦長、副長は先の有事でも最前線にいたとか。冷静なのは戦闘を経験しているからこそなんですね、艦長が指揮官で良かった。」
小林三佐は言うが

「とりあえず、目の前に任務に集中しよう。転舵用意ッ」
指示を出したのだった。

艦隊防衛イージス護衛艦ＤＤＧ１７９「まや」
ＣＩＣ
「二度目か・・・・」
ＣＩＣにて木村一佐は言い
「艦長、」
大室二佐は言い
「うむ、艦長より総員へ達する。本艦隊はこれより敵占領地帯にへと向かう。我々は一人ではない。皆隣を見ればわかると思うが我々は家族だ。困難な任務とも言えるかもしれないが必ず我々は国民を守り領土を奪回する。必ずだッ!!以上。」
木村一佐はインカムを置き
「転舵用意っ」
指示を出す
「か・・・艦長、本当に戦場に・・・」
大室二佐は言っている
「無論だ。恐らくは「東亜連邦」も我々が出てくる事を読んでいるだろう。現場海域の海上優勢と航空優勢の確保が我々の任務になるだろう。」
木村一佐は言い
「そうですね・・・・いよいよですね」
大室二佐は言い
「心配するな、必ず俺達は生きて帰るんだ。」
木村一佐は副長の大室二佐に言い
「はいっ」
大室二佐も頷いた。

艦隊防衛汎用護衛艦ＤＤ１２０「しらぬい」
ＣＩＣ

「防衛出動待機命令?!・・・・嘘だろ」
艦長の如月修二二等海佐は言い
「マジの本番ってことですか・・・艦長」
副長の三上優也三等海佐も言い
「・・・・・来る時がいよいよ来って事か・・・」
艦長の如月二佐は言い
「まさか・・・自分が戦場に行くなんて・・・・」
言う副長に
「三上三佐、我々は自衛官・軍人だ。警備員ではない。覚悟を決めよう。」
諭すように如月二佐は言い、インカムを取り
「艦長より総員へ達する、本艦はこれより占領地帯へと向かう事になる。本艦は艦隊の対潜警戒の一翼を担う、艦隊の耳になる。総員気合を入れていけ。日本の土地代が高い事を東亜のれん中に教えてやるぞ、総員の奮闘を期待したい以上」
インカムを置き
「転舵用意っ」
如月二佐は指示を出し
「俺も正直な事いえば実戦は初めてだよ、胃の中がフラフープになりそうなほど緊張している。こんな時どっしりと構えているであろう一ノ瀬一佐や木村一佐が頼もしい」
如月二佐は言いつつ
「〈だが、動揺はするなよ指揮官が同様すれば下に伝染するきいつけろ〉」
三上三佐に耳打ちし
「〈了解です艦長〉」
三上三佐も頷いたのだった。

艦隊防衛汎用護衛艦ＤＤ１１６「てるづき」
「防衛出動待機命令か・・・・・いよいよ来る所まできちまったか」

てるづき艦長加藤貴明二佐は言い
「先の有事から数年、平和に暮らせると思っていたんですけど、平和は長続きはしないということですかね」
副長の高山三佐は言い
「しょうがない。、俺達がやるべき仕事は一つだいかなる時も国民と領土を守る事だ」
加藤二佐は答え
「実戦は俺も初めてだが緊張しても始まらない。特に俺やお前指揮官が緊張すれば下に伝染しちまうぞ」
加藤二佐はモニターを見つつ言い
「はっ、了解しました艦長」
高山三佐は言い
「転舵用意っ、艦隊に動きを同調」
加藤二佐は指示を出し
「はっ、了解しました艦長」

艦隊防衛潜水艦ＳＳ５０９「せいりゅう」
「おっ、政府の奴ら覚悟決めたみてぇだな」
艦長の深町一佐はプリントアウトされた指示書の紙を読み、横から見ている副長の速水二佐も
「えっ・・・「防衛出動待機命令?!」」
ぎょっとしたような表情で言い
「おまえなぁ、人の庭に銃持った奴が入り込んできたら追っ払うのは正当な権利だぞ」
深町一佐は紙をくしゃりを握り潰し
「好き勝手に他国の領土に侵略し、殺戮しようときやがったんだ、だったら同じリスクを背負う事を教えてやろうじゃねぇか、それが防衛力の意味だという事をな」
深町一佐は速水二佐に言い
「転舵用意、艦隊前衛に付けろっ」
命令を出したのだった。

艦隊防衛潜水艦ＳＳ５１０「しょうりゅう」
「ふむ、政府は腹を括ったか」
艦長海江田一佐は言い
「そのようです、事と次第によってはこのまま戦後二度目となる防衛出動命令が発令される見通しになるかと思われます。」
副長山中二佐は答え
「我々は先の有事を経験している。慌てる事はない、訓練通りに任務を遂行するだけだ。我々護衛艦隊の任務は「ずいかく」を守る事だ。」
海江田一佐は言い
「はっ、心得ております艦長」
山中二佐も言った。空母機動部隊の敵は潜水艦とはいったものだがせいりゅう・しょうりゅう艦長は只者ではない。リムパックの演習に置いて米海軍空母機動部隊を相手にし艦隊防衛網をすり抜け空母を１０回仕留める程の知将・勇将とも言われている人材だ。
「我々の仕事をこなそう、山中転舵用意っ、せいりゅうの脇につける」
海江田一佐は指示を出し
「了解しました艦長」
山中二佐は言った。

第９４航空団
「いよいよか・・・」
航空団司令深山一佐は言った。
「司令、いよいよですね・・・９４航空団の初陣も」
副団司令の三河二佐が言い
「整備のほうは大丈夫か?突然の命令だが「飛べません」じゃ話にならんし何のための艦載機だってなっちまうからな」
深山一佐は言い
「整備のほうは現在４５%は完了しています。全機４５機整備完了はもう少しかかりますが海域につく前には確実に全機飛べる状態になります。」

三河二佐が報告し
「整備をスピードアップさせろ」
命令を出し
「了解しました」
着々と迫るその時に備え航空団は機体の整備を急がせ艦隊は初の初陣を飾る事になる小笠原諸島海域へと急ぎ急行するのだった。向かう場所は既に戦場であると艦隊全員が認識しているのだった。

第２１話～西ノ島の空に散る命～

第６護衛隊群が移動を開始し朝日が昇る翌日
小笠原諸島　上空
「エッグ６より、那覇ベース西ノ島上空まで後８分」
一機のＲＦ４―Ｅが飛行していた。この機体は戦闘を目的とした機体ではなく「偵察」を目的とした機体だ
「ベースより、エッグ６任務は西ノ島の偵察撮影にあるが東亜連邦機が現れた場合は無理をせずに直ちにその空域から撤退しろ」
百里ベースから指示が飛び
「了解」
パイロットは返答し
「機長、前方西ノ島です。遠巻きに見た限りでは普段通りでとても占領されているとは思えませんね」
ナビパイロットは言い
「ああ、とても占領されているとは思えないな」
パイロットも返す、その時だった。
「レーダーコンタクト、機影探知」
ナビパイロットは言い
「９時の方向、距離２８キロ、高度３５００こちらへまっすぐに向かってきます。」
ナビパイロットは続けざまに報告し
「好距離での探知と言う事は・・・・ステルスか」
パイロットは言い
「接敵まで後２５秒、回避しますか？」
尋ね
「いや、どこまでやれるかを見る。高度、速度そのまま」
「目標視認っ」
ナビパイロットは言い
「おいでなすったな・・・・・やはりＭＩＧ３５か」
そのままＲＦ―４ＥとＭＩＧ３５は高速スピードですれ違う

そして
「日本航空自衛隊機に警告する。西ノ島上空の飛行は許可しない直ちに当空域から退去せよ」
突然の警告に
「やろ・・・ナメた真似しやがって」
「何が許可しないだ、領空侵犯を犯しているのはそっちじゃないか!!」
言うなか、ＭＩＧ３５は突如として発砲してきたのだ。
「くそっ、警告射撃してきやがった」
パイロットは憤りつつも
「ベースよりエッグ６へ直ちに反転至急当該空域を離脱せよ」
基地より指示が飛ぶ中
「了解しました、ですが任務をこなしてからです」
パイロットは言い
「西ノ島の偵察撮影を強行するぞ」
そのまま島に接近するＲＦ―４Ｅに対し東亜連邦機は再度警告を行った後
「ＭＩＧ３５反転、３時の方向来るぞッ撮影急げ」
ナビはパイロットに指示を出しパイロットは急ぎ撮影を開始するが
「レーダー波照射確認、くそっロック・オンされたぞ」
機内にロック・オンされた事を警告するアラート警報が鳴り響き
「ＭＩＧ３５空対空ミサイル発射を確認、距離４ｷﾛ、命中まで５秒、チャフ・フレアを撒け回避行動を」
ナビが言うなか
「ダメだ、近すぎるッ!!間に合わない」
「だっ・・・・・」
パイロットが眼前に迫る空対空ミサイルを見たのが最後の光景となったのだった。

百里ベース
「エッグ６、エッグ６応答せよ、応答せよ」

管制が無線で呼びかける中雑音のみが流れていた。

第２２話～記者会見・防衛出動～

首相官邸
「総理、各方面並びに偵察衛星からの情報が上がってきました」
報告がはいりディスプレイに表示される。敵の兵力・そして艦隊の現在地など

「西ノ島　艦載機ＭＩＧ３５の攻撃で通信回線用鉄塔破壊、空挺部隊大隊規模の兵力上陸」
「春島　艦載機ＭＩＧ３５の攻撃で通信用回線鉄塔破壊、空挺部隊大隊規模の兵力上陸」
「秋島　空挺部隊大隊規模兵力上陸、完全制圧下です。」

そして矢印で第６護衛隊群が現場に向かっている事が示されていた。
「第６護衛隊群はどれほどで現場海域に到着する？」
官僚は言い
「途中補給を受けなければなりませんので急いでもまる二日はかかるかと」
防衛省職員は説明し
「それとですが、第６護衛隊群旗艦「ずいかく」搭載艦載機についてですが、先程まで全飛行隊が夜間訓練を行っていました中での緊急出動となりましたので予備機を含めて４５機全てがメンテナンス整備を行っています。」
説明し
「整備はどれくらい終わっている？」
聞かれ
「現在ですと・・・・５０％ちょうどだそうです。ですので緊急事態の際には２２機までは発艦可能との事です」
報告を入れる、そんな中
「はい・・・私だ・・・・うむ・・・うむ・・・そうか・・・ご苦労」

受話器を置き
「総理、航空自衛隊百里基地からです。偵察に出たＲＦ―４一機が西ノ島上空でレーダーよりロスト、撃墜されたとの報告です」
西郷防衛大臣は言い
「げき・・・つい・・・だと?!」
周りは凍りつき
「パイロットは無事か?」
聞くが
「いいえ、脱出の確認は取れていません恐らくはダメでしょう」
西郷防衛大臣は言い
「総理、もう此処は腹を括りましょう、三人既に死んでるんですよ、我々が守るべき国民が、警察官も自衛官も立派な国民じゃないですか、三人ではまだ不足ですか?」
天羽副総理は言い
「・・・・・・・・・・」
伊部総理は腕を組み目をつむり考え
「総理、現場に向かっている「第６護衛隊群」も共に同じです。このまま彼らが行っても命令がなければ彼らは唯の的です。」
西郷防衛大臣も言うなか、総理は目を開き
「内閣総理大臣として、全閣僚の同意を得た後自衛隊全部隊に対して「防衛出動」命令を発令するものとする。」
伊部総理は言いさらに
「自衛隊員達に伝えて欲しい「我々は日本国民の生命、財産そして領土を全力で守るいかなる状況下においても、伊部仁三は自衛隊最高司令官として陸海空全自衛隊員と共にある」と」
と言い
「官房長官、記者会見の準備を頼む。」
伊部総理は言い、
「外務大臣、東亜連邦と国交があるロシアを介して東亜連邦外交部とコンタクトを取って欲しい」
指示を出し

「西郷防衛大臣、統合任務部隊の進捗状況の確認を頼む。」
「わかりました、総理」
西郷防衛大臣は部屋を出ていく。そして・・・・
「総理、記者会見のお時間です」
言われ
「うむ・・・」
神妙な面持ちで会見場に入る。そして
「我が国は現在、東亜連邦により軍事侵略を受けています。我が国の固有の領土である「西の島」「春島」「秋島」の三島が東亜連邦の軍事占領下に置かれています。また西の島においては現地駐在の警察官佐藤充巡査部長が東亜連邦軍による銃弾に倒れ先の大戦以降警視庁においては軍事侵攻による初の殉職者を出す形となってしまいました。尚政府はあらゆる状況を想定し対応を行っております。」
伊部総理は言い
「・・・・・・・・・・・・・・」
記者会見場に集まった記者達は耳を傾け、総理の会見を聞いている。先の有事以降再び起きてしまった事態に皆が固唾を飲んで総理の会見を見守る。
「私は、以上の事から関係閣僚と同意の元、自衛隊全部隊に対して「防衛出動」命令の発令に至りました。詳しい情報は利敵行為に該当する為は申し上げる事は出来ませんが、政府は国民の国民の皆様にお約束致します、東亜連邦の不当な要求に屈する事はけしてないと言うことを、どうか政府を信じて根拠おのない噂やデマを間にうけないようお願い申し上げます」
伊部総理は語り記者達は青ざめていた。それもそのはずだだ、先の有事以降二度目となる「防衛出動命令」が発令されるという異常事態になったのだ。
「以上で記者会見を終わります」
記者会見が終わり、伊部総理が退出しそれに合わせるかのようにマスコミ各社の記者らも慌てて動き出す。それもそうだ。「戦闘」が始

まろうとしているのだから。

第２３話～各国の反応～

中国政府

「集主席、非常事態です」

官僚が主席執務室に慌てて入ってくる。

「何事だ？」

集主席は尋ね、

「これをご覧下さい」

モニターを見せられると

「先の有事以降二度目となる「防衛出動」命令発令」

の見出しに

「なに?!」

集主席は目を見張り

「東亜連邦がとうとうやらかしました、日本の領土「西ノ島」「春島」「秋島」に軍事侵攻しました。」

官僚は言い

「自衛隊の動きはどうなっている？」

集主席は言い

「衛星映像ですと、日本海側の「第５護衛隊群」は動きなしですが、沖縄の先島諸島で演習中だった「第６護衛隊群」が全艦転舵、現場海域に向かい始めた模様です」

情報を聴き、そして官僚は

「主席閣下、日本自衛隊を支援する為に我々も動くべきでは？我々も東亜連邦にやられ人民も「報復」を望んでいます。日本自衛隊と共に戦うべきだとも声が上がっています。」

官僚は言い

「まずは伊部総理と電話会談をしてからだ、迂闊に動くと周辺国にも迷惑をかけることになる。」

集主席は言い

「伊部仁三総理大臣に急ぎホットラインをつないでくれ」

集主席はいうのだった。

台湾
「大変な事になったわ・・・」
台湾においてもこの日本の緊急記者会見を総統は見ていた。
「はい、総統ですが我々は日本自衛隊を支援したくとも悔しいですが足手まといにしかなりません」
側近は言い
「そうね、でも戦うだけが支援ではないわ。声明分を準備して頂戴、我が台湾政府は日本国の「防衛出動」発令を強く支持すると。私が直に声明を読み上げます」
総統は言い
「はっ、早急に準備致します」
側近は声明文を準備すべく部屋を出て行ったのだった。

フィリピン
「なんという事だ、軍事衝突とは」
フィリピン大統領はテレビを見て言い
「はい、大変な事態になりました。我国も日本を支持すべきと思いますが」
側近は言い
「当然だ、人の庭に銃をもって勝手に入ってくるような愚か者を殺すのは正当な権利だ、東亜連邦は報いを受けることになる。日本の自衛隊は東亜連邦よりもはるかに強力な軍隊だ。その身をもって日本の領土に軍事侵攻した事を後悔する事になるだろう」
大統領は言った。

そして同盟国のはずのアメリカは・・・・
「ドランプ大統領閣下、日本政府は戦後二度目となる「防衛出動」命令を自衛隊全部隊に発令した模様です、日本政府と自衛隊は東亜連邦と東亜連邦軍に対し全面対決する道を選んだようです。」

軍事顧問のウォルターズ海軍准将はドランプ大統領に言い
「自衛隊は対東亜連邦の先鋒として沖縄県の先島諸島で訓練をしていた第６艦隊を現場い海域に派遣した模様です。我国の偵察衛星が捉えています。」
言い
「第６・・・・日本の空母機動部隊か・・・」
ドランプ大統領は言い
「「ずいかく」です。閣下。自衛隊最新鋭空母の。」
説明し
「すまないが、詳しい事はわからないのだが」
ドランプ大統領は言い
「私がお答え致します、閣下」
ウォルターズ海軍准将は言い
「先の尖閣有事の際に活躍したいぶき型空母の二番艦に当たるのが「ずいかく」です。搭載機艦載機機数は「いぶき」の１５機から三倍の４５機まで増やし哨戒ヘリも５機搭載の合計が５０機搭載の空母となっております。尚護衛にイージス巡洋艦が２隻そして汎用駆逐艦が２隻に海中には潜水艦が２隻潜んでいます。」
ウォルターズ海軍准将は説明し
「なる程、ウォルターズ准将、日本の第６艦隊の事はよくわかった、勝算飲み込みはあるのかね」
ドランプ大統領は尋ね
「東亜連邦の主力北方艦隊旗艦「グルシャ」は見てくれはロシア製のお古ですが中身は東亜連邦が独自にアップグレードを施しています。」
説明し
「艦載機の搭載機数は？」
ドランプ大統領は聞き
「日本の空母「ずいかく」はステルス戦闘機Ｆ―３５ＪＢを４５機搭載、それに比べて東亜連邦艦隊の旗艦の空母「グルシャ」はステルス戦闘機ＭＩＧ３５を６０機搭載しています。」
説明を受け

「日本が不利ではないか?!」
　ドランプ大統領は言い
「確かに４５対６０で１５機の差があるのは歪めませんが、先の有事では１５対６０に勝利しています。日本航空自衛隊のパイロットは精鋭揃いです。１５機程度の差はあってないようなものです。」
　説明を受け
「では今まで通りにアジアの問題に米軍は極力介入はしない方針でいいんだな?」
　ドランプ大統領は言うが
「いいえ、大統領閣下、今回ばかりはそうも行きません。」
　もう一人の側近が言い
「今年の大統領選に置いて再選を目指すならば今回の有事、国民に対して良いアピールになるかと思われます」
　言い
「ふむ、話を聞こうじゃないか」
　ドランプ大統領は言い
「東亜連邦はやりすぎました、アジア中で顰蹙を買っています。中国では自衛隊と共に戦おうと言う国民の声もあるようです。ですので、我々も戦うんです。東亜連邦や後ろで糸を引くロシアに対してもいいメッセージになるでしょう「好き勝手やる事は許さない」と」
　側近はいいさらに
「周辺同盟国にも良いアピールになるでしょう。「米国は決して同盟国を見捨てない」とも」
　側近は言った。
「だが動員できる部隊はあるかね?海軍の艦隊もあちらこちらで展開している動く余裕のある艦隊も空母もない。」
　ドランプ大統領は言い返し
「閣下、海軍にはそのような余力はありません、陸軍・空軍・海兵隊・共に同じでしょう。」
　ウォルターズ准将は言い
「我々の損害が最小限で尚且つ介入出来そうな局面で参戦すればい

い、我国も日本の防衛出動発令を強く支持すると声明を発表する」
ドランプ大統領はいい
「了解しました」
「仰せのままに致します」
両名ともいい退出した。のだった。

第２４話～奇襲～

小笠原諸島
途中に補給を受け、占領地帯へと急ぐが・・・
第６護衛隊群　旗艦　ＤＤＶ１９４「ずいかく」
「防衛出動!!」
乗組員の顔色が変わる。
「いよいよか・・・・」
群司令官の白谷司令は言い、周りを見回し
「風吹艦長は？」
尋ね
「は！、先ほど点検だと言って格納庫へ行かれました」
隊員は答え
「６分後に、艦隊全艦に「防衛出動」の伝達を行う・・・と伝えてくれ」
白谷司令は言い
「了解しました」
言われた隊員は答えたのだった。その頃、格納庫では
「・・・・・・・・・・・・・・」
風吹一佐が鎮座するＦ―３５ＪＢ見てると
「事に臨んでは危険を顧みず」
第９４航空団司令深山一佐が横から服務の宣誓を言い出し、途中から風吹一佐も
「身を持って責務の完遂に努め、もって国民の負託にこたえよ」」
二人で言い
「入隊、服務の宣誓を・・・西ノ島で散ったパイロット達はミサイルの接触間際に念じたと思います。」
深山一佐は言い
「我々が信じるのはのその一点・・・・・だ」
風吹一佐は言い
「仇は・・・・彼らの仇は必ずとってやります」

深山一佐は言うが
「その思いは胸の内にしまっとけ・・・戦場でそのような感情に囚われると指揮の目が曇ってしまう。」
風吹一佐が言ったとき
「風吹艦長、ＣＩＣへお戻り下さい」
艦内放送がなり
「「防衛出動」命令が発令された今、我々がやる事は敵討ちではない、アジアの海で軍事侵攻がいかに愚かで無謀な事か解らぬのならば力で知らしめる」
風吹一佐は言いさらに
「「防衛出動」とはその力の事だ」
言った。その後風吹一佐は深山一佐と共にＣＩＣに行き全艦に防衛出動の下令を行った。

そして艦隊はさらに海域へと進出し

「ずいかく」搭載汎用ヘリＳＨ―６０Ｋ　コールサイン「フリッカー９」

「ずいかくＣＩＣ、こちらフリッカー９進路上に漁船を確認、救難信号を発しています」
この報告に
「救助要請とはどこの国籍の船だ?!」
矢口二佐は言い
「東亜連邦の奴らと関係があるのか?!」
白谷司令は言い
「・・・・・・!」
黙ってやり取りを聞いていた風吹一佐は
「司令、対潜警戒をっ」
言い
「ま・・・まさか」

矢口二佐が言った時だった、
「ＣＩＣ、ミサイル発射音探知潜水艦ですっ!!」
フリッカー９は報告し
「１０時の方向より接近っ」
この報告に
「いきなり撃ってきた・・・だと」
矢口二佐は言い
「待ち伏せか・・・・」
モニターを見つつ白谷司令も言う。、しかし艦隊前衛・・・「神の盾」は既にこれを予期し備えていた。

艦隊防衛イージス護衛艦ＤＤＧ１７９「まや」
ＣＩＣ
「艦長、「ずいかく」へ敵潜ミサイル１４発接近、距離２８００まもなくＣＩＷＳの射程圏内に入ります。」
レーダー要員が叫び
「ＣＩＷＳ射撃用意っ、一発も「ずいかく」に被弾させるな」
木村一佐は言い
「僚艦の「はぐろ」はっ」
木村一佐が言い
「僚艦「はぐろ」同様にＣＩＷＳ起動確認っ」
イージス護衛艦「まや」は射撃体勢に入っていた。

艦隊防衛イージス護衛艦ＤＤＧ１８０「はぐろ」
「敵潜発射ミサイル、１４発全て「ずいかく」に向かいます距離２７５０」
レーダー要員は言い
「ＣＩＷＳ射撃用意っ、この海域でやられた時の事を思い出せ、一発たりとも「ずいかく」に被弾させるな全て叩き落せっ」
指示を出し、同時に
「はぐろＣＩＣより、ずいかくＣＩＣへ本艦・僚艦共に射程に捉えてま

す、射撃命令を」
インカム越しに言い
「ずいかくＣＩＣよりはぐろＣＩＣへ射撃を許可する。」
インカム越しに風吹一佐の命令が聞こえ
「撃っ!!」
直ぐに命令し接近するミサイルに対し、「はぐろ」「まや」両艦のＣＩＷＳがけたたましい射撃音と共に２０ｍｍ弾を発砲し１４発全てのミサイルを迎撃する。

旗艦　ＤＤＶ１９４「ずいかく」
ＣＩＣ
「はぐろ」「まや」ＣＩＷＳ射撃・・・・・１４発全てのミサイルの撃墜を確認しました・・」
安渡の空気がＣＩＣに流れ
「一ノ瀬一佐と木村一佐に助けられたな・・・常に備えていたか・・・」
白谷司令は言い
「我々を襲撃した潜水艦は」
風吹一佐はソナー要員に言い
「既に離脱したもようです、漁船も合わせて・・・」
聞き
「これからはもっと厳しい戦いになる・・・・」
風吹一佐はレーダーを見つつ言った。その頃、日本では・・・・

第２５話～防衛出動の余波～

首相官邸

「総理、ロシア外務省からで東亜連邦側からは「交渉に応じるつもりはない自衛隊の即時撤退と「西ノ島」「春島」「秋島」の引渡しを要求する」だとの事です。」

外務大臣は言い

「奴ら、国際常識などはなっから抜け落ちているような輩だ期待などしていなかったが」

官房長官は言い

「はい・・・はい・・はい・・おおそうか、切り抜けたか」

防衛大臣の西郷大臣が電話の受話器を置き

「伊部総理、現場からで第６護衛隊群は小笠原諸島付近で東亜連邦海軍による奇襲攻撃を受けましたが、イージス艦「はぐろ」「まや」の奮戦によりこれを撃退切り抜けたとの事です、艦隊は前進しあと一日ほどで予定の海域に到着します。」

防衛大臣は報告し

「そうか!、現場に勇気をもらったな・・・妨害を突破してくれたか」

伊部総理は頷き

「西郷大臣、統合任務部隊の進捗状況はどうか?」

伊部総理は確認し

「参加部隊は先の有事と同じ陸自は特殊作戦群・水陸機動団・第一空挺団が参加します、海自は特別警備隊、空自は第７航空団を中心とし百里基地の航空隊が対処します。」

西郷防衛大臣は説明し

「陸・海の特殊部隊に第一空挺団に水陸機動団に航空隊か・・・・」

先の有事を彷彿させる布陣だが日本で最も頼れる精鋭達である事に変わりはない。そこに

「総理、中国の集国家主席からホットラインです」

官僚は言い

「わかった」

伊部総理は言うと受話器を取り
「総理の伊部です」
言い
「大変な事態になってしまったな」
集主席は言い
「ええ、こちらは既に三名の死者が確認されています、ですので我々は「実力行使」で東亜連邦を排除する為にご存知とは思いますが「防衛出動」を発令しました。」
説明し
「我中国政府は全面的に日本国の「防衛出動」発令を断固として支持する。並びに現在海軍の広東艦隊に出動待機命令を発令中でもある、貴国の要請一つですぐにでも艦隊を派遣する。そちらのお言葉を借りれば「昨日の敵は今日の友」と言った所だろう」
集主席は言い
「ありがとう、だが参戦は待って欲しい、貴国中国も東亜連邦も互いに核保有国このまま核保有国同士でぶつかった場合最悪は核戦争になりかねない。」
伊部総理は言い
「わかった、推移を見守っている。だが忘れないでくれ後ろには強力な援軍が控えている事を」
集主席は言い
「はい」
伊部は答え受話器を置いた。
「中国は何と?」
天羽副総理は尋ね
「自衛隊支援のために海軍の広東艦隊派遣の用意があるとの事だ」
伊部総理は言い
「ですが、今中国軍の参戦を招いたら最悪に事態にもなりかねんません」
西郷防衛大臣は言い
「無論だ、だから厳しいのはわかっているが自衛隊の諸君には頑張っ

てもらわねばならない」
伊部総理は言い、周りの閣僚も頷いていたのだった。

その頃
佐伯宅
一階の茶の間で皆でテレビを囲み固唾を飲んで画面を見ていた。
「防衛出動・・・・・って戦争が始まるの?!」
菖蒲が言い
「確か、現場、占領海域に向かってるのが・・・「第６護衛隊群」と言う事は・・」
お父さんも慌て始めが
「優希が所属する艦隊ね、イージス護衛艦ＤＤＧ―１８０「はぐろ」の艦長だもの」
私は言い
「姉さんは心配じゃないの?」
「そうだよ、戦場の真っただ中に向かうんだよ!!」
日向と菖蒲に言われるも
「私は信じてる、必ず戻ってくるって。この子の顔を優希だって見たがってるもの」
私はお腹を優しく愛おしく撫でながら言い
「母は強しとはこの事ね」
「うん!」
日向と菖蒲は言うなか、テレビでは映像が流される。艦隊にミサイルが飛来するのを護衛艦に搭載されている機銃が追撃する映像だった。
「「「・・・・・・・・・」」」
父や母それに妹の日向に菖蒲に私と戦闘映像なんて・・・・見るとは思っていなかったが冷静だったのは旧海軍にいて尚知識豊富な祖父だった。
「対ミサイル防御じゃな・・・あのミサイルは空母を狙って発射されてきておる。空母は周りの随伴する艦が対空・対潜と警戒にあたる。そ

れが先のいい例じゃな。映像に写っておった艦番号も「１８０」つまりは「はぐろ」ということじゃな」
　映像が再び流され艦番号「１８０」と「１７９」の護衛艦が機銃を撃ちミサイルを撃墜している。私達は忘れてしまっていたのだ、先の有事の時の恐怖感を。「殺す」か「殺されるか」をそんな中
「でもまずいよね、買い物行かなきゃ」
　菖蒲が言うが
「心配しなくとも大丈夫よ、私と優君とでこの前に買い物行ってきてたから食料の蓄えは十分にあるわよ」
　私はいい
「良かった・・・・でも、この有事どうなるんだろう。」
　菖蒲は言い
「うん・・・・先が全然見えない・・・・」
　日向も反応する。
「自衛隊の空母艦隊が再び最前線に立つ事になるなんてな、まして自分の家族が居ると思うと気が気ではないよ」
　お父さんはテレビを見ながら言い
「そうですね、優希さんは真珠の夫で私達にとっては義理の息子、ううん義理なんて関係ない本当の息子も同然」
　お母さんも言うなか
「大丈夫じゃ、優希君は必ず帰ってくる。真珠や真珠のお腹にいる子の顔を見ずに死ぬわけない」
　おじいちゃんは言い切り
「先の有事より自衛隊は一層の危機感を持って訓練に励んでいる、緊張感と危機感がまるっと足りない、ないのはどっちかと言うと政治家なのかもしれないわね。」
　菖蒲は深刻そうな顔をして言った。だがそのとうりかもしれない。政治家は危機感よりも保身や売国に走る輩が大多数存在する。
「〔大丈夫・・・・必ず・・・・必ず帰ってくる・・・・そうだよね、貴方が帰る場所はここだよ・・・・〕」
　私は一抹の不安を抱えつつ内心思った。最愛の人の無事を祈りな

から・・・・

第２６話～昨日の敵は今日の友～

中国　広東省
広東艦隊　旗艦広東
司令室

「リョウ司令艦隊の準備滞りなく進行中です」
報告に入る副官をよそに
「昨日の敵は・・・今日の友・・・か」
艦隊司令官リョウ・チャンロン少将は呟いた。かつて日本艦隊と対峙し激戦の末に敗北したあの時のの事を思い出していた。
５年前・・・広東甲板上
最終戦に置いて我艦隊は敗北した。突入してきたＦ―３５ＪＢに護衛のミサイル駆逐艦を無力化され更にはＦ３５ＪＢによる機銃掃射で飛行甲板着艦フックシステムを破壊され空母としての機能を全て消失。この時点で既に勝負あり・・・だった。中でも私の中で印象的だったのは
「我が隊の最終目標は撃沈にあらず・・・」
当時の「いぶき」艦長秋津大佐はそう言った。艦を沈めるのではなく機能を奪うことが日本自衛隊の最終目標であった事を。それでいて銃口を向けられているにも関わらず
「私は戦闘が集結したと確信したから此処に来た、貴官も同じならその意思を示してもらいたい」
あの毅然とした態度、果たして私は秋津大佐と同じ状況に立たされたとき同じような事が出来るだろうか?感じていた。そして最後に
「貴官も帰国すれば今まで以上に冷遇される事はそうぞうだにない、だが私はまっている「また貴官がこの海に戻ってくる事を」」
最後に秋津大佐は私にそういった。あの後の私は確かに冷遇された事は言うまでもなかった。
「作戦失敗の責任」
「喪失した機・戦死したパイロットに対する責任」
「空母機能喪失に対する責任」

「艦隊機能喪失の指揮官としての責任」
　戦後他国の関係者から聞いた話によれば秋津大佐はこの有事に置ける華々しい数々の功績から大佐より少将に昇格し今現在は艦隊の司令官として今も海で指揮を取っている。焦りを感じなかったといえば嘘になるが、私も着実とステップを重ねそしてまた「広東」に戻ってきた。
「司令は先の日本自衛隊の有事時に自衛隊を間近で見た一人ですが、どうでしたか？」
　副官の質問に私は
「そうだな・・・戦は数では決まらん・・・それを体現した存在だ。彼らはな」
　言い更に
「「少数精鋭」という言葉が一番当てはまる。数が少なくともそれを不利とは思わず果敢に攻めてきた。当時の私には慢心があった、だから日本自衛隊に負けたのだ」
　腕組みしつつ言い
「今度はそれを東亜連邦が間近で見る番だろう。４５対６０数の上では不利だろうが私はそうは思わん」
「ずいかく」の搭載艦載機機数と「グルシャ」の艦載機機数を比べ答え
「では自衛隊の勝利で？」
　聞かれ
「当然だな、互いに損害は出るだろうが東亜連邦は痛い目を観るだろう。核を使えば勝てるだろうが使えばどうなるかわ貴官もわかるだろう？」
　逆に問い
「もちろんです司令」
　副官は答えた。このご時世核を使えば戦には勝てるだろう、だが核を使うと言うことはすなわちその国も国際的に死を意味するのだ。
「日本には戦後そして今と我々に気を使ってくれた。「我々のメンツを潰さぬように」と私は５年前のような負の感情はもうない。いや、日本と言う国の懐の広さに驚きを隠せない」

答え
「それは私も同じ思いであります。1年程前にありました。我が国のタンカー雷撃事件の際には自衛隊汎用駆逐艦「ふゆづき」が命令を無視してまで助けてくれました。当時の艦長の方はそれが原因で艦長職を解任されましたが」
悔しそうに言っている中
「一ノ瀬大佐の事か。彼かならもう現場復帰したぞ、「イージス艦」の艦長職に抜擢されてな。それと彼の経歴を調べればわかるが当時少佐だった彼も尖閣有事の際には現場にいたと陸戦隊の奴らに聞いてる。戦後に艦隊勤務に復帰して艦長に昇格していったとな。経験豊富な人間が必要だよ艦長には」
答えた。そしてもう一人の士官が報告に入ってくる。
「失礼します、報告します。駆逐艦「シーアン」「インチュアン」「ナンジン」「タイユァン」並びに遠征「115」「116」「117」共に出稿準備完了しました。」
報告を受け
「わかった、全艦に通達別命あるまで待機せよと」
士官に指示を出し
「自衛隊は踏ん張れるさ、少なくとも私はそう思っている。」
リョウ少将は答えたのだった。

第２７話～第５護衛隊群～

日本海　第５護衛隊群　旗艦「いぶき」
ＣＩＣ
「はい・・・了解しました。」
艦隊司令秋津海将補は受話器を置き
「司令、統幕はなんと？」
現「いぶき」艦長の新波一佐は言い
「現場海域には第６護衛隊群を演習を切り上げさせて向かわせたそうだ」
秋津司令は言い
「我々は」
新波一佐は言うが
「我々は動くなとの事だ。北も南もこれに乗じて何をしでかすかわからん、その為の我々だろうからな」
そう答え
「それとだ、万が一の際には中国海軍が動くそうだ」
秋津司令は新波一佐に言い
「中国海軍?!」
新波一佐も言い
「我々がかつて戦った広東艦隊が集主席の命を受け出動待機状態にあるとの事だ」
秋津司令の言いに
「かつての有事で相まみれた・・広東艦隊・・もう５年も前になるのか・・・・」
過去を思い出すように新波一佐は言い
「昨日の敵は今日の友か・・・・・」
秋津司令も言った。そして
「今の所第６護衛隊群には被害は出てないそうだ、敵の奇襲攻撃はあったがそこは何とかイージス艦が踏ん張ってくれたようでな１４発のミサイルを全て撃墜し艦隊は前進したと報告は受けている。予

定では後一日で海域に到着するらしいが」
　秋津司令はモニターに表示された海図を指して言い
「ですが司令、それはこちらの思惑それを阻止するのがあちらの思惑では」
　新波一佐も言い
「そうだな、後一日の間に必ず妨害行動に出てくる。」
　秋津司令も新波一佐の考えに同調し
「艦載機も緊急出動とあって、万全の状況ではないらしいからな「ずいかく」も」
　秋津司令は言い
「何機非常時には上がれるんですか？」
　新波一佐の問いに
「今現在では４５機中３０だそうだ。先程まで演習をしていたのが祟って全機とも整備中だ。だが海域到着までには予備機含めて全て整備が完了する見込みだ」
　秋津司令が答え
「しかし、また不意をつかれましたね、防衛の空白地点を狙われるとは」
　新波一佐はやれやれと言わんばかりに苦笑し
「ああ、そうだな。だが我々ではどうにもならん。これ以上の上の事は政治が決めることだ。自衛官の我々に口出しはできん」
　答えた。
「司令・艦長、統合任務部隊の進捗状況は如何でしょうか？」
　船務長の永田三佐が横から言い
「うむ、状況によれば陸自は先の有事同様に特殊作戦群・水陸機動団そして第一空挺団を作戦に投入し海自は第６護衛隊群そして本作戦で初の実戦になるが特別警備隊そしてその他艦艇最後に空自は百里基地を起点として動くとの事だ。」
　秋津司令は現時点での状況を説明し
「我々が動けないのはきついですね」
　永田三佐は言ったが

「我々は我々の任務をこなす。それだけだ。いいな」
新波一佐は言ったのだった。この間もにも艦隊は敵艦隊と対峙する為に目標海域に全身を進める。国民・領土を守るために。

第２８話～敵潜撃沈～

哨戒ヘリ　フリッカー９
「ソノブイ反応あり、艦隊前方６０マイル敵潜です、数２」
その報告に再び艦隊に緊張が走る。
第６護衛隊群旗艦　「ずいかく」
ＣＩＣ
「やはり、待ち伏せていたかこのまま直進したら撃ってくるか？」
白谷司令は言い
「群司令、此処は迂回しましょう。多少距離を食っても安全に当初の海域に向かうべきです」
副長の矢口二佐は言うが
「司令、直進しましょう敵は我々の覚悟を見極めようとしています。ならば我々の覚悟を示すべきです、「先の有事同様に」」
風吹一佐は言った。かつての有事の際に「いぶき」の前にも人民解放軍の潜水艦が立ちはだかった際にも今と同様の事があったのだ。
「・・・・・・・・・・・・・・・」
白谷群司令は両名の意見を伺い
「お二方、意見具申はそれだけか」
聞き
「「はっ」」
風吹、矢口の両名は答え
「よし、直進だ」
決断を下し、風吹一佐がインカムを取り
「全艦、戦闘配置、繰り返す、戦闘配置」
通達し、警報と同時に艦内は水密扉が非常閉鎖されて行く。そして
第９４航空団　艦内格納庫
「司令、艦隊は対潜戦に入ったようです」
航空団隊員は言い、深山航空団司令は
「心配するな、こいつは空母だ、魚雷の一発や二発では簡単に沈んだりはしない」

隊員達に言う。同時刻

艦隊防空イージス艦ＤＤＧ１８０「はぐろ」

「風吹の奴、本艦に・・「はぐろ」に盾になれというのだな副長、「ずいかく」の前に出るぞ取舵２０。機関全速前進、艦幅１５００メートルに広げ」

俺は鉄鉢をかぶりつつ指示を出し

「了解しました」

翼も冷静に言い

「全速前進、「ずいかく」の前に出る。」

言い

「砲雷長、対潜戦闘用意っ」

小林三佐に指示を出し

「ボフォース対潜弾、０７式対潜ミサイル発射用意」

「データ入力よし」

乗組員は言ったのだった。そして海中では

東亜連邦海軍　潜水艦

「艦長、敵艦隊に動きです」

乗組員は言い

「「ずいかく」右舷イージス巡洋艦速力上げ前に出ます、単縦陣を形成しつつあり艦隊速度に変化はありません」

モニターをチェックし報告し

「この前のまでの不抜けた自衛隊とは違うと言いたいのか?、勇ましい事だ「ずいかく」

東亜連邦潜水艦艦長は自衛隊を舐めたように言っているが洋上では・・・・

艦隊防衛イージス艦ＤＤＧ１８０「はぐろ」

「東亜連邦潜水艦の交戦限界距離は７０００メートルとデータがある。」

俺は言いその横で
「魚雷の射程は7㌔ですね」
副長の翼も言い
「後、1．5㌔で艦隊は敵射程圏内に突入する・・・・」
俺は言い
「敵潜に動きなし・・・チキンレースのつもりでしょうか？」
砲雷長の小林三佐も言うそして
「こちら、哨戒ヘリフリッカー7より「はぐろ」ＣＩＣへ東亜連邦潜動きりません」
報告を受ける、その頃海中では・・・・・・・
艦隊防衛潜水艦　ＳＳ５０９「せいりゅう」
「図々し野郎どもだな、東亜の野郎どもは」
せいりゅう艦長深町洋一佐は言い
「は?!」
副長の速水三佐は反応し
「探知されちまってるのに動く気配すら見せねぇのはな」
深町一佐は言い
「・・・・・・・・・・・・・・・・・・・」
少し考え
「アクティブ・ソナーをブチ込んでやれ、同時に魚雷発射管外扉開口」
深町一佐は言い、それに
「艦長、敵艦は本艦と僚艦「しょうりゅう」を補足していません、ここで本艦がピンを打てば僚艦も発見されます。」
副長の速水三佐が艦長の深町一佐に意見を述べる。それに対し
「教えてやるんだよ、」
深町一佐は言い
「は？」
速水三佐は答え
「こっちが・・・俺達がいつでもお前達を「殺す」事のできる位置に陣

取っているという事を教えてやるんだよ、海江田の野郎も同じ考えのはずだ」
深町一佐は言った。そして発射管室に指示を出す
「魚雷発射管室より発令所へ、魚雷発射管１番、２番８９式魚雷装填確認目標敵潜との距離２８５０メートル、方位０―７―０データ入力完了」
発射管室から報告が上がり
「発射管室より発令所、魚雷発射管１番、２番注水完了」
発射準備完了の報告が発射管室から発令所にもたらされ
「魚雷発射管外扉開口準備」
深町一佐が命令を下し
「魚雷発射管外扉開口準備」
副長の速水三佐が復唱する。そして僚艦「しょうりゅうも」
艦隊防衛潜水艦　ＳＳ５１０「しょうりゅう」
「山中、ピンガーを撃て、発射後直ちに魚雷発射管外扉開口」
艦長の海江田一佐は副長の山中三佐に命じ、山中三佐も
「艦長、しかしそれでは本艦と「せいりゅう」が敵潜に補足されます」
山中三佐は言ったが
「深町も私と同じ考えに行き着いたはずだ。我々がいつでも敵潜２隻を葬れる位置に居ると言う事を教えてやるのだ」
しょうりゅう艦長の海江田一佐も深町一佐同様の結論にたどり着いていた。そして海江田一佐も深町一佐同様に魚雷発射管室に指示を飛ばす。
「魚雷発射管室より発令所へ、魚雷発射管２番、３番８９式魚雷装填確認目標敵潜との距離２８５０メートル、方位０―７―０データ入力完了」
発射管室から報告が上がり
「発射管室より発令所、魚雷発射管２番、３番注水完了」
発射準備完了の報告が発射管室から発令所にもたらされ
「魚雷発射管外扉開口準備」
海江田一佐が命令を下し

「魚雷発射管外扉開口準備」
副長の山中三佐が復唱する。
そして2隻とも
「「ピンガー打ちます」」
それぞれのソナー要員がアクティブ・ソナーを敵潜に向けて撃ったのと同時に魚雷発射管外扉を開口した

東亜連邦海軍　潜水艦
カーーーーン
船体に当たる音が聞こえ
「!!、ピンガーです」
「右舷2時の方向、自衛隊潜水艦深度４５０おそらく「せいりゅう」
「しょうりゅう」です。」
「艦長、敵潜2隻魚雷発射管外扉開口」
報告し
「動くなっ」
艦長は指示を出し
「艦長、敵艦隊魚雷発射圏内に入ります」
緊張のやり取りが続く中洋上で

旗艦ＤＤＶ１９４「ずいかく」
「東亜連邦潜との距離、７キロを突破しました」
「敵潜に向け、「せいりゅう」「しょうりゅう」魚雷発射管外扉開口」
状況情報が集まる中、報告を聞きつつ風吹一佐は
「〈白谷司令〉」
「〈矢口副長〉」
「〈ここ既に・・・戦闘海域です〉」
風吹一佐は内心思いつつその横の矢口二佐は
「〈一体何を考えている・・・魚雷を撃てるはずない・・・こっちが撃ち返したらお前らはこの海域に沈む・・・死ぬことになるんだぞ・・・打てるはずない・・・〉」

思っていた。そして海中で再び動きがあった。

艦隊防衛潜水艦　ＳＳ５０９「せいりゅう」
「！、艦長前方敵潜に動き」
ソナーが報告し
「敵潜1機関始動、回頭します」
その報告に
「回頭だと！、どっちだ」
深町一佐は言い
「ハッ、手前の一艦右です」
報告し、深町一佐はモニターを見る。
「・・・・なる程・・・・一艦は艦隊、もう一艦は俺達に対応しよってはらか」
深町一佐は言ったが
「！回頭終了、敵潜本艦・僚艦に向け正対、静止しました」
ソナーは言いそれと同時に
「敵両艦共に魚雷発射管外扉開口音ッ」
緊急の報告に
「開けやがったのか、此処でやろうっていうのかおもしれぇ」
深町一佐は言った。

艦隊防衛潜水艦　ＳＳ５１０「しょうりゅう」
「艦長、敵両艦とも魚雷発射外扉開口音探知」
ソナーが報告し
「なる程・・・此処で我々とやり合おうという事か？」
海江田一佐は言い
「艦長!!」
狼狽える山中に
「動くな」
指示を出した。、洋上では
「東亜連邦潜回頭、「せいりゅう」「しょうりゅう」に正対、更に両艦と

もに魚雷発射管外扉開口音探知」
艦隊哨戒ヘリが各艦へ状況を報告する
艦隊防衛イージス艦ＤＤＧ１７９「まや」
ＣＩＣ
「どうあっても、こちらの動きを阻止しようというのか・・・・」
イージス護衛艦「はぐろ」の後方を追走するイージス護衛艦「まや」
艦長の木村一佐は言い
「艦長!!」
副長の大室二佐も緊張しつつ言う。
旗艦ＤＤＶ１９４「ずいかく」
敵味方両艦共に魚雷発射管を開口し銃口を突きつけあった状況下に
「風吹艦長、判断はどうか」
群司令の白谷司令は言い、これに対し
「はっ、これは正当防衛を成立させる要件「急迫不正の侵害」に当たる事は明白です」
風吹は言い
「急迫不正の侵害・・・・・・」
白谷司令は言い
「相手は既に我艦隊に対し明白な敵対行動をとっています、「殺らなければ」「殺られる」状況」
風吹一佐はモニターを見て言い
「本海域は公海ですが、既に東亜連邦は我々に敵対行動を行っています、攻撃意思を持った明らかな「敵」である事に変わりはありません」
風吹一佐が言い、更に
「洋上の我々は魚雷を回避できても近距離で敵潜と対峙している「せいりゅう」「しょうりゅう」が危険です、両艦共に洋上からの攻撃を察知するしか攻撃命令を把握できません」
モニターを見て風吹一佐は白谷群司令に状況を説明し

「白谷群司令、深町一佐以下１５０名・海江田一佐以下１５０名合計３００名の乗員の命が掛かっています、群司令これは我々がいや「自衛隊」が超えなければならないハードルです。直ちに全艦に「攻撃命令」を」
　風吹一佐は司令に強く言い、それを横で間近で見ていた副長の矢口二佐は
「〔先の有事の際にも自衛隊は先制攻撃を封印した。必ず受身であった、それを今此処でそのハードルを越えようというのか・・・いや・・・出来るのか？〕」
　矢口二佐はやり取りを見て思っていた。

　東亜連邦海軍　潜水艦
「艦長・・・・」
　魚雷発射管外扉を開口したまま対峙するが
「洋上側も原則する素振りも見せず突っ込んできます」
「魚雷をブチ込みますか？」
　乗組員も言い始める
「敵艦隊接近、直上まで６分」
　報告をうけ
「撃てるはずが無かろう・・・・所詮は専守防衛等・・・・今の時代に通用するものではないと教えてやる、無論、日本人共の命をもってな」
　艦長は薄気味悪い笑みを浮かべた時だった
「!!洋上より発射音多数ッ着水音探知ッ」
「なに!!」
「スクリュー音探知、魚雷です、洋上イージス巡洋艦より放たれた魚雷、数多数ッ」
　ソナーが慌てて報告するも後の祭り、チキンレースでギリギリまで撃たなかった東亜連邦側の完全な負けであった。
「うわっッッ」
　ソナーが耳を押さえ
「付近で魚雷爆発、自衛隊潜水艦より魚雷発射音、僚艦に命中！船体破

壊音、浸水音、」
慌ててヘッドセットを付け直すも
「本艦に魚雷多数接近ッ艦長!!!」
ソナーの叫びも艦長には届かなかった
「・・・・・・・・・・・・・・・ばかな・・・・」
次の瞬間に各艦から放たれた魚雷は東亜連邦潜水艦に数分の狂いなくそして外れることなく綺麗に命中し海の藻屑となった・・・遡る事数分前

旗艦ＤＤＶ１９４「ずいかく」
「・・・・・・・・・・・・・・」
艦隊群司令白谷海将補は目をつぶり考えていたが、目を見開き
「・・・・・・風吹艦長・・・よかろう全艦に下令「敵潜を撃沈せよ」攻撃命令だ」
白谷司令は決断し全艦による敵潜へと一斉攻撃を下す事に決めたのだ。

艦隊防衛イージス護衛艦ＤＤＧ１８０「はぐろ」
ＣＩＣ
「了解、艦長攻撃命令です」
通信員からの返答に
「了解だ、前甲板ＶＬＳ、０７式対潜ミサイル目標敵潜ッ・・・・・」
横の副長の翼を見て
「・・・・コクン・・・」
翼も頷き
「撃てーーーッ」
命令を下しＶＬＳより０７式対潜ミサイルが飛んでいく。飛んでいくミサイルを見ながら
「〔許せ・・・・真珠・・・まだ見ぬわが子よ〕」
命令とはいえ多数の命を奪う事になった事を心の中で妻とまだ見ぬ我が子に俺は詫びていた。

艦隊防衛イージス護衛艦ＤＤＧ１７９「まや」
「艦長、「ずいかく」より各艦へ攻撃命令です、０７式対潜ミサイル発射準備よしッ」
報告を受け、副長の大室二佐を見て大室二佐も頷き
「撃てーーーッ」
「はぐろ」同様に０７式対潜ミサイルが前甲板ＶＬＳより発射されて行く。

艦隊防衛潜水艦　ＳＳ５０９「せいりゅう」
「艦長、洋上発射音多数・・・これは・・・艦隊の敵潜への攻撃です」
これを受け
「よし、魚雷発射ッ」
深町一佐は命じ「せいりゅう」魚雷発射管から敵潜に向けけて魚雷が発射された

艦隊防衛潜水艦　ＳＳ５１０「しょうりゅう」
「洋上発射音多数、艦長!!」
副長の山中三佐は言い
「よし、本艦も攻撃だ魚雷発射ッ」
海江田一佐の命により「しょうりゅう」からも魚雷が敵潜に向けて発射され、東亜連邦海軍潜水艦は洋上と海中からのダブルパンチを見舞われ逃走、回避すらままならないう
ちに洋上イージス護衛艦からの０７式対潜ミサイルと、付近に潜んでいた自衛隊潜水艦による雷撃で撃沈されてしまったのだった。
彼らがこの最悪の結末になった理由は一つ「舐めてかかった」事がこの結末を招いたといえよう。自衛隊も先の「有事」を経験し「撃つ」時は迷わずに「撃つ」事ができるようになったのだ。

旗艦ＤＤＶ１９４「ずいかく」
ＣＩＣ

「哨戒ヘリより報告、海上に敵潜とおもしき残骸とオイルを多数かつ広範囲に確認、繰り返す――」
哨戒ヘリからの報告に
「了解」
風吹一佐は返答するも周りは
「・・・・・・・・・・・・・」
静まり帰っていた、無理もないたった今「自分達」は敵潜2隻を撃沈し約３００名の敵潜水艦乗員を「殺害」したのだから、そしてこれは直ぐに官邸にそして各国に上がる事になる。

第２９話～事実の重さ～

首相官邸
「撃・・・・沈・・・・だと?!」
伊部総理は言い
「はい、第６護衛隊群群司令白谷海将補からの報告で先の艦隊に対して奇襲攻撃をかけて来た潜水艦が待ち伏せをしており「防衛出動発令令下」かつ「正当防衛」の観点から敵潜２隻を撃沈したと報告が上がりました。」
西郷防衛大臣は報告し
「３００名・・・・・を殺したと・・・・いう事か」
天羽副総理も言ったが
「総理・副総理しっかりしてください、先に仕掛けて来たのは「東亜連邦」です。艦隊の戦闘は既に発令された「防衛出動令下」の戦闘です」
官房長官の福澤富雄は言い
「官房長官の言う通りです」
更迭された木戸外務大臣の後任に新たに任命された梅津健二外務大臣は言い
「現場では自衛隊が必死に敵の妨害をくぐり抜け、例えそれが敵兵を殺害する事になっても全身全霊を持ってその職務を果たそうとしている、我々が不抜けてどうするんです。」
言い
「総理、副総理これは国民や諸外国に向けて公表するべきです。情報を隠蔽したままでは国民は我々を信じませんそれに情報を隠し国民を欺く政府の何を信じろとなります」
梅津外務大臣は言い
「そうだな、公表しよう」
伊部総理は言い
「うむ、だが一つだけ懸念がある。」
天羽副総理は言い
「「東亜連邦」を更に追い込む事にならないかという事だ」

天羽副総理は言い
「でしたら、副総理、未確認と前置きをした上で敵潜撃沈の正式発表を行えばよろしいのではないでしょうか？」
西郷防衛大臣は言い
「それだ、そうしよう。」
官房長官福澤が賛同した、
「よし、その案で原稿を作ってくれ。私が直に発表する」
西郷防衛大臣は言い
「わかりました」
他の官僚達が動き始める。
「敵潜を撃沈し艦隊は後２４時間以内に現場海域に到達のみ込みです」
防衛省職員が言い
「そうか・・・しっかり艦隊をサポートしてやってくれ」
伊部総理は言った。そしてその報告から時間が経ち

「艦隊からの以上の報告から、未確認ではあるものの艦隊に対して攻撃を行った敵潜２隻を「撃沈」したとの報告を受けております。」
西郷防衛大臣は発表し
「防衛大臣、未確認なのでしょうか？」
「撃沈の必要はあったのでしょうか？」
「日本に対しての報復が予想されますが」
質問が飛び交うが、顔色一つ変えずに
「実際に現場で確認しなければわかりません」
「撃沈の必要はあったと判断しております、今後の作戦行動時に妨害行動に出てくる事も容易に判断できます、作戦の観点状からもやむおえない戦闘であったと」
「報復に関してですが、自衛隊の全能力をフル活用し国民の皆様をお守り致します」

西郷防衛大臣は言い切った、先の有事の時とは状況がまるっと違う。先の有事は中国という国を信じて戦闘を行ったが、今回の相手は話が通じなければ国際常識も何もないいわば癇癪を起こしたガキも同然の国なのだ。

佐伯家

「以上、防衛大臣の発表でした」

緊急記者会見が終わり

「て・・・敵潜水艦を・・・撃沈・・・・・」

「それも・・・・2隻」

父と母は固まっており

「約３００人の敵兵を・・・殺害・・・・・」

「う・・・うそ・・・・・」

妹の日向や菖蒲も衝撃を隠せない、それは私も同じで

「優希・・・自分を責めてるかもしれない・・・・・」

私は言い

「「どうして？姉さん」」

日向と菖蒲は言い

「艦隊での攻撃となれば全艦の攻撃で沈めた事になる。自分が命じた命令で人が死んでいるとしたらほんとに耐えられるかなってそれに・・・・・・」

私は不安に思いながら自分のお腹をさすりながら言うと

「真珠、大丈夫じゃ」

おじちゃんが言った。

「わしも最初はそうじゃったが、優希君は二度目だいちち自責の念に駆られていては戦闘に置ける状況判断・そして必要な命令を下せなくなるだが彼は既にその最初を乗り越えておる。」

おじいちゃんは言ったが

「私が言いたいのはもし優希が生まれてくる子供に対して罪悪を抱かないかと心配なの」

優希は優しい、そんな彼が自分の命令で大勢が死ぬ状況に耐えられるのか、また戦後に生まれるであろう子供にまともに接する事ができるか・・・不安な所はいっぱいだ。

「戦争なんて・・・・」

私はポツリと呟いた。

第３０話～各国の反応２～

防衛大臣の自衛隊艦隊の敵潜撃沈の報告は世界中を駆け巡った。
そして世界は・・・
中国　主席執務室
「集主席」
官僚が入ってくる中
「これかね」
モニターを見せる
「はい、自衛隊がやったと」
官僚は言い
「自衛隊を舐めたツケが早速ブーメランになったか。いい薬だろう、最も治ればの話だがな」
集主席はいい
「未確認と前置きしていますが、東亜連邦海軍潜水艦２隻が撃沈されております。」
報告に
「自衛隊の損害は？」
聞き
「いえ、損害０です」
官僚は報告し
「東亜連邦の動きはどうなっておる？」
問いに
「偵察衛星が東亜連邦の軍港を捉えておりますが、今の所撃沈された潜水艦の代替え潜を出航させる動きは確認が取れていません」
官僚は言い
「北方艦隊だと海中警備潜水艦は３隻のはずだから、２隻が撃沈されあと１隻が潜んでいるわけか」
主席は言い
「この情報は日本に？」
言う官僚に

「当たり前だ、急いで日本の防衛省に提供するんだ、それとその行いは正当な戦闘行動であると我国は日本を注視していると声明文を発表してくれ」
集主席は言い官僚は足早に出て行く
「東亜連邦よ・・・日本を、自衛隊を舐めるなよ・・・」
集主席は呟いたのだった。かつて刃を一戦交えた相手だからこそ分かる国の軍隊強さだと。

台湾
「そうですか、自衛隊が東亜連邦潜を撃沈・・・・」
総統は報告を官僚から聞き
「我国は自衛隊の戦闘行動を日本国の決断を支持する旨の声明文を発表してください、付け加えて東亜連邦に対してもこのような結果になったのも全て貴国の責任であるという事も付け加えて」
総統は言い
「はい、総統閣下仰せのままに致します。」
官僚は退室していき
「東亜連邦はグリフォンの尾を踏みつけた・・・いや眠れる虎をたたき起こした」
総統は呟いたのだった。

フィリピン
「大統領閣下、」
執務室に入ってくる官僚に
「これのことだろう、落ち着け」
大統領は言い
「日本自衛隊も大きく変わったものだ、ためらわずに敵潜を沈めるとは・・・東亜の奴らも今頃あわくっていることだろう。」
頷きつつ言い
「撃てぬと舐めてかかって返り討ちにされ潜水艦２隻が撃沈、乗員約３００名が戦死か、愚かな国だ、敵とはいえ乗員には少しは同情する

な」
　大統領は言うが
「とはいえ、今までの行いを鑑みれば「天罰」くだされたとでも解釈はできるな」
　言ったのだった。

　アメリカ合衆国
「大統領、これをご覧下さい」
　補佐官が防衛大臣の発表をパソコンで見せ
「日本自衛隊もやるようになったじゃないか、東亜連邦も今頃は大慌てだろうな」
　ドランプ大統領は言い
「はっ、偵察衛星の状況ですと東亜連邦は潜水艦2隻を失いました。ですがまだ一隻は潜んでいます。」
　軍事顧問のウォルターズ海軍准将は説明し
「なる程、准将我々も艦隊を派遣して一気に東亜を叩き潰すのが一番ではないかと思うのだが」
　ドランプ大統領は言うが
「大統領閣下、残念ながら我海軍は世界中に展開しており、その余力がありません。此処は日本自衛隊に東亜連邦退治は頑張ってもらうしかありません。いま現状ですと」
「うむむ」
　ドランプ大統領は唸り
「なんとか自衛隊の支援に動ければ・・・・・」
　言いつつも
「補佐官、報道には我国は日本国の判断・自衛隊の軍事行動を断固として支持する旨を発表してくれ。東亜連邦にもガツンと聞くような一言をな」
　そう思っているアメリカだったがそのアメリカや中国にチャンス

が訪れるのは先の話。

第３１話～第９４航空団～

旗艦ＤＤＶ１９４　ずいかく
第９４航空団　パイロット待機室
他の飛行隊のチームやパイロット達が各々の時間を過ごす中
「やったんだな・・・・俺達・・」
モニターを見ながらアーノルド隊飛行隊長の辻堂武三等空佐が言う、モニターでは防衛大臣の会見が放送されており
「３００人か・・・でもそれは奴らも覚悟の上だ、人の土地に銃を持ってくれば撃たれる。それは世界の常識だろ」
プレデター隊飛行隊長二条優也三等空佐が言った。
「それよか、俺達の機体のチェック完了までどれくらいかかる？敵が艦載機を上げてきたら艦のイージスシステムだけでは防ぎきれんぞ、ほらコーヒー」
両手にコーヒを持ちながら歩いてきたのはピジョット隊飛行隊長柳木連三等空佐だ。
「おう、柳木サンキュウ」
二条三佐と辻堂三佐はコーヒーを受け取り
「なんというか、こう落ち着かねぇんだよ艦隊が必死に戦ってる時に俺達航空団のパイロットは機体がまだ完全に整備完了になっていないから動けない」
辻堂三佐は言い
「耐えろ辻堂、艦隊が海域に到着すれば嫌というほどに東亜のＭＩＧ３５とやり合う事になるんだ」
二条三佐は言い
「今の状況はどうなんだ？柳木」
二条三佐は聞き
「４５機中３９機は整備が完了、後１機の整備が完了すれば飛行隊は出撃可能になる。後の予備機５機は時間をある程度落としても問題はないからな」
自分のコーヒーを飲みながら柳木三佐は言った。

艦載機格納庫

「整備急げッ」
格納庫では艦載機整備要員らが動き回っていた。４５機の整備は容易ではなかった。
「ガンポット２５ｍｍ弾装填急げッ」
「燃料まだか」
「回転排気口・ベアリングチェックッ」
そんな中
「整備長、後どれくらいで終わりそうか？」
航空団司令　深山一佐は格納庫に行き整備長に訪ね
「これ以上のスピードアップは無理だ、いま最後の１機を整備している３９機まで出撃可能だ。予備機も同時進行でやってるよ」
整備長は忙しそうに汗をぬぐいながら答える。
「ありがとうございます、整備長」
深山一佐も言い
「いやはや、私が現役のうちにまた「防衛出動」がかかるとはね・・・」
皮肉そうに言い
「整備長・・・家族は・・・・」
聞くと
「妻と息子夫婦と孫が二人だ。」
整備長は答え
「そうですか・・・」
深山一佐は頷いた。
「整備長、ＣＩＣからで整備の進捗状況を報告しろと副長が」
それに
「せっかちな副長だな、精密な機械なんだぞ全く、ＣＩＣにはこう言っとけ整備が完了したら報告を入れるから少し待てと」
指示を飛ばし
「了解」

もう一人の整備員が受話器に向かって話していた。
「戦場・・・近し・・・か」
綺麗に並んでいるＦ―３５ＪＢを見ながら深山一佐は思いつつ
「〔最後に此処に何機残っているのだろうな・・・〕」
内心感じていたのだった。

第３２話～東亜連邦議会～

東亜連邦議会
「以上が現状の損害です」
軍の上層部が議員らに報告を上げ
「ふざけるな、何が以上が現状の損害だ潜水艦を２隻も沈められたんだぞ!!」
議員の一人は言い、更に
「乗組員の家族に遺族になんと言って説明する!!」
「保証はどうするんだ!!３００人だぞ!!」
「そもそも自衛隊が撃ってくる事自体予期していなかったなんてのは軍の言い訳だろうが!!」
議場は荒れた、無理もない。撃てないはずと思っていた自衛隊空母機動部隊の攻撃を受け潜水艦２隻が撃沈されたなどと報告が上がったのには我が目を疑うほどだった。
「まだ作戦は始まったばかりです、推移を見守って頂きたいと存じますが」
軍側は言い
「陸軍は空挺大隊はそれぞれの島に上陸し三島を占領下においています。」
陸軍の担当は説明し
「形上は捕虜となっておりますが、日本国民の方々には公民館に拘束している状況です尚生活等に必要な物資は我が軍が提供している状況であり住民には丁重に接するように兵士・指揮官らには厳命してあります。」
陸軍の説明に
「住民を人質に日本政府に迫れば・・・・・」
という議員もいたが
「お言葉ですが、我国が置かれた状況が議員にはご理解頂けてないようですね、日本軍のバックには同盟国の米軍やそして先の有事で刃を交え今では友好国以上の関係にあると言っても過言でもない中国人

民解放軍もいる世界有数の大国が本気になれば我々のような国など地図から消し飛ぶ事になります。」
「・・・・・・・・・・・・」
米国・中国・の単語に議員は黙る。そして
「話を続けます、3島にはそれぞれ地対空ミサイル・地対艦ミサイル陣の構築を開始する段取りとなっています。日本名秋島にはレーダー基地とヘリポートを建設する為の資材をを積んだ海軍の艦艇から資材を下ろし建設を始めている段階です。」
陸軍の担当は説明を終え

「次に海軍側の報告を」
議長は言い
「はっ」
海軍の担当が議場に立ち
「海軍側からではご存知の通り自衛隊の攻撃により潜水艦を2隻損失し乗員の犠牲は約３００人に上っています、艦隊は秋島後方に陣取り西の島周辺に警戒駆逐艦を2隻配備しています。その状況を維持し日本国と自衛隊にプレッシャーをかけています。」
一通り説明し
「艦載機は上げられるのか」
「敵艦隊を攻撃し沈め意志を削いでしまえばいいのではないか」
現場を知らない議員はすき放題言うが
「艦載機を上げろとおっしゃいますが、機数の上では我々は１５機自衛隊の空母の艦載機搭載機数を上回っています。ですがパイロットの練度と言うものをご存知でしょうか?」
担当は言い
「航空自衛隊のパイロットは精鋭揃い、米軍もそれには一目おいており先の有事以降中国人民開放空軍も航空自衛隊との共同訓練を定期的に行っています。日本は否定するでしょうが彼らは「アジア最強」の空軍と断言できます、そのパイロットが４０人いれば三倍以上の１２０機に匹敵する戦力を保持している事に変わりはありません。」

空自の事を詳しく説明し更に
「敵艦隊を撃沈せよとおっしゃいますが、既に犠牲が２隻も出ている増援も認められない現状で自衛隊空母艦隊を全滅させろ?・・・現実を見ていないとしか言えない。」
海軍の担当は報告し
「いま現状ではなんとも言えませんが、自衛隊の艦隊は２４時間以内に現場海域に到達する見通しです。これ以上の妨害行動は今現段階では難しいかと思われます。以上です」
海軍側の担当は報告を終える。
「日本側の抵抗はどれほど予測される?」
一人の議員が言い
「先の有事、日本は統合任務部隊タスクフォースを結成し中国と戦った。だとすれば我々とぶつかる時もそう来るはずだが」
議員は言い
「現段階では未知数です」
軍側は答えたのだった。

第３３話～統合任務部隊１５１～

統合任務部隊１５１　春間群島現状回復部隊
総司令部　横須賀　艦隊総司令部
百里基地　第七航空団　陸自特殊作戦群　海自特別警備隊　第一空挺団　集結地点
横須賀港　水陸機動団　水陸機動団装備集結地点

百里基地
此処に兵員・装備の輸送の為オスプレイやＣ―２輸送機がピストン輸送され次々に隊員や装備が下ろされる
兵員
特殊作戦群　二個戦闘中隊　２４０名
特別警備隊　二個戦闘小隊　４０名
第一空挺団　二個戦闘大隊　８００名

隊員待機室
此処に陸自特殊作戦群　海自特別警備隊の隊員らが分けて待機していた。
「聞いたか、ずいかく艦隊がやったそうだぜ」
陸自特殊作戦群隊員が海自特警隊員に言う
「ああ、聞いてるよ難しい中よく撃沈したもんだよ」
特戦の隊員は１０．５インチモデルの２０式小銃を整備し特警の隊員も同じく１０．５インチ仕様の２０式小銃を整備する。
「まぁ、俺達陸自はずいかくを「正規空母もどき」と小馬鹿にしてきたが考えを改めないとな」
頭をかきながら言い
「そうしてくれ、あいつらが踏ん張らないと俺たちはここから動けん」
特別警備隊の隊員は言い
「だが最終的には俺達が降下しないと状況制圧はできないからな」
特戦群の隊員はいい

「違いない」
特警隊の隊員も頷いた。

第一空挺団待機室
「しかし、正規空母もどきと馬鹿にしてきたがようやりやがる、敵潜２隻を撃沈とは先の有事でもしなかったことだぜ」
空挺団隊員は言い
「ああ、そうだな」
もう片方では２０式小銃を整備している隊員、新聞を読む隊員という中
「整備に余念がないな」
新聞を読む隊員が言い
ガチャ・・・・ジャキンッ
組立作業を終え構えて見る
「戦場で頼れるのはこいつだけだからな」
隊員は言った。その時だった。
「ブリーフィングだ、大隊集合」
幹部が集合を掛け
「お・・・いよいよか？」
空挺隊員も言っているその頃

特殊作戦群　特別警備隊　待機室
「ようし、お前らブリーフィングだ」
特殊作戦群第一戦闘中隊中隊長井上豪生三等陸佐が言い
「お前ら、集合だ」
特別警備隊第一戦闘小隊隊長一条院優樹三等海佐も言い隊員らは移動する。

横須賀港
水陸機動団　待機所
「第６護衛隊群が道を切り開きその後ろを我々が行くか・・・・」

水陸機動団第一連隊隊長黒崎隆治一佐は言った。
「それも我々がまずそこまで進出する条件は航空優勢と海上優勢の確保が絶対条件になりますけどね」
副連隊長の的場真司二佐が言い
「そうだな・・第６護衛隊群がどこまで踏ん張れるかにかかってる・・いや踏ん張ってもらわないと困る。」
黒崎一佐は言った。水陸機動団の強襲上陸を支援すべく佐世保第二護衛隊群も出動準備を整え待機していた。
「第６護衛隊群がいくら踏ん張っても最後には俺達が上陸しないとどうにもなるまい」
黒崎一佐は言ったのだった。

第３４話～奇襲パート２～

敵潜を撃沈し艦載機の整備が９９％終わる中、艦隊はとうとう敵が支配する現場海域に到着した。

春間群島　秋島後方５０キロ　洋上

敵艦隊北方艦隊旗艦グルシャから艦載機ＭＩＧ３５が発艦したのを自衛隊早期警戒機コールサイン「スカイ・アイ」は捉えていた。

第６護衛隊群　艦隊上空

航空自衛隊　早期警戒機　Ｅ―７６７　コールサイン「スカイ・アイ」

「機長、敵空母グルシャより発艦探知」

警戒機乗員が言い

「こちら「スカイ・アイ」より「ずいかく」へ、敵空母「グルシャ」に動きアリ、敵機５機の発艦を探知、編隊を組み針路０―８―０東に向かっています、高度１２０００メートル」

この早期警戒機「スカイ・アイ」からの報告に

旗艦ＤＤＶ１９４「ずいかく」

ＣＩＣ

「やはり、まだ諦めていなかったか・・・」

風吹一佐は言い

「ですが艦長、微かな小さい輝点です。鳥にしか見えません」

早期警戒機「スカイ・アイ」より送られてきたデータがモニターに表示されレーダー要員は言うが

「マッハで飛ぶ鳥はいない、コイツはステルス機ＭＩＧ３５だ」

風吹一佐は言い、モニターを見ながら

「我艦隊との距離は１６５０キロ・・・・」

風吹一佐はモニタ越しに向かってくる敵機をみつつ言い

「艦長、敵攻撃機の射程まで４５分」
レーダー要員は言い、白谷群司令は
「風吹艦長、全艦に対空戦闘を」
言い、インカムを取り
「旗艦「ずいかく」より全艦に達する、対空戦闘用意ッ、繰り返す対空戦闘用意ッ」
命令により艦隊は対空戦闘に移行する
ビィーーーービィーーーーービィーーーーー

敵機より照射されたレーダに補足され艦内に警告音が鳴り響く
「ＭＩＧ３５レーダー波照射ッ」
ＣＩＣでも更に緊張度が増す、それでも風吹一佐は冷静に
「ＭＩＧ３５の位置は」
レーダー要因に問い
「方位２―８―１０、高度１１０００距離５５キロ」
要因は報告し
「速度マッハ１．９尚も接近します。」
それに
「こいつは撃ってくるぞ・・・」
レーダーを見ながら風吹一佐が言いそれとほぼ同時に
「敵機ミサイル発射を確認、敵機ミサイル発射を確認、数８、距離４５キロ」
レーダー要員は言い
「頼んだぞ・・・「はぐろ」「まや」」
白谷司令は艦隊前衛に位置するイージス艦に追撃を託した

第９４航空団パイロット待機室
「距離４０キロ、本艦到達まで５０秒」
パイロット達は緊張した面持ちで椅子に座る。
「チャフばら撒いて、撒けないとは艦はじれったい・・・・・」
椅子に座る航空団司令深山一佐がボソリと呟いた

艦隊防空イージス艦ＤＤＧ１８０「はぐろ」
ＣＩＣ
「全ての訓練はこの時のためにあったと心せよ、対空戦闘ッ」
俺は言い
砲雷長小林三佐は
「前甲板ＶＬＳ１番から４番、艦対空ミサイルＳＭ２発射用意ッ」
言い
「小林砲雷長、目標４基、１基も打ち漏らすなよ」
俺は言い
「お任せ下さい、艦長。目標データ入力完了！」
小林三佐は言い、一瞬俺を見て俺も頷き
「撃っーーー」
発射命令を下しＶＬＳからミサイル４発が目標に向けて飛んでいった。

艦隊防空イージス艦ＤＤＧ１７９「まや」
ＣＩＣ
「木村艦長、データ入力完了発射準備よし」
砲雷長が言い
「よしっ、撃てっ」
命令を下し
「はぐろ」同様に前甲板ＶＬＳから４発の艦対空ミサイルが飛んでいく

旗艦ＤＤＶ１９４「ずいかく」
ＣＩＣ
「「はぐろ」「まや」発射対空ミサイル計８基、追撃コースに入ります目標との距離まで１２キロ」
レーダー要員は言いもう一人がモニターを見ながら

「着弾まで秒読み開始っ10秒・・・・・・・・6秒・・・・・・・・・2秒・・・」

モニターでは敵機が発射したミサイルと「まや」「はぐろ」が発射したミサイルが命中し全ての輝点が消えていた

「撃墜を確認、撃墜を確認」

レーダー要員はモニターを見ながら言い

「8基すべてをか」

白谷司令は言い

「はい、1基漏らさず撃墜しました。」

その答えにCICに安堵の雰囲気が漂う

「よくやってくれた、一ノ瀬一佐、木村一佐」

白谷司令は帽子を取り航空団では

「よしっ」

「流石イージス」

パイロット達も安堵していたが

険しい顔をしたままモニターを見つめる風吹一佐は

「・・・・・・・・・・・」

「レーダー士官、MIG35は5機編隊だったはずだな・・・・」

言い

「5機・・・・で・・・・」

レーダー士官は再度モニターを見るとモニターには4機しか写っていなかった。

「目標ミサイルが8基であれば1機が撃っていない」

風吹一佐がモニターをみていると

「コンタクト、早期警戒機「スカイ・アイ」のレーダーが補足しています、敵影1距離26キロしかもこちらのイージス艦のレーダー索敵を逃れる超低空で接近してきます」

レーダー要員は言い

「白谷群司令、こいつは単独による第二次攻撃です」

風吹一佐は言い

「そうらしいな」

白谷群司令は言い
「追撃用意っ」
風吹一佐に指示を出し
「はっ」
直ぐに風吹一佐はインカムを取り
「「ずいかく」ＣＩＣより、「まやＣＩＣ」」
風吹一佐は「まやＣＩＣ」を呼び出し
「敵１機が超低空で侵入してくる、敵は必ず攻撃位置でポップアップするその瞬間を捉えるしか対応方法はない、ＭＩＧ３５は３０キロ圏内に侵入している対応を」
イージス艦「まや」に対応を命じ
「白谷群司令、撃墜命令を!!」
後ろを振り返り風吹一佐は言い
「よかろう、「撃墜せよ」」
白谷群司令は命じ
「「ずいかく」より「まや」へ侵入機を補足「撃墜」せよーーー」
その命令に――――――

艦隊防空イージス艦ＤＤＧ１７９「まや」
「撃墜せよ」
旗艦ＣＩＣからの指示に一瞬空気が凍るが
「了解」
艦長の木村一佐は言い
「前甲板ＶＬＳ４番から６番艦対空ミサイル発射用意っ」
命令を出したのと同時に
「「ずいかく」にレーダー波照射ロックオンされています、方位２―７―８、距離１５キロ」
言い
「ＭＩＧ３５ミサイル発射を探知目標２合計３」
「ミサイル追尾システム、データー入力」
「入力完了っ」

それぞれが動き
「発射っ」
敵機とその敵機が放ったミサイル二向け合計3発のミサイルが飛んでいく

旗艦ＤＤＶ１９４「ずいかく」
ＣＩＣ
「まや」ミサイルを発射、距離5キロ・・・・・3キロ・・・・・・2キロ・・・」
「ミサイル2基撃墜を確認、残る1基敵機に向かいますっ」
皆がモニターを注視する中・・・輝点が消えた
「・・・・撃墜を確認・・・・・・」
レーダー要員は言い
「風吹艦長、パイロットは脱出したか」
白谷群司令は言い
「難しい所と思います・・・・」
パイロットの観点から風吹は言った。あの距離で脱出できたか否かは微妙な所だ。そんな中
「忘れるな、我々はスイッチ、命令一つで東亜連邦機を撃墜した、これから更に戦闘は激化すると思われるだが、この感触は絶対に忘れるな・・・・・」
白谷群司令は言い
「風吹艦長、パイロットの捜索を二時間後に出発する」
白谷群司令は言い
「了」
風吹一佐は言うのだった。

第３５話～捕虜～

艦隊防空イージス艦ＤＤＧ１８０「はぐろ」
ＣＩＣ
「ＣＩＣより艦橋、副長パイロットの捜索はどうだ？」
俺は艦橋にいる副長の翼に言い
「いま全力を挙げて行っています。ですが残骸を少し発見しましたがパイロットの発見には至っていません」
翼は言い
「諦めるな、全力で探せいいな」
厳命し
「もちろんです、艦長」
翼は言ったのだった。
「艦長、しかし近距離での撃墜でしたし脱出の余裕があったふうには思えなかったように感じますが」
砲雷長の小林三佐は言い
「確かにそうかもしれないが、可能性は０ではない。」
俺は言い
「そうでした、失礼しました艦長」
小林三佐は言い
「いや、気にするな、でも可能性は殆ど砲雷長の言う通り０に近い」
俺が言うと
「でも人としては同じ命です・・・・助かっていてほしいと思うのは自然なのではないでしょうか、そこに敵も味方もないと」
小林三佐は言い
「そうだな・・・」
俺は頷いた。その時だった
「フリッカー６より各艦へ、敵パイロットを発見、繰り返すパイロットを発見」
ヘリの報告が艦内に流れ
「よかった・・・・生きていてくれた・・・・」

俺は言い
「奇跡・・・・ですね」
砲雷長の小林三佐も言うのだった。

艦隊防空イージス艦ＤＤＧ１７９「まや」
「よかった・・・・生きていてくれた」
艦長の木村一佐は言い
「ええ、本当に奇跡ですあの距離から緊急脱出していていくれたなんて」
副長の大室二佐も言い
「一つの命が救われた・・・よかった」
木村一佐も頷きつつ言った。

旗艦「ずいかく」
艦橋
「生きていてくれたか・・・・」
副長の矢口二佐は呟いた。艦橋内も生存の報に喜んでいる。いかな敵とはいえ無残に死んで行くのは惨すぎると口にこそ出さないが思う所は同じなのだろう。そこに
「ＣＩＣより艦橋、聞こえるか」
ヘッドセットから艦長の風吹一佐の声が聞こえ
「はい聞こえます」
矢口二佐は言い
「スピーカーを切ってヘッドセットを頼む」
ヘッドセットに切り替え
「救助した東亜連邦機のパイロットは捕虜という事になるが、後方に移送されるまでの仮の収容先は通常なら旗艦「ずいかく」なのだろうが東亜連邦機のパイロットに本艦内部を見せるわけにもいかない、仮の収容先を護衛艦「てるづき」にしたいと思うが意見を頼む副長」
風吹一佐の声が聞こえ

「私としても妥当と判断します。問題はないかと」
矢口二佐は言い
「わかった、ありがとう」
通信を終えた。しかし俺達は敵と戦っているはずなのにこうして敵の心配をしてしまう、軍人に自分は向かないのではないかと思っている自分がそこにいた。しかし、戦場に置いてそんな気分にひたる余裕などは何もなかった。

第３６話～第９４航空団の初陣

旗艦「ずいかく」
ＣＩＣ
「早期警戒機より入電、敵空母グルシャよりＭＩＧ３５の発艦を確認、その数２０。高度１５００速度マッハ１．６を保ちながら向かってきます艦隊上空まで３５分」
モニターを見ながらレーダー要員は言い
「群司令、これは・・・・波状攻撃です」
風吹一佐は言い
「艦載機の状態は？」
言った時、
「艦長、格納庫からで予備機含む艦載機全４５機整備が完了したといつでも出撃できるとの事です」
隊員が言い
「整備長にご苦労と伝えてくれ」
風吹一佐はインカムに言いそのまま後ろの白谷群司令に
「群司令、第９４航空団の出撃許可を」
風吹一佐は白谷群司令に言い
「艦隊防空システムでは防ぎきれぬ・・・・・か、よかろう」
言い
「第９４航空団出撃準備・第９４航空団出撃準備」
艦内アナウンスが流れ

第９４航空団　パイロット待機室
「出番だ、行くぞ辻堂っ」
二条三等空佐は自身のヘルメットを引っつかみつつ辻堂三等空佐に言い
第９４航空団内部では、８機編成の５個飛行小隊がある。そして団内部のローテーション通りに第９４航空団としての初陣を飾ることになった第１飛行小隊「プレデター隊」と第２飛行小隊の「アーノル

ド隊」が２０機相手に二個飛行小隊を上げ１６機で迎え撃つのだ。
「おう、待ってました」
辻堂三等空佐も自身のヘルメットを掴み機体が準備されている格納庫へと向かう。
二条三佐と辻堂三佐ははヘルメットを取り待機室から格納庫に向かい、それぞれ自身の割り当てられた機体に乗り込みエレベータで甲板上に運ばれる
「レーダーシステムチェック・・・異常なし」
「機体センサーチェック・・・異常なし」
「火器管制システム・・・オーケー」
「システム・オールグリーン異常なし」
Ｆ―３５ＪＢの防風キャノピーが閉じられ飛行甲板に一番機が向かう。

ずいかくＣＩＣ
「深山団司令、こいつは通常のスクランブルではない、「戦闘」だ敵機を補足即、撃墜を許可する」
風吹一佐は言い
「了解」
深山団司令も頷き
「深山団司令、パイロットへの指示は？」
風吹一佐は訪ね
「まずは警告、向こうが撃つまで決して撃つなと」
深山司令が言うと
「付け加えろ」
風吹一佐は言い
「は？」
深山司令は言い
「「迷わず撃て」いいな1機も失ってはならんぞ」
風吹一佐は深山司令に強く言い
「了解」

深山一佐は答え管制から下を見ると既に隊長機が発艦準備に入っていた。
「プレデター1発艦スタンバイ完了」
「航空管制よりプレデターへ」
深山一佐は言い
「こちらプレデター1どうぞ」
二条三佐は答え
「二条三佐、指示の追加だ。」
深山一佐は言い
「は？」
出撃を直前に訝しむような声を上げるが
「迷わず撃て」・・よいな、艦長のお言葉だ1機も失ってはいかんぞ」
その命令に二条三佐は
「了解・・・「迷わず、撃ちます」」
そう言い残し飛行甲板を滑走し大空に、敵機が迫りつつある大空に発艦していった。その後ろで
「優也の奴行ったか・・・・」
アーノルド1事、辻堂三佐も
「迷わぬ為のお守りだ・・・・」
家族写真を貼り付けた、妻と娘・息子が映る写真を・・・見て
「摩理、必ず帰るからな」
写真を触り
「アーノルド1発艦準備を」
航空管制に呼ばれ
「了解ッ」
一言言い
そして迷いを断ち切るかのように仲間が待つ大空へと飛び立って行った。

ずいかく艦橋
「プレデター隊8機・アーノルド隊8機合計16機発艦確認、」

双眼鏡で空を見る隊員が言い
「副長、いよいよ第９４航空団の初陣ですね」
隊員の一人は言い
「彼らの任務は・・・１６機の任務はこの艦隊を、母艦をまもりきることだ。」
副長、矢口二佐は呟いた。

第３７話～大空の剣、音速の戦い～

同　ＣＩＣ

「グルシャを発艦した敵編隊、高度・速度・経路全てを維持したまま変わらず接近ッ」

「プレデター」・「アーノルド」両飛行隊との距離２５０キロ、ミサイル射程距離までおおよそ約６分」

モニター越しに要員は言い

「群司令、前方１０機が護衛、後方１０機が艦隊攻撃かと思われますが・・・・」

白谷群司令の後ろで隊員は言い

「通常ならば・・・・な」

白谷群司令は言い、風吹一佐はモニターを注視していた、その頃上空では

第９４航空団

「プレデター隊」隊長機

「〈このＦ―３５ＪＢが装備する対空ミサイルＡＩＭ１２０、ＡＭＲＡＡＭは射程は７０キロ対する東亜連邦機ＭＩＧ３５は中国からデータをハッキングして盗んで製造したＰＬ１０擬き、射程はほぼ互角、そしてステルス性で上回るこのＦ―３５を敵はまだ捉えていない、だが俺達のレーダーには既に敵味方識別に反応のないＭＩＧ３５を捉えている〉」

プレデター隊隊長、二条三佐はディスプレイを見ながら思っていた。

「アーノルド隊」隊長機

「〈同射程のミサイル同士で撃つならば先に撃った方が優位に立てる、それは優也も分かってるはずだし戦闘の常識だ〉」

辻堂三佐は横で共に飛行しているプレデター１事二条三佐を見つつ思い

「〈このままいけば２０対１６の不利な戦いになる、「迷わず撃て」の指

示だが既に迷い始めている〕」
　辻堂三佐は内心で思っていた。

　早期警戒機　スカイ・アイ
「早期警戒機スカイアイより「プレデター」「アーノルド」両飛行隊へ東亜連邦機先頭の１０機がミサイルを発射、距離８５キロ　計１０基、回避行動を」

　第１飛行隊、プレデター１
「〔馬鹿な、射撃管制レーダー波は感知していない、ロックオンもされていないぞ〕」
　機内のディスプレーを見て内心思い
「プレデター１より全機へ、敵は既にミサイルを撃った各機警戒をッ」
　言った途端に
　ピーーーーーーーーっ
　コックピット中にミサイル接近の警報音が響く
「ロックオンされた?!」
　二条・辻堂両三佐は言い
「〔しまった・・・・こいつは発射母機誘導のミサイルだ、発射しておいて３０キロ圏内に入った所でミサイルのレーダに変換・作動させた〕」
　二条三佐は思い
「プレデター１より全機へ、武器使用許可ウェポンズ・フリー行くぞっ」
　１６機の編隊はそれぞれ散会し
「各自、目標と交戦せよ、迷うなっ」
　二条三佐は全機に言い
「ミサイル発射即、回避だ」
　辻堂三佐も言う、各隊共に８基づつ合計１６発のミサイルを発射し即各機回避行動を取る

　第二飛行隊　アーノルド１

「一時の方向より敵ミサイル、チャフで回避」
ミサイルの軌道上に電波妨害用にチャフを撒き散らしミサイルを回避する、体に強烈なGが掛かり
「〔か・・・体中の血液が・・・・足に向かう・・頭が・・・空っぽに・・視界が色を失う〕」
強烈なGに辻堂三佐は耐えていた。

ずいかく
ＣＩＣ
「・・・・・・・・・・・」
無言でモニターを見る風吹一佐に
「プレデター」「アーノルド」両隊ミサイル発射後各機回避行動をとっています」
「被弾報告はありません」
「双方共に初弾は外したと思われます」
要員は言い
「・・・・・・・・・・・・・・・」
無言でモニター見る風吹一佐はインカムを取り
「ＣＩＣより航空管制、深山団司令」
団司令を呼び出し
「はっ」
深山一佐は応じ
「プレデター」「アーノルド」両隊、全機編隊を組み直し敵後方編隊の侵入コース左上空に移動させろ」
風吹一佐は言い
「敵後方編隊に道を空けろと?!」
深山一佐は言い
「そうだっ」
風吹一佐も言い
「奴らを艦隊上空にどうぞとご招待すると?!、それでは一体何の為の迎撃隊ですか?!」

深山団司令は言い
「それで分かる事もある」
風吹一佐も言った。
「・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・」
少し迷った後深山一佐はインカムを取り
「航空団司令より、プレデター1よく聞けっ」
「はっ」
二条三佐も応答し
「・・・・了解しました」
「プレデター1より全機へ」
二条三佐は僚機15機へ指示を飛ばす、するとモニターでは
「・・・・・・・・・・!!!」
「「グルシャ」攻撃機の波状攻撃の狙いは艦隊攻撃ではなく・・・F―35JBです」
レーダー要員は言い
「敵の目的はF―35JBとの戦闘だと・・・」
「これを叩く事か」
周りの隊員がモニターを見ながら言うなか
「これほどにF―35JBの能力を知りたいのか・・・・」
白谷群司令も言った。

上空
「〈来るぞ・・・・敵が・・・・〉」
レーダーを見ながら二条三佐は思った。そんな中
「ずいかくCICよりプレデター1へミサイル射程距離を保ちつつ不利な状況を回避せよ」
風吹一佐の指示に
「了解!」
二条三佐は言うのだった。

プレデター1
「〈敵後方編隊も合わせて合計２０機・・・艦隊に向かわず全機こっちに向かってくる、距離にして６５ｷﾛ約３分で視認距離だ・・・１６対２０・・・やはり不利だ・・・〉」
内心思うも
「プレデター1より全機へ、２０機全て相手にするな、上昇接近中の敵後方編隊をＡとしその左翼上方へと回り込む、Ｂは無視しＡの１０機を叩く」
各機に指示を飛ばす
「俺は左端の機をやる、各自目標を決め攻撃だっ」
指示を出しつつ自分の獲物を決める。
「〈このヘルメット装着型ＨＭＤなら機体の真下も丸見えだ、機体６箇所に設置された赤外線カメラで下方はもちろんの事、自機の全周がバイザーに視覚化される、その上このＨＭＤを使えば顔を向けた方向に瞬時に照準が可能だ、言うなれば「神の眼」〉だ」
内心思いつつ敵機を補足し
「距離４０ｷﾛ、高度はこちらの方が５０００ｍ上・・・捉えた・・・」
自動武器管制によりミサイルは対空ミサイルＡＩＭ１２０ＡＭＲＡＡＭを選択し
「この距離なら、外さんっ・・・・」
発射スイッチに指が行った時だった、脳裏に家族の事、家で不安に押し潰されそうになりながら自分の無事を信じて待つ妻の鈴鹿や友人・親の顔が脳裏に浮かび、それが判断を鈍らせる
「〈・・・・俺は撃てるのか・・・相手も同じ家族が兄弟が親のいる人間だぞ〉」
自分の心の声がきこた気がしそれが隙に繋がる
「アーノルド1よりプレデター1、８時の方向より敵ミサイルっ」
辻堂の呼びかけと機内に響くミサイルアラートの警報で現実に戻され
「クソッ」
一旦ロックオン状態を解除し

「フレアで回避っ」
敵ミサイル軌道上に欺瞞弾を撒き向かってくる敵ミサイル２発を回避し
「敵ミサイル全弾回避っ」
言い
そして再度ロックオンし
「ミサイル発射っ」
今度は迷いなく敵機へと向けてミサイルを撃ち込む。

ずいかく艦橋
「副長、いくらＦ―３５が優れた戦闘機でも２０対１６です」
後ろで部下が言い
「〜「グルシャ」は波状攻撃をかけるならＦ―３５ＪＢが追撃発艦すると読んでいた、だが実戦に置いてまだ戦った事のないＦ―３５ＪＢを最大の驚異と認めたのだ・・・〜」
内心思っていると
「副長、艦隊でなんとか支援できないですか!!」
言い
「全速で接近し「まや」「はぐろ」のイージスシステムなら敵の対空ミサイルを――」
部下は言うが
「間に合うまい・・・８０キロ先の上空だ、それに接近戦となれば誤射の危険性もます酷な事だが、Ｆ―３５ＪＢの性能と「プレデター」「アーノルド」両隊の技量を信じるしかない」
矢口二佐は言った。しかし、心配をよそに

ずいかくＣＩＣ
「敵Ａの９機目を撃墜確認っ」
レーダー要員は言い
「敵機残り１１機、敵編隊Ａは残り１機です」
レーダー要員の報告を受け

「これほど撃たれても一発も被弾せず、此処までの戦果を上げるとは・・・・」
　乗組員はモニターを見ながら言い
「敵編隊Ａに至っては殆ど壊滅状態です。」
　始まる前までは不利な空戦になると思われていたが、蓋を開けてみれば空自機が東亜連邦機を圧倒していた、４機分のハンデなぞなんのその
「艦長、「プレデター」「アーノルド」両隊の完勝ですか？」
　モニターを見ている隊員は言うが
「空戦は大量の燃料を消費する・・・そして艦に帰艦する事を考慮すれば後数分がが限度だろう。・・・」
　風吹一佐が言った時
「敵機、離脱していきます、」
　報告にＣＩＣは湧き
「ふぅ・・・・「プレデター」「アーノルド」両隊に助けられなた」
　白谷群司令は呟いた。結果から見れば
　自衛隊　１６機中　損耗０　合計残機　４５機
　東亜連邦　２０機中　損耗９〔Ｂ編隊損耗０　Ａ編隊損耗９　Ａ編隊ほぼ全滅〕合計残機５１機
　という名の大勝利で第９４航空団の初陣は終わったしかし

　プレデター１
　敵機の離脱の報を受け、戦闘空域を離脱し二条三佐らも自らの編隊を引き連れ母艦に戻るが、その中で二条三佐は言い知れぬ気分に襲われていた。
「〔敵機を９機も撃墜して・・・９人も殺したのに・・・なんだこの感覚・・生きてる感覚がまるでしない〕」
　思っていた。敵機に対する同情心は何も沸かなかった、自分は成すべき事をした、任務を果たしたしかし、この感覚である。
「これを第９２航空団の先輩方は体験したのか・・・・・」
　先の有事に中国と戦い、第９４航空団の創設の際には指導教官とし

て来てくれた先輩方の事を思い出していた・・・・そして
「「ずいかく」が見えてきた・・・・・か」
ぼんやりとであるものの母艦「ずいかく」が見えてきたのだった。

アーノルド1
帰艦する時に思った。
「まるで生きている実感がわかない、何なんだこの感覚・・・」
辻堂三佐も自分の編隊を引き連れつつ感じていた。実戦を経験した者が必ず通るであろう道を二条三佐や辻堂三佐は通っているのだ。その感覚自体が「生きている事」という事に二人が気づくのはまだ先の話。
敵への哀れみや同情と言った事は一切なかった、不当に人の土地に侵攻してくるのならば「殺される」覚悟も当然して然るべきことなのだからだ。でもいざ敵と戦い生き残って見るとこの言い表せないような感じである。
「〜メディカル・チェックを受けたら優也や連と話そうと一人では抱えきれそうにない〜」
横を飛ぶ同じＦ３５ＪＢを見ながら辻堂三佐は思っていた。この戦闘で彼らは実戦を始めて経験し一皮むけたのだ。しかし、今回の戦いがこれで終わりではないのだ、これが序章に過ぎない事は二人共指揮官として十分に理解していた。こうして次々にＦ３５ＪＢがずいかくの飛行甲板に着艦する。そして互いに機を降りて
「おう、互いに生きてたな・・・実感が全然ないが」
ヘルメットを左手で持ちながら二条三佐は苦笑しつつ言い
「そうだな・・・そもそも損害０で勝てた、イヤ敵を撤退させたと言うのも実感が全くない・・・一体どうなっちまんだ、俺達・・・・」
辻堂三佐も言う。二人には出撃前までの威勢の良さはなかった。
・・・・・ぽん
二条三佐が肩に手を置き
「メディカル・チェックを受けたら少し話そう。多分俺もお前も同じ事思ってるんじゃないか？」

二条三佐は言い
「ああ、頼む」
辻堂三佐も言い二人は部下を伴いながらメディカルチェックを受けるべく艦内の医務室に行くのだった。・・・その頃日本では・・・・

第３８話～東亜連邦外交部との接触～

ロシア　モスクワ

　此処に5カ国の大使と外交部の人間が集まっていた。

「本来ならばこのような交渉の席に座るつもりなどなかったが友好国のメンツを潰す訳にもいかんからな」

　東亜連邦代表はいい5人が座り対面上に日本大使、駐在武官そして中国大使・米国大使と座った。

「我々はかねてから言っていた通りの事を実行下に過ぎない、日本名西ノ島・春島・秋島は全て我東亜連邦に帰属する、不法に占領していたのはむしろ日本国である」

　東亜連邦代表はいい

「そのような、事実はない。国連承認の元我国に正式に編入されている、不当に島に侵攻し住民を拘束しているのはそちらではないか!!」

　日本側の大使もいい

「前にもおっしゃいましたが、我国は引くつもりはありません。例え貴国の自衛隊を叩き潰しても領土は防衛する覚悟だ。艦隊の即時撤退、住民の退去と島の明け渡しそれ以外は認めない」

　言うが

「待て」

　そういったのは中国大使だった、

「随分と好き勝手やってくれるが、貴国は世界から「非承認国」扱いされているのを忘れていないか?我々は正規の国連の総会で日本領に3島を正式に編入を認めそして今現在も日本領として認められている、貴国がやろうとしている事はただの「人殺し」であり「盗人」同然だという事を理解はしてりいるか?、日本自衛隊がやっている事は自分の家の庭に不法に武器をもって入ってきた強盗を始末しているに過ぎないのだよ、全部日本の法に則った「防衛出動」令下の「戦闘だ」」

　中国大使はいい更に

「私がこの席に同席させてもらっているのは旗国に損害賠償を請求す

るためだ、商船を一隻沈没し乗員を虐殺した、この蛮行唯では済まさんぞ」
いい
「最後に、万が一にも変な考えを起こさないうちに釘を刺しておくが日本本土にミサイル攻撃をしようなどと変な気を起こすな、日本が攻撃されれば我中国は躊躇わず報復させてもらう、日本空母艦隊を仮に倒したとしても後ろには我国が広東艦隊が控えている事を忘れるな」
中国大使は言い切り
「なっ!!!!」
東亜連邦側はいい
「脅しのつもりか!!」
周りは言うが
「今、人民解放軍海軍は既に出動待機態勢に入っている。嘘かどうかわロシアの偵察衛星の映像を借りればお分かりになるだろう」
いい
「・・・・・・・・・・・・」
東亜連邦代表は黙り込み
「確かに、中国大使の言うとおり、貴国はやりすぎた。日本自衛隊の戦闘行動を非難する国があるかと聞かれる方が逆に返答に困る。」
米国大使は言い、そんな中
「ですが、大使我国の情報部から報告が上がっておりましてね、先ほど我北方艦隊と貴国の第6護衛隊群の艦載機同士による大規模な空戦があったと報告を受けております、既にこちらは9名パイロットが戦死、貴国の損害は0と伺っております。これから先の交渉の停滞を危惧する所です」
東亜連邦代表は言ったが
「我国の自衛隊の戦闘は全て防衛出動令下に置ける戦闘だ、貴国の戦死した9名のパイロットには最後まで戦った事には敬意を払おう、だが貴国のやった事、要求は全て認められない」
日本側の大使も言い、米国大使も

「今我海軍も必要ならば日本を自衛隊を支援すべく準備を整えている、沖縄在日米軍に伝達し海兵隊二個大隊、目下第7艦隊も出動準備中である事をあえて言おう、これが意味する事をわからぬ程愚かではあるまい？」

米国大使も腕を組みつつ東亜連邦外交部を鋭い眼光で見ながら言った。結局最初の交渉は互いに非難の応酬になりまともな交渉などと言えるようなものではなかった。

在露日本大使館

会議室

最初の会合の終了後に3カ国の大使は会合を開いていた。

「先程はありがとうございます」

日本大使は言い

「「昨日の敵は今日の友」、一戦実際に戦い刃を交えたからこそ今は米国の感情が分かるというものです。主席閣下は推移を見守っていますが貴国の伊部総理閣下の要請があれば直ちに艦隊は出動します」

中国大使は言い

「力強い援軍に感謝します」

日本大使は言い

「それは我国も同じだ」

米国大使も頷き

「苦しい状況に違いはないだろうが、沖縄では既に海兵隊が準備を完了し待機している頃だろう、艦隊も急ピッチで準備を進めている、日米同盟は廃れてはいないと東亜連邦に見せてけてやれば良い中国と我国が目を光らせておけば日本本土に対する攻撃はできまい。」

米国大使も言う。米国では選挙対策にこの有事を利用しようとしている事は日本もわかっていたが味方は多い方が言いと言うのもわかっているため何も言わない。

その頃東亜連邦外交部

「なんという事だ・・・米中の２大国があそこまで日本を自衛隊を支援に動くとは」

言い

「それも、まずい状況ですが代表、先の空戦もですこちらは２０機で攻撃をかけ自衛隊は１６機それでいてこちらは２０機中９機を損耗し、自衛隊はダメージ０これほどまでに日本の航空自衛隊が精鋭だというのも想定外です」

もう一人の官僚も言い

「これで脅しは使えなくなった・・・と言う事は、あとは現場に頑張ってもらうしかないという事か・・・・」

代表も言い

「我々が下手な脅しをかけ中国や米国を本気にさせたらそれこそ大事です。」

言い

「うむ・・・次からは慎重に動かねばな、中国の賠償の件も真剣に考慮しろでないと我々が滅ぶ事になる」

代表は言い

「はい、そのへんは抜かりなく行います。」

官僚も言い

「小さい島国と舐めていたが、ここまでとは・・・・・」

頭を抱えるのだった。

第３９話～パイロットの苦悩～

旗艦「ずいかく」
医務室
「・・・・・・・・・・・・・・・」
「・・・・・・・・・・・・・・・」
二条三佐も辻堂三佐も無言でメディカルチェックを受ける。その折
「二人共、良くやってくれた」
深山航空団司令と風吹一佐が入室してくる
「二条隊長、辻堂隊長、苦しい戦闘だったがよくやってくれた」
風吹一佐は二人にねぎらいの言葉をかける
「ありがとうございます、艦長」
二条三佐は言い
「ありがとうございます。」
辻堂三佐も言った。そして
「艦長、乗員全員の報告では東亜連邦機ＭＩＧ３５のステルス効果はミサイル射程の７０ｷﾛ圏内では無効、我Ｆ―３５ＪＢのレーダーはくっきりと捉えていたと・・・・」
深山一佐は報告し
「我々の有利に繋がる貴重なデータです、「プレデター」「アーノルド」両隊の戦果ですな」
深山一佐は言い二人はメディカルチェックを済ませ、医務室を後にする。

第９４航空団パイロット待機室

「どうした?二人共大丈夫か」
待機室に戻り自分の椅子に座ると
第３飛行小隊「ピジョット」隊隊長柳木三佐と第４飛行小隊「イー

グル隊」隊長の神田良治三佐そして第５飛行小隊「ファルコン隊」隊長の栗原健二三佐の三人に囲まれる
「・・・まるで・・・・生きてる気が・・しないんだ・・・・何というか」
　言葉では上手く言い表せない感情をどう言えばいいものかと二条三佐は懐の内ポケットから妻と子共と映る家族写真を取り出し
「・・・・日本を、領土を、家族を守るためにこの仕事してるのに・・・何でかな」
　言い
「大丈夫か？」
　神田三佐は言い
「神田、今の俺やお前ではわからん。生きている気がしない・・という事が」
　栗原三佐も言い
「生きてる気がしない？」
　柳木三佐も首をかしげるなか
「俺も同じだよ」
　辻堂三佐も椅子に座る
「敵への同情も何も感じない、でもなぜか・・・言葉では言い表せない感じになる。一言で言うならば「生きてる気がしない」が一番しっくり来る。」
　辻堂三佐も懐から家族写真を取り出す。
「・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・」
「・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・」
　二条三佐、辻堂三佐共に家族写真を見つめた後
「柳木、ここ頼むわ格納庫見てくる」
「俺も行く」
　二条三佐と辻堂三佐はパイロット待機室を出ていった。
「あの二人、大丈夫か？」

やはり二人が心配なのか、神田三佐は言い
「生きてる気がしない・・・・か」
栗原三佐も腕を組みつつ言い、そんな中
「いずれにせよ、既に大多数の東亜連邦人が死んだ、この戦い簡単には決着がつかんぜ。俺達も恐らくは出撃し敵機と交戦すればあの二人の気持ちが分かると思う。」
柳木三佐は言い
「そうだな、沈着冷静な二条の事だ直ぐに元に戻るさ」
栗原三佐が言い
「そうだ、飛行隊の中ではトップクラスのパイロットだしな」
神田三佐も言った。

格納庫
「・・・・・・・・・・」
「・・・・・・・・・・」
整備員が忙しく動き回り出撃した機体の整備をしている、そしてそこには先程まで大空で敵ＭＩＧ３５と激戦を繰り広げていたＦ―３５ＪＢが鎮座している、それを見て居ると
「どうしたい、二条隊長に辻堂隊長」
整備長に話しかけられ
「すみません、忙しいところなのに」
二条三佐は言い
「イヤ、殆ど整備は終わった所だ」
整備長は言い
「・・・・・・・・・・・・」
「・・・・・・・・・・・・」
二人の顔を見て
「今「生きてる気がしない」かい？」
尋ねられ
「ど・・どうしてそれを」
辻堂三佐が言い

「私も長い事機体の整備しているが、パイロット達のその顔を見た事は二度しかない」
　整備長は言い
「整備長は先の尖閣有事も・・・・・」
　二条三佐は聞き
「ああ、副整備長として「いぶき」に乗艦していたよ。パイロットではない私が言うのも筋違いなきもするが「生きている感じがしない」という事が「生きている」という証拠じゃないのかな？」
　整備長に言われ
「あ・・・・・」
　二人は思わず言った、そう「初めて」の戦闘と言うことで迷いはしたものの「瞬時の判断」でこうして生きている。つまりそれこそが「生きている」と言う事だと整備長は言いたいのだと直ぐに感じ取り
「ご教授、ありがとうございます」
　二条三佐と辻堂三佐は頭を下げ
「私もな、悲しく感じたものだったよ先の有事は最初に予備機含め15機あったF―35JBが最終的には7機まで減った。勝利こそしたもののその勝利のために殉職していった操縦士達を思えば悔しかった、「死なせる為に、自分達はスパナを握るのではない」と生きて帰ってきて貰うために、生還してもらう為に機体を整備するという事をね」
　整備長の話を聞き
「・・・・・・・・・・・・・・」
　二人は何も言えなかった。自分達の先輩達も勝利への執念で「広東」を仕留めたのだと聞かされていたからだ。
「もう、迷いません整備長・・・・此処に・・・母艦に戻って来る為に」
　二条三佐は言い
「私もです」
　辻堂三佐も言った。
「私達も最善を尽くしてベストな状態で君達が大空で戦えるように機体を整備するだから君達パイロットも最善を尽くして、任務を遂行し

そして母艦に戻ってきて欲しい」
すっ・・・・・
整備長は敬礼し、二条三佐、辻堂三佐も
すっ・・・・・
敬礼し
「ありがとう御座いました」
そう言い二人共格納庫を後にする。
「深山団司令、趣味が悪いですよ・・・・盗み聞きは」
整備長は言い
「バレてましたか」
深山航空団司令は物陰から出て
「部下が迷惑をかけました」
言い
「いや、あの二人は優秀だよ。これからまだまだ伸びるよ」
整備長は言い
「あの有事は後味が悪いものだった、日本人も中国人も大勢死んだ。」
整備長は言い
「ええ、私も元第９２航空団隊員でしたからわかります」
深山一佐も言い
「戦闘は嫌なものです、でも戦わなければ守れない物もある。それが今なのだと私も思っています」
深山航空団司令は言い
「パイロットのケアをしっかり頼みましたよ」
整備長が深山航空団司令に言い
「はい」
深山航空団司令は頷いた。

第４０話～オペレーション・イーグル～

横須賀　海上自衛隊基地

此処にかつての有事同様にタスク・フォースの総司令部が配置された。

「杉本総司令官殿はいられます」

号令に

「敬礼ッ」

室内にいる主要幹部は敬礼し全員が着席する。

「諸君、「ずいかく」第６護衛隊群が目標現場海域に到着、我々の本作戦も秒読み段階に入った」

杉本総司令官は言い

「作戦の最終確認を行う」

着席し

「本作戦は占領されている春間群島の３島をすべて東亜連邦から奪還し住民の開放が目的、春馬群島の速やかな現状回復が目的ではあるものの日本と東亜連邦の全面的な対決は避けねばならない。最高司令官伊部仁三総理からの指示は以上ではあるが統合任務部隊としてはあらゆる状況を想定し春馬群島の３島の武力奪還を前提とし作戦を構築するものである。」

統合任務部隊総司令官、杉本圭吾海将は言い

「ハッ」

周りに座る陸・海・空・の幹部達も返事をした。

「まずは現状の状況確認を」

防衛省情報本部・情報官　沖村慎吾二佐は説明を始める

「東亜連邦側の妨害を全て突破し「ずいかく」第６護衛隊群は目標海域に到着し今後は当海域の航空優勢の確保が期待出来ます。一方で東亜連邦軍は現在３島にそれぞれ拠点を設営し中でもヘリポートと対空ミサイル陣地などは見過ごす事は出来ないと思われます以上の事から一刻を争う緊急対処が必要になると思われます。」

沖村二佐は状況を説明し

「なる程・・・・作戦の第一段階は「ずいかく」第６護衛隊群とそれを支援・バックアップする第２護衛隊群の緊密な連携が重要となるな」
杉本総司令官は言い、それに
「はい、既に我が第２護衛隊群は出航準備を完了し、水陸機動団の人員装備の搬入を行っています。現場海域に到着後、艦隊は上陸部隊輸送艦とその護衛艦に別れつつ残存艦で第６護衛隊群と共に海上優勢の確保にも努めます。」
第２護衛隊群の司令は言い
「続いて作戦の第二段階、作戦第２段階は同時進行としつつも個別の独立作戦となります」
水陸機動団団長は言い
「まず春島攻略作戦ですが、現在島民は一箇所に集合させられているものと思われます、春島の海岸は大半が砂浜であり我々水陸機動団は二個連隊を投入、上陸の際には同時に海自の揚陸艦・支援艦並びに「ずいかく」第９４航空団の支援が必要です」
水陸機動団の団長は言い
「次に断崖絶壁に囲まれた西ノ島攻略ですが、我が特殊作戦群２個中隊と海自特別警備隊２個小隊がパラシュート降下し橋頭堡を築いた後、主力の第一空挺団の降下を待って島民開放作戦を展開致します。」
特殊作戦群群長が言い
「両島攻略は地上戦が展開されると思うが隊員の損耗度はどれくらいか？」
杉本司令官は言い特殊作戦群群長と特別警備隊司令は顔を見合わせ
「作戦の難易度から見積もって特戦群。特警隊合わせて９％と見積もっています。」
特別警備隊司令が言った。
「百里基地の第７航空団は航空隊を待機させ、作戦の第３段階に備えます。作戦の第三段階は本格的な空母対決が予想されます。」
航空団司令が言い、そして
「地上戦は絶対に避けれそうはないな・・・」

「地上戦の損耗度が９％で収まるのか・・・」
海自幹部は言い
「収めねばなるまい、明日のロシアでの東亜連邦との交渉の結果次第では直ちに本作戦が発動される可能性もある、諸君らにも全力を上げて本作戦を万全な元のするようにお願いする。今後予想されるであろう東亜連邦軍の増援に対しても我々は対処せねばならない、だが我々自衛隊が日本を守る事に変わりはない、例え東亜連邦がどう出てこようともだ。」
杉本総司令官は言ったのだった。

第４１話～交渉決裂～

ロシア　モスクワ

「大使、こちらの要求は以前伝えた通りで妥協案もうけつけない、自衛隊の撤退並びに全島の引渡しと島の引渡しを要求する」

東亜連邦側の代表はあくまで強気に言い

「こちらは、一つ報告があります代表。先の空戦以前の戦闘の際に貴国のパイロットを一名保護しております。そちらに早急に引き渡す便宜も図ることも可能ですが？」

日本の大使は言い

「ご配慮には感謝致します。ですが先ほ言ったとおり、こちらから妥協することはない」

東亜連邦代表は言い、更に

「ですが、貴国は更に態度を硬化させているようにも見えるが、我々の従来の要求・主張に変わりはない、春馬群島などと言う群島は存在せず、また3島の帰属は全て我が東亜連邦にある、これを全て認めぬ限り島民の解放はありえません、貴国の島民を拘束しているのは貴国の頑迷な認識と硬化な態度と私は思っています。」

東亜連邦代表は言い、それに

「代表、あなたも一人の息子さんが居ると伺っています、貴方は我々の判断で小笠原諸島海域を血で染めたいのですか？、大使としてではなく一人の親として聞きたい!!」

日本側の大使は言ったがこれに東亜連邦側の代表な回答せず、こうして交渉は決裂した。そしてモスクワからその報告を受けた日本政府は

首相官邸

「第二回の交渉は決裂した・・・既に防衛出動は発令されている、外交交渉で決着が不可能であるのならば私は迷うことなく、春間群島の武力奪還を決定する」

伊部総理は迷う事無く言い

「はッ」
福澤官房長官は言い
「西郷防衛大臣、然るべき措置を頼む」
伊部総理が西郷防衛大臣に言い
「はっ」
西郷防衛大臣は言い、その後防衛省にて関係者幹部が全部揃い幹部会議が行われ、そして統合幕僚長から統合任務部隊〔ＪＴＦ〕に命令が伝達された
「総理、横須賀ＪＴＦ統合任務部隊司令官、杉本海将です」
西郷防衛大臣はいい
「ご苦労、伊部だ」
伊部総理はモニターをみながら言い
「統合任務部隊司令官杉本です」
杉本海将も言い
「本作戦に向け、陸海空一体となって対処します。」
言い
「尚、本作戦を「オペレーション・イーグル」と命名します」
杉本海将は言い
「イーグル・・・」
伊部総理は言い
「鷲・・・・か」
天羽副総理も言い
「二度目の統合任務部隊の運用は大変だろうが、鷲の名のとおり電光石火の如く作戦成果を期待している。」
伊部総理入った。それに対し
「はっ、了解しました」
杉本海将も言いモニターは切れた。
「二度目の戦闘か・・・・。」
伊部は言い
「東亜連邦退治は自衛隊に頑張ってもらうよりありません」
周りの閣僚が言うのだった。

第４２話～動き出す自衛隊～

佐伯家

夜が明けるが、依然として緊張状態にある事に変わりなく、家族皆がテレビの前に集まっていた。

「これは・・・・いよいよか・・・」

父は言い

「港にこんなに自衛隊の艦艇が集結してる光景見たことない・・・」

母も言い

「政府はいよいよ腹を括ったな」

祖父もお茶を飲みつつ言った。テレビでは

「横須賀港より中継です、今現在埠頭に「くにさき」他大型輸送艦等などが接眼し自衛隊の車両・物資・人員の積み込み・乗艦作業が急ピッチで行われております」

言い

「横須賀市民が不安な気持ちで見守る中、自体は切迫していてきているという事が肌でわかります」

リポーターは言い、菖蒲がチャンネルを変えると

「こちらは航空自衛隊百里基地です、駐機場には航空自衛隊の大型輸送機が待機しており、陸・海・空・各部隊が集結しています、「防衛出動」は既に発令されており対東亜連邦との戦闘が本格化するのではと、基地周辺に緊張と不安が広まっています」

テレビでも深刻さがよくわかる。

「姉さん、どうしよう・・・これ本当に戦争になるんじゃ・・・」

日向が言い

「優希が前に言っていたわ、自衛官はその時の為に備え、鍛えると国民を私たちを守るために、」

私は言い

「しかし、先の有事以上の規模だぞ・・・駐機場には輸送機と空自の戦闘機のＦ―３５ＪＡが待機しているのも見える。そもそも本格的な戦闘になれば本土に攻撃が窘可能性も否定はできない」

父が言うなか
「今は前線で戦う自衛隊員を信じるしかないの」
祖父は言い
「情報があまり上がらないけども、今の所自衛隊が優勢だよね、東亜連邦の潜水艦を2隻撃沈したわけだし」
菖蒲が言い
「うん、でも・・・それだけ大勢の人が死んだと言う事実もまた変わらないわ」
私も言う。
「うん、そうだね」
そう言っていると、
「只今埠頭係留中の海上自衛隊大型輸送船に動きがありました、2隻は静かに舫いを解き静かに出航しました、これは作戦行動のために現場海域に向かう為の出港でしょうか?、現在、沖合には第2護衛隊群の艦艇が展開しておりこの2艦の動きが合流を目指した動きなのかはたまた独自の動きなのかは不透明です。」
リポーターが言い、また菖蒲がチャンネルを変えると
「輸送機に自衛隊員が乗り込んでいきます。これは作戦のための出撃準備でしょうか?装備や機材等の積み込みも確認出来ます」
もう一人のリポーターが言っている、輸送機には隊員らが搭乗していき該後ろから装備や機材等が積み込まれているようだった。港では艦隊が出航していく。ついにくるべき時がいよいよと迫りつつある私もひしひしと感じていた。
「大丈夫だよね・・・」
菖蒲が言い
「うん・・・・大丈夫だよ・・・絶対」
私は言ったもののそれが確実ではないというものはわかっていた。自衛官＝軍人、毎度毎度ラッキーが続く事もない、船が沈めばその分だけ人は死ぬ、弾に当たれば当たり所が悪ければそれでも死ぬ不安な所を上げればキリがない
「新婚旅行にも行ってないんだもの・・・・」

私は呟いた。優希が空母艦隊の一翼を担う艦の艦長だという事はしっている仕事が忙しく新婚旅行にいく間もなく今度は私の「妊娠」が発覚したのだから目の回るような忙しさだった、それに今度はこの有事ときた、窓から外を見て黄昏て居ると

「姉さん・・・・・・・・・」

日向が呟いたのだった。

第４３話～始動！オペレーション・イーグル～

同時刻　第６護衛隊群　旗艦「ずいかく」
「風吹艦長より、第９４航空団第３飛行隊「ピジョット隊」第４飛行隊「イーグル隊」の両隊は直ちにブリーフィングルームにに集合せよ」
艦内放送が掛かり搭乗員達は待機室に集合する
「おっ、今度は俺達の番か、行くぞ神田」
柳木三佐は神田三佐に言い
「おう、待ってたぜ」
神田三佐も言い
「二人共、必ず此処に戻ってこいイイな」
さっきとはうって変わってキリッとした表情になった二条三佐に
「優也の言う通りだ、１機も失うな二人共」
辻堂三佐も言い、二人の変わりように
「どうした、二人共さっきまでは・・・・」
神田三佐が言ったが
「迷わず撃て」・・・それが生きるという事だ」
二条三佐は言い辻堂三佐も頷く。それを見て柳木三佐も神田三佐も
「なる程な・・・・了解だ」
二人共頷き第３飛行隊「ピジョット隊」第４飛行隊「イーグル隊」はブリーフィングルームに行き残った空戦で初陣を飾った「プレデター隊」隊長の二条三佐「アーノルド隊」隊長の辻堂三佐そして「ファルコン隊」隊長の栗原三佐の三人になるが
「二人共、吹っ切れたのか？」
聞くと
「いや現実を受け入れただけだ、「理想で空は飛べない」とね。「撃てなければ死ぬ」それが「生きる」と言う事だよ、そうただそれだけだよ。」
二条三佐は言い
「そうだな、「生きている実感がなしない」という事自体が俺達パイロットにとってそれが「生きている」と言う事だよ、栗原も戦えば解

る。」
辻堂三佐も言った。そして
「ここ頼むな、栗原」
二条三佐は栗原三佐に言い搭乗員待機室を後にした。
「そうか・・・・二人共、なんか一皮むけた風にみえる」
栗原三佐は言うのだった。一方・・・・・・

搭乗員待機室
「横須賀ＪＴＦ統合任務部隊司令部より我が「ずいかく」に命令が下った」
風吹艦長は言い
「春間群島上空の航空優勢を確保せよとの命令だ」
風吹艦長は言い
「当然、敵空母「グルシャ」から攻撃を受けるだろう今度は２０機定度では済むまい、３０機から４０機は覚悟せねばなるまい、我々には厳しい戦闘になるだろうだがこれだけは心してくれ「此処で我々が負けたら「日本が負ける」」
風吹艦長は続けて
「その我々が航空優勢を確保せぬ限り、３島の奪還は不可能だ。全作戦の成否は「ずいかく」そして諸君ら「第９４航空団」にかかっている繰り返しになるが此処で我々が負ければ日本が負ける、心して欲しい」
風吹艦長はパイロット全員を見渡し言った。それに両隊パイロット達は
「「了」」
言うのだった。

艦載機格納庫
「ピジョット」「イーグル」両飛行隊は発艦準備急げ。」
艦内放送がなり、パイロットスーツを着た柳木三佐と神田三佐が来る中

「柳木、神田出番だな」
ふたりが振り返ると、二条三佐がそこにはいた
「見送りか？」
柳木三佐は言い
「バカ抜かせ」
二条三佐は言い
「俺の飛行隊も一緒に飛んでやりたかったが、それだとローテションが崩れるからな」
二条三佐は言い
「気持ちはありがたいが、「手柄の機会は平等」が航空団のモットーだろ？」
神田三佐も言い
「大変な任務になるが、遺書はちゃんと残したか？」
二条三佐は二人に訪ね
「ああ、ちゃんと書いたよでもななんかしょもない文面でな、帰艦してまた書き直すわ」
柳木三佐が言い
「俺も似たようなもんだな、本当に在り来りな文面でな帰艦して書き直すよ」
神田三佐も言い
「二人共そうしてくれ、俺も「しょもない」遺書なんか読みたくはない」
二条三佐も頷きつつ言い
「じゃぁ、行ってくる」
柳木三佐は言い
「ほんじゃまた」
神田三佐も言いつつ自機に乗り込みエレベーターで飛行甲板に上げられて行った。飛行甲板に上げられて行くＦ―３５ＪＢをみながら
「必ず戻って来いよ・・・二人共」
二条三佐は言うのだった。

飛行甲板
「ピジョット1より航空管制へ、発艦準備完了」
航空管制へと報告し
「ピジョット1へこちら航空管制、いいか吉報しか待たんぞイイな」
航空団司令の深山一佐は言い
「オールクリア、発艦ッ」
けたたましいジェット・エンジン音を響かせながら発艦していった。こうして
２０ＸＸ年某月某日日本は正式に二度目となる武力奪還作戦「オペレーション・イーグル」を発動させたのだった。

第４４話～先制攻撃～

上空

「〔梟の目を・・・・潰す、それが貴隊の任務だ無線を封鎖し群がる鴉をすり抜け密かに接近しなければ不可能な難しい任務だが、必ず成功させて欲しい〕」

上空に上がった「ピジョット隊」隊長機ピジョット1は先のブリーフィングで風吹艦長が言った事を脳裏に浮かべていた。そして、機のレーダーに

「鴉・・・・!!」

「〔ピジョット隊、イーグル隊へ、春島上空東亜連邦機ＭＩＧ３５を探知〕」

僚機にハンドサインで状況を伝え

「こいつは空母グルシャから上がったＭＩＧ３５が２５機、現在春島上空を９０００メートルで周回軌道をパトロール、ＭＩＧ３５はもうすぐ我々の機影を捉える、だがそれは自機のレーダー能力ではない東亜連邦海軍早期警戒管制機Ａ―５０の目だ。

柳木三佐は呟いた。その頃春島上空

東亜連邦艦載機ＭＩＧ３５

「来た、空母「ずいかく」から発艦したＦ３５?!」

パイロットは言い

「このステルス機１００㌔以上離れると小鳥としか思えない、どうやら我々の南をすり抜けた?!春島上空は回避・・・・か、我々との戦闘でないとしたら狙いは一体なんだ?」

東亜連邦の隊長機は言い

「追えッ!」

僚機に指示を出しＦ―３５ＪＢの追跡を開始するのだった。

第６護衛隊群　旗艦「ずいかく」

ＣＩＣ

「ピジョット隊」「イーグル隊」予定コースに侵入」

「現在、春島南西２００㌔」
「パトロール中の東亜連邦機２５機が補足、追撃態勢に入った」
　周りの報告を聞きつつ風吹一佐は
「〔柳木三佐、神田三佐、鴉は相手にするな・・貴官らの獲物はその先の高空だ〕」
　風吹一佐はモニター見つつ思っていた。

　上空
「〔コンタクト、居たぞ梟だ〕」
　レーダーを見ていた柳木三佐は呟き
「〔秋島北西５０㌔高度１００００メートル現在半時計周りで周回を軌道中〕」
「〔ピジョット１より全機へ、高度１００００へ達せ〕」
　指示を出し
「〔了〕」
　全機共に高空の１００００メートルの獲物の所へと向かっていった。

　回想
　発艦前、ブリーフィング
「梟、いえＡ５０を狙い撃つ?!、我々に先制攻撃をやれと」
　柳木三佐は言い
「そうだ」
　風吹艦長は頷き
「春間群島上空は空母「グルシャ」の艦載機ＭＩＧ３５が警戒している、そのＭＩＧ３５を背後から操っているのが東亜連邦海軍早期警戒管制機Ａ５０だ」
　ボードを叩き風吹艦長はパイロット達に説明する。
「Ａ５０のレーダー探知能力は３００㌔これを潰さぬ限りこちらの作戦圏内は全て丸裸にさレ身動きが取れない状況に置かれる。」

風吹艦長が言いそれに
「ですが、そのＡ５０の乗員はデーターでは１６人ですよ?、そいつを先制攻撃でやれと?」
柳木三佐は言い
「各機共にウェポンベイには対空ミサイルを装備せよ」
風吹艦長は言ったのだった。

回想終わり

上空
「目標との距離まで９０キロ、高度一万」
「〔我々は戦争回避を掲げ、その為に戦い此処まで来たと思っています〕」
「イーグル隊」隊長神田三佐も思いながらステックを握っていた。

東亜蓮歩海軍早期警戒管制機Ａ―５０
「５時の方向Ｆ―３５、８機接近ッ」
レーダー要員は言い
ビーーーーーーーー
ミサイル警報音がなり
「ロックオンされた!!!!」

回想
「専守防衛を放棄するのではないのですね」
神田三佐は言い、それに
「日本は既に武力奪還を決断したのだ」
風吹艦長は言い
「わかりました、横須賀の命令であるのならば」
柳木三佐が言うと
「これは私の作戦立案だ」

風吹艦長は言い
「はっ?!」
柳木三佐は訝しみ
「つまりは、私の命令だ」
きっぱりと風吹艦長は言ったのだった。

回想終わり

上空
ピジョット1
ミサイル発射ボタンに手が言っているにも関わらず、ボタンを押すのをためらう自分に驚く柳木三佐だったがその時脳裏に
「迷わず撃て」、それが生きるという事だ」
「1機も失うな」
二条三佐や辻堂三佐の言葉が脳裏に蘇り
「此処で我々が負ければ「日本が負ける」のだ」
風吹艦長の言葉が蘇り
「〔迷わず・・・・撃つッ〕」
柳木三佐はミサイル発射ボタンを押し、ウェポンベイから空対空ミサイルが目標A―50に向けて発射されて行く、僚機も含め計2発

東亜連邦海軍　早期警戒管制機　A―50
「ミサイル2基接近ッ」
「距離20キロ、チャフを散開させろ」
「ダメだ、近すぎるッ」
乗員達にミサイルアラートの音はまるで自分達への死への警報音に聞こえただろう
2基のミサイルは綺麗に上空周回しレーダー能力で広範囲を捉えていた敵早期警戒機のA―50の撃墜に成功し敵の目を潰すのに成功するのだった。

第４５話～空戦～

東亜連邦パトロール隊
「で、データリンクが・・・消えた・・」
「ブラックアウトした・・・」
「Ａ―５０が、撃墜された」

動揺が走っていた。その頃

第９４航空団第３飛行小隊「ピジョット隊」隊長機　ピジョット１
「消えた・・・・」
自機のレーダー上から消えたＡ―５０を見ながら柳木三佐は言い
「〔東亜連邦人搭乗員１６人が・・・・・〕」
言い知れぬ負の感情にとらわれ始めていたが
「ピジョット１からピジョット７・８へ、目標の撃墜を確認護衛機の動きに注意しろ」
柳木三佐は指示を出し
「了解」
僚機からも返答が来る

「イーグル隊」隊長機　イーグル１
「護衛は二機のＭＩＧ３５、現在２時と１０時の方向距離６５キロの高度９８００メートル・・・」
ここで神田三佐は異変に気付く。
「〔ん？・・護衛のＭＩＧ３５が離脱しない・・データリンクが使えない状況で無理に戦う必要はない、そちらの護衛任務は解除されたのだ、早く母艦に帰投しろ〕」
神田三佐が思う中、敵機は離脱せずに向かってくる姿勢を崩さない。
「〔やるのか〕」
向こうの戦闘意志アリと判断し神田三佐は

「イーグル1より全機へ、護衛のＭＩＧ３５二機がむかってくるぞ、左前方Ａが隊長機だろうこいつは私が引き受ける、右後方Ｂを頼む。ピジョット隊は向かってくるパトロールを抑え込んでくれ」
　神田三佐は僚機に言い
「イーグル２了解」
「イーグル３了解」
「ピジョット1了解した、ケツは任せておいてくれ」
　柳木三佐は言い僚機を引き連れ、向かってくるＭＩＧ３５を抑え込むべく降下していった。降下していくピジョット隊を見ながら
「〔彼らは今、主機を撃墜されいきり立っている、やはり・・・やるしかないのか〕
　神田三佐は感じていた。その頃

第６護衛隊群　旗艦「ずいかく」
ＣＩＣ
「ピジョット隊、Ａ―５０を撃墜確認、「ピジョット」「イーグル」両隊に損害はありません」
　モニターを見ている乗員は言い回りも
「これで小笠原諸島作戦海域をカバーしている東亜連邦のレーダー能力はダウンした」
「これで、オペレーション「イーグル」の第一段階をパスした」
　回りも言うが
「ですが、風吹艦長、東亜連邦機はデータリンクが破壊されても護衛・パトロール共に離脱せず、追撃姿勢を崩しません」
　乗員は風吹一佐に言い
「何があっても航空優勢は手放さない、死守の構えだな」
　白谷群司令もモニターを見ながら言い
「それは我々も同じです。向こうは今５０キロ以上の視界を無くしています。十分な距離をとれば優位に戦う事ができるでしょう」
　風吹一佐は白谷群司令に言った。

上空
第９４航空団　第４飛行小隊「イーグル隊」隊長機イーグル１
「距離６０キロ、向こうはまだ此方が見えていない闇の中手探りで接近しているか」
神田三佐がレーダーを注視していた時だった
「!!」
レーダー上に表示さる敵機を示す光点が重なったのだ
「イーグル１より２・３へＡがＢに重なった。向こうはトリッキーな動きをしてるぞ警戒しろ」
僚機に指示を出し
「了解」
「距離５５キロこれ以上は危険領域です、こちらはＢをやります」
僚機は言い
「目標Ｂロックオン、ミサイル発射ッ」
敵Ｂに向けてウェポンベイよりミサイルが発射され敵機に向かう。
「敵機Ｂ回避機動・・・」
神田三佐も敵の動きを注視する中
「敵機Ｂにミサイル命中！」
しかし次の瞬間だった、
「!!、Ａ探知ッ、Ｂの背後に隠れて接近距離４０キロッ」
そして
「ロックオンされたっ」
神田三佐は自機がロックオンされた事を言い
「欺瞞弾で回避ッ」
フレアを焚きミサイルを回避する。その中
「〈なんて無茶苦茶な戦法だ、僚機が被弾覚悟で囮になりレーダを掻いくぐる、これが東亜連邦海軍がＦ―３５との戦闘で編み出した戦い方だと言いたいのか〉」
神田三佐は思いつつも直ぐに切り替え
「敵Ａは距離を確保するため、逆方向へと離脱すると読む。しかし本

機は高速を維持しながら上昇し旋回半径を最小にとりターンする敵Ａの背後に降下する。ハイスピードヨーヨーだ」
神田三佐は言いつつもその通りに行動し
「見えた・・・・」
敵機を確認し
「奴も９Ｇの圧力に耐えている」
そして
「ロックオン、ミサイル発射ッ」
敵機に向けて２発のミサイルがウェポンベイから発射される。
「〜一瞬、敵機のコックピットの中の顔が歪んだ気がした・・・・〜」
神田三佐が思うよりも早くミサイルは着弾し敵機を木っ端みじんにするのだった。

第６護衛隊群　旗艦「ずいかく」第９４航空団パイロット待機室

「「ピジョット」・「イーグル」両隊がＡ―５０・敵機の護衛とパトロールを叩いたとしかも両隊に損害なしの無傷だとよ」
待機室に「プレデター」「アーノルド」「ファルコン」の３隊の隊員とその指揮官がいる中各隊の隊員らは言い
「やりますね、柳木三佐に神田三佐も」
一人が言い
「これで小笠原諸島上空の航空優勢はこっちのもんだな」
一人は言い、もう一人は
「残った東亜連邦機も空母「グルシャ」に引返していったとよ」
興奮気味に言い
「じゃぁ大勝利じゃねぇか」
もう一人も言う、そんな中
「これで全てが終わればだがな」
「プレデター隊」隊長の二条三佐がすかさず釘をさす。これに
「はっ、」

隊員らも返事をする。

旗艦　ずいかく　ＣＩＣ

「「ピジョット隊」も「イーグル隊」もよくやってくれた・・・だが航空優勢は維持しなければその意味はない。」

白谷群司令は言い

「わが艦隊も春島１４０ｷﾛまで接近している。明日のＨアワーの明朝までは絶対確保だ」

モニターを確認しつつ群司令は言った。そこに

「白谷群司令、早期警戒機「スカイアイ」からの報告です。２０００現在秋島北東１００ｷﾛ洋上東亞連邦空母「グルシャ」から複数の戦闘機の発艦を探知総数不明以上です」

通信担当が報告し

「やはり、終わらんか・・・・・」

白谷群司令は言い

「一体何機上げる気だ」

深山航空団司令もモニターを見つつ言ったのだった。

第４６話～プレッシャー～

第６護衛隊群　旗艦「ずいかく」
ＣＩＣ
「群司令、早期警戒機「スカイアイ」より追加情報です、敵空母より発艦したＭＩＧ３５の総数２０機が発艦しました。」
報告を受け
「２０機！」
回りは言い
「やはり・・・・終わらぬな」
白谷群司令は言い
「数に物を言わせる気か・・・・」
深山航空団司令も唸る。
「深山団司令、「ファルコン隊」「プレデター隊」の発艦準備を」
風吹艦長は深山航空団司令に言い
「了解です」
深山一佐もうなずき
「向こうがどう出てこようが、「ピジョット隊」「イーグル隊」は降ろさなければならない・・・長い夜になるな・・・・」
風吹艦長は言い、艦内放送で
「深山航空団司令より第９４航空団「ファルコン隊」「プレデター隊」発艦準備急げッ」
艦内放送が掛り

第９４航空団パイロット待機室
「さて、出陣か」
栗原三佐が立ち
「じゃぁ、行ってくる」
先ほどまでの狼狽えが嘘のように冷静に立ち上がり
「頼りにしてるぞ、二条」
栗原三佐は言い

「そっちもな」
二人はヘルメットを持ち待機室から出て行った、その頃上空では
「ずいかく航空管制よりピジョット1、敵空母「グルシャ」より発艦したＭＩＧ３５が２０機春馬上空に向かってる、貴隊ら１６機は帰還までの２２００時まで航空優勢を確保せよ」
無線機により航空隊に指示が飛び
「{２０機だと・・・・・}」
柳木三佐は内心思い
「{対空ミサイルＡＭＲＡＡＭ弾庫に後４発・・・僚機もほぼ同じだろう。ピジョット・イーグル両隊合わせて６４発。敵は２０機・・・袋叩きにする事ができる。}」
「{後４０分で・・}」
「{こちらの射程７０キロに入る}」
僚機も思いつつも
「航空優勢は渡さんぞ、此処は日本の空だ、来るなら来いッ」
柳木三佐は言い眼下にある春島上空を空自の戦闘機が飛ぶ。その頃、春島上陸を目指して水陸機動団を乗せ出航した第２護衛隊群は上陸ポイントを目指し前進していた

海上自衛隊　輸送艦「しもきた」
「上陸ポイント到達まであと6時間か・・・」
水陸機動団隊員は時計を見ながら言い回りを見渡し
「{さすがに皆無口になるな}」
「しかし、見れば見るほど平坦だな・・・春島は・・・此処でドンパチになるのかと思うとゾッとする・・・」
ブリーフィングで説明を聞く隊員は言い
「{問題は上陸地付近の漁港にある地対艦ミサイルだ。これだけは上陸前に絶対に叩いて貰わないと・・・そして島上空の航空優勢が確保されていると言う事が絶対の条件だが、大丈夫なのだろうな・・・第６艦隊}」

同時刻　航空自衛隊　百里基地
陸上自衛隊「特殊作戦群」
海上自衛隊「特別警備隊」
「離陸まであと少しか」
特殊作戦群隊員は言い
「離陸後に空路を偽装し西ノ島到達即刻降下だ、忙しいな」
特別警備隊隊員が補足し
「情報秘匿上窮屈だろうが少し眠っておけよ」
特殊作戦群第一戦闘中隊　中隊長の井上三佐がいい、それに
「まだ数時間はあるゆっくり眠る事はできるぞ」
特別警備隊指揮官の一条院三佐も言うのだった。

第６護衛隊群　旗艦「ずいかく」
ＣＩＣ
「「グルシャ」からの２０機接近中、「ピジョット」「イーグル」両隊との距離あと一分で９０キロに入ります。」
レーダー要員は言い
「やはり真っ直ぐ来るか。失ったＡ―５０そして護衛機そしてパトロール隊、機もパイロットも甚大な損耗だ。その仇を取らずにはいられぬ思いか。」
白谷群司令は言い
「私が「グルシャ」の艦長ならば艦隊も飛行隊も感情的になっている今は戦いません、レーダー能力がダウンした現状ではいくら数を増やしても不利な状況下にある事は目に見えています。距離を置きこちらを包囲しいつでも突入できる状況下で我々艦隊に「プレッシャー」をかけ続けるそうなれば我々は一瞬でも隙を見せられない厳しい状況下で、長時間耐えねばなりません、それが現状で最も有効な手段でしょう。」
風吹艦長は白谷群司令に言い
「そのうえで準備中の二機目の早期警戒機の到着を待ちます」
風吹艦長が言った時モニター上の敵機の動きが変化する。

「!!」
それを見て
「どうやら厄介な敵のようだな・・・空母「グルシャ」は」
白谷群司令は言い
「２０機は５機編隊の４分隊に分散し針路変更「ピジョット」「イーグル」両隊との距離を取ります」
レーダー要員は言った。その時
「イーグル１より「ずいかく」ＣＩＣ航空管制へ向こうはコースを変えました、ですが全機追撃可能ですやるなら有利な状況の今です指示を」
神田三佐の声がＣＩＣに響くが
「落ち着け、神田三佐すでに「ファルコン隊」「プレデター隊」の両隊が発艦準備にかかっている貴隊はパトロール任務を交代帰艦せよ」
インカムで風吹艦長は指示を出しその数分後に両隊は帰還してきた。

第９４航空団ブリーフィング室
「貴官らのらの働きＡ―５０の撃墜で航空優勢を我々は手にする事が出来た、作戦は始まったばかりこれからだ次の任務に備え体を休めろ」
深山航空団司令は言ったが
「深山航空団司令、疲れてなどいません直ちに上げてください」
神田三佐は言ったが
「休めッ、これは命令だ」
深山航空団は言い神田三佐は引き下がるのだった。
「・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・」
ロッカールームで自身が家族あてに書いた遺書を見る神田三佐だが脳裏に浮かぶは撃墜したＡ―５０の事やその護衛機の事だった。
「・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・」
椅子に座り込んでいるとドアが開き
「大丈夫か？」

顔を覗かせたのはプレデター隊隊長の二条三佐だった。
「一瞬の判断で・・・俺は今こうして生きてる、でも生きてる感じが全くない」
神田三佐が言い
「・・・・・・・・・・・・・・」
無言で話を聞いていた二条三佐は
「それが・・・そう思うと言う事が生きてる証拠だ」
言い部屋を後にしようとするが
「東亜連邦人パイロットが大勢死んだ・・・この戦闘・・・どっちかが倒れるまでおわれないぞ・・・」
神田三佐は言うのだった。

第４７話～障害～

第６護衛隊群　旗艦「ずいかく」
艦橋
「〔東亜連邦北方艦隊空母「グルシャ」は２０機による反撃の構えを崩さず、距離を保ちつつ第６護衛隊群にプレッシャーをかけ続けている。その状況下の中で我が「ずいかく」は第一目標である航空優勢を確保せねばならない〕」
艦橋でパトロール任務のため発艦する「ファルコン隊」「プレデター隊」を見つつ副長兼航海長の矢口二佐は思い
「〔明朝に決行する上陸作戦支援に向けて、春島沖に向かっているが・・・春島沖合に大きな障害がある。情報では東亜連邦海軍の洋上艦だ、北方艦隊巡洋艦二隻が依然としてパトロールを続行している〕」
矢口二佐が思っていた時
「ＣＩＣより艦橋へ副長、白谷群司令がお呼びです至急ＣＩＣへお越しください」
艦内放送がなり
「〔きたか・・・〕」
矢口二佐は思い
「船務長、此処を頼む」
矢口二佐は言い艦橋を後にしＣＩＣへと向かった。
「〔向こうは今、Ａ―５０を失いレーダー能力がダウンした状態だ・・しかし哨戒活動をやめていない、依然として戦闘意欲を保持したままだこれにどう対応する？射程１２０キロのＹＪ８３擬きを、そしてどう黙らせる・・・考えても答えは一つしか出ないか〕」
矢口二佐は「一つの結論」に達しつつＣＩＣに入った。

「ずいかく」　ＣＩＣ
「東亜連邦海軍巡洋艦二隻は現在春島北４０キロの沖合にあり、２０ノットの速力で東へ向かっている。航空優勢が危うくなったら離脱するとこちらは考えていたが、意地でも海上に張り付かせておくらし

い」
　白谷群司令はモニターを見つつ言いそして敵巡洋艦のデータが映る。
「敵巡洋艦の「ルサ」そして「スラーグ」だ」
　モニターを指しつつ白谷司令は言い
「両艦共にＹＪ８３対艦ミサイル擬きを装備してて、こいつがいくら擬きでも目障りだ、艦隊のＦ―３５でも叩く事はできるが、それだと隙を生じさせてしまうそのうえ第２護衛隊群の上陸作戦開始前までにこいつを排除しなければならん」
　白谷群司令は言いそして
「矢口二佐、どうする？」
　白谷群司令は尋ねこれを間近で見ていた乗員は
「〈どう対処するも何も「防衛出動」が発令されているんですよ矢口副長、敵は東亜連邦は我が領海を侵犯している、撃沈してでも強制的に排除するしかないんです何を迷う事が・・・・〉」
　乗員は思いつつ矢口二佐を見て、矢口二佐も口を開く。
「我々が取れる作戦としてはＤＤＧ「はぐろ」を先行させ同艦の「１７式艦対艦誘導弾」で撃沈すべきです」
　矢口二佐は言い
「・・・・乗員６００人と共に沈めるか・・・」
　白谷司令は言い
「やむおえないうかと」
　矢口二佐は言い
「水陸機動団の春島上陸作戦にとって最大の障害ともいえるのが同島及び哨戒艦の対艦ミサイルです。こいつを無力化しない限り作戦の成功は望めません」
　矢口二佐が白谷群司令に説明するが
「だが、矢口二佐我々の目的はその対艦ミサイルを「無力化」することであって「撃沈」ではなかろう」
　白谷群司令は言い
「無論殺戮が目的ではありませんが、作戦の遂行にあたり上陸隊員の

リスクを考えれば撃沈するよりほかないと考えます」
　矢口二佐が言った時だった、今まで無言だった風吹一佐が
「副長、「はぐろ」の主砲による艦砲射撃ではどうか？」
　風吹一佐は言い
「艦砲射撃ですと?!」
　周りも驚く中
「お言葉ですが艦長、１７式艦対艦誘導弾は射程が１２０㌔ですが主砲は射程３０㌔です砲撃するには向こうのレーダー探知圏内に侵入しなければならない。それでは「はぐろ」が只の的になってしまいます、しかも相手は2艦、確かに１７式艦対艦誘導弾では敵艦を撃沈してしまう可能性が高い、艦砲射撃ならば確かにピンポイントで発射筒を破壊できるかもしれません」
　矢口二佐は風吹一佐に言い
「それに、向こうの火力は対艦ミサイルだけではありません、１００㎜連装砲一門・対空ミサイル発射機一基・三連装短魚雷発射管二基、彼らを航行可能状態にしておけば上陸部隊にその火力が降り注ぐのです」
　矢口二佐は言いそれに風吹一佐はシンプルに
「ならば、航行不能状態にすればどうか？」
　言いその一言に矢口二佐も周りの乗員もあっけにとられるなか
「どうです？艦砲射撃でそれができますか？」
　風吹一佐は言いさらに
「最新鋭イージス艦「はぐろ」はあらゆるスペックで敵巡洋艦「ルサ」「スラーグ」を上回る、装備の優劣で勝つだけでは足りないそれを運用する技量で敵を圧倒せねば「敵」への明確な抑止力にはなりえない」
　風吹一佐は言い切り、その後、イージス護衛艦「はぐろ」による艦砲射撃で敵艦の装備のみを射撃するという先の有事以来の神憑り的な事をしなければならなくなったのだった。

第４８話～この一撃に込めて～

艦隊前衛　イージス護衛艦ＤＤＧ１８０「はぐろ」
ＣＩＣ
「艦砲射撃?!」
「ずいかく」からの指示に思わず俺は言い、無線からは風吹一佐の声が聞こえる
「ああ、「あしがら」砲雷長時代に培ったその技術と腕を是非に見せて頂きたい」
風吹一佐はおだてるように言ったが
「おだてには乗らんが命令ならやるしかないだろう、了解」
俺は無線機を置き
「艦長?」
砲雷長の小林三佐が言い
「レーダー上に表示されてる東亜連邦海軍の巡洋艦二隻を「艦砲射撃」で無力化しろとさ」
椅子に座り
「艦砲射撃?!」
小林三佐は言い
「そんな無茶な、確かに向こうの主砲とこっちの主砲では射程はこちらが有利ですが、敵艦のレーダー圏内に入らねばなりません、向こうは二隻こっちは一隻ですよ」
小林三佐は言うが
「泣き言言うな、この時の為の訓練だろうが」
俺は言ったが
「リスクが高すぎます、１７式を使えれば数発で片が付きます「ずいかく」に再考を求めるべきです。」
小林三佐も言い
「それだけではダメなんだろう。それよりも撃沈してしまえば艦隊全艦で救助活動をしなければならないだろう。艦隊にそんな余裕はないはずだ。「艦砲射撃」なら当たり所さえミスらなければ「航行不能状

態」にしてしまえる、それに風吹艦長になにか考えがあるんだろう、あいつの事だ。」
俺は言い
「それにやれと言われたらやるしかない・・・艦隊の前に出るぞ、全速前進」
命令を出し、イージス護衛艦「はぐろ」は輪陣形を抜けだしたのだった。

第6護衛隊群　旗艦「ずいかく」

艦橋
「副長、「はぐろ」が増速前に出ます」
部下が言い、矢口二佐は双眼鏡を除き
「一ノ瀬・・・・」
離れ行く「はぐろ」を見て矢口二佐はつぶやくのだった。それと同時に先ほどの会話を思い出すのだった
「風吹一佐、」
艦長である彼を呼び止め
「群司令に艦砲射撃を進言されたのは、攻撃効果の観点の意味もあるでしょうですがこれ以上の東亜連邦人乗員のの死傷者を出さぬようにその考えも?」
聞き
「仮に撃沈した場合、我々艦隊は救助活動に動く事になる、特に矢口お前は発言上の責任がある分強硬に主張する、当海域の「航空優勢」「海上優勢」の確保が我々の急務だ、艦隊に救助の余裕はない」
風吹一佐は言いさらに
「実のところさして心配はしていない。「優希」なら必ず成功させる事が出来ると踏んでいる。」
言い
「根拠は?」
聞き返すと

「イージス艦「あしがら」の砲雷長時代のデータを前に見た事があった。どの艦の砲雷長よりも抜群に優れていたからだ。指揮官になった今も艦の乗員らに最適なタイミングで指示を出すだろう。だから「はぐろ」を指名した」
「なるほどな」

矢口二佐が先ほどの会話を思い出している頃

春島北東　４０㌔洋上　イージス護衛艦ＤＤＧ１８０「はぐろ」

ＣＩＣ
「本艦はこれより春島沖合を目指します」
乗員が言い
「全く、無茶難題を押し付けやがる。」
呟きつつも
「まぁ・・・やれと言われればやるしかないわな」
言い乗員と共にレーダーを見る、そして
「本艦レーダーコンタクトッ、東亜連邦海軍巡洋艦「ルサ」「スラーグ」も二隻を探知、目標艦二隻春島北北東洋上３０㌔。」
レーダー要員が言いもう一人が
「速度２０ノット・針路０―９―０・距離４０㌔、本艦主砲射程距離到達まで後３０分」
報告を聞きつ
「〔本艦の主砲１２７㎜砲の射程は３０㌔、向こうの主砲射程に１０㌔勝るこいつを生かす〕」
思いつつ
「砲術長、両艦共に第一目標は露天甲板の対艦ミサイル発射筒だ、１㎜の誤差なく着弾させろ」
俺は言い、砲術長も
「了」
返答し

「敵巡洋艦との距離、４０㌔ッ」

先の尖閣有事以降２度目となる近代艦同士の海戦が始まろうとしていた・・・

第４９話～５インチの意思～

第６護衛隊群　艦隊防空イージス護衛艦ＤＤＧ１８０「はぐろ」
ＣＩＣ
「レーダーコンタクト、東亜連邦海軍巡洋艦２探知」
レーダー要員が言い
「目標艦、春島北北東洋上２５キロ、針路０―９―２速度１８ノット接近します」
報告に
「島影から出たこっちも自艦のレーダーで捕捉したはずだ、向こうは戦闘態勢に入るぞ」
俺は言い
「敵陣形に変化アリ」
さらにレーダー要員は言い
「後方艦おそらくは「ルサ」前に出ます」
この時、レーダー要員の陣形変化を聞いていた砲術長は
「〔やはり・・・・旧式の「ルサ」が「スラーグ」を守るか前か・・・〕」
内心思い
「一ノ瀬艦長、砲撃では「射程延長弾」を使用してはいかがでしょうか？、防御不可能の敵主砲は３０キロ、射程延長弾ならば射程は１００キロ長射程を生かすべきだと思いますが」
言ったが、次の瞬間
「・・・・・砲術長・・・・・そらあかんやろ」
俺は言い砲術長は
「はっ・・・・・・・」
答えつつも内心
「〔でた・・・・艦長の関西人でもないのに関西弁・・・・本気モードになった〕」
思いつつ
「３０キロまで接近してでの５インチ砲での砲撃でなければ兵装のみの破壊は難しいだろう」

俺は答え
「・・・・了・・・・」
砲術長は答え
「〔どうなってるんです、艦長・・・・いつものイケイケではないんですよ？〕」
それと同時に艦内に警報音が鳴り
「東亜連邦艦がレーダー波照射ッ、ロックオンされました」
報告が飛び交い
「来るぞ・・・・対艦ミサイルが・・・・・」
俺は言ったのだった。
「敵２艦共にミサイル発射、全８基向ってきます。距離４０㌔到達まで１分２０秒」
レーダー要員の報告に焦らず
「ＥＣＭ戦用意ッ」
命令を下し
「〔前はなかった機能が今はついている、格段に戦いやすくなっている〕」
安心感と共に思い
「パッシブからアクティブに変換、妨害電波照射ッ」
乗員がスイッチを押しミサイルに対し目つぶしをかける
「ミサイル接近、距離２４㌔」
ディスプレーではミサイルを示す点が５基消滅するが
「ミサイル５基落下確認、尚も３基が高度を下げて突入してきます」
それに対し
「ＭＤシステム始動ッ、短ＳＡＭ、ＥＳＳＭ・４基照準、前甲板ＶＬＳより発射ッ!!」
向かって来る敵対艦ミサイルに対し「はぐろ」は前甲板ＶＬＳより追撃ミサイルを発射した
第６護衛隊群　旗艦「ずいかく」
ＣＩＣ

「「はぐろ」東亜連邦巡洋艦からのミサイルを回避、８基中５基墜落、尚も３基が接近・突入中」
風吹一佐はモニターを見つつ
「しっかり頼むぞ・・・・」
いうのだった。

第６護衛隊群　艦隊防空イージス護衛艦ＤＤＧ１８０「はぐろ」
ＣＩＣ
「短ＳＡＭ目標を捉え命中ッ」
モニター上にミサイルが命中し点が消えるが
「砲術長、一発すり抜けました、突入してきます、距離１５㌔本艦到達まで２０秒」
言い
「短ＳＡＭは間に合わない、ＣＩＷＳで迎撃ッ」
砲術長は素早く指示を出し
「ＣＩＷＳオープン・コントロール」
突っ込んでくるミサイルに対しＣＩＷＳは射撃を始めミサイルを撃ち落とす
「全目標の撃墜を確認ッ」
レーダー要員に対し
「目標艦の動きは？」
聞き
「はっ、目標艦以前経路・速度変わらず接近中本艦との距離３０㌔」
それを聞き
「よし、砲撃の為の射線を確保する、目標艦右舷へ回り込め、取り舵５０。機関最大戦速ッ!!」
命令を出し
「取り舵５０。、機関最大戦速、了解ッ」
艦はスピードを一気に増す
「敵艦経路の変わりはないか」
言い

「ハイ、敵艦針路・速度変わりありませんッ」
その報告に
「〔舐めてんのか？〕」
内心思いつつ
「こちらが離脱とみたか・・・・・はては防御のみで攻撃はないとふんだか・・・」
言って居ると
「目標、敵巡洋艦「ルサ」に対し９０。の位置に達しました、射線確保、目標との距離３０㌔」
報告に
「主砲砲撃、射線確保ッ」
モニターに主砲の照準が映り
「此処からは時間との戦いだ、もう片方の「スラーグ」に応撃の時を与えるな、こいつらの兵装を破壊しないと我々の上陸部隊に奴らの火力が降り注ぐ事になる」
言い
「第１目標、艦中央対艦ミサイル発射筒」
「第２目標、前甲板対空ミサイル発射筒」
「第３目標、後甲板魚雷発射管」
「第４目標、最後に主砲だ」
俺は言い更に
「砲術長、全目標一撃で沈黙させろ、３～４発撃ち込めば火災・弾庫に誘爆の恐れがある」
砲術長に指示をだし
「了」
砲術長は答えつつも
「〔恐れどころの話ではないでしょう・・・・〕」
苦笑しつつ思い
「全照準、射撃管制マニュアルにて行う・・・・第一目標照準ッ・・・よしっ」
これに俺は

「ぶちかませッ」
言い
「射ッ!!」
砲術長がいったのと同時に主砲５インチ砲から砲弾が発射され薬莢が前甲板に落ち敵艦に向かっていく
「第二目標照準ッ」
一発目の砲弾が綺麗に敵東亜連邦巡洋艦「ルサ」のミサイル発射筒に命中した事がモニター越しに確認出来
「第二目標照準よしっ!!」
「射ッ!!」
砲弾が発射され第二目標の対空ミサイル発射筒を吹き飛ばす、それと同時に
「スラーグ」向かってきます１０時の方向距離２５㌔」
レーダー要員が言い
「第三目標照準よしっ!!」
砲術長が言い
「敵主砲射程距離２０㌔到達まで後１分」
レーダー要員が言う中
「〈負けん・・・俺達の技術を見せてやるッ〉」
内心思っていた
「「スラーグ」全速で突入してきます、距離距離２４㌔」
レーダー要員が言い
「敵艦主砲射程距離まで後１分」
「「ルサ」第四目標主砲砲塔照準」
この時後ろで見モニターを見ていた乗員は
「〈艦長後１分で向こうは撃ってきます、イージス艦は被弾しない事を前提として作られています、装甲はあってないようなもの・・・向こうの１００㎜連装砲弾一発でも艦橋に喰らえば持たないでしょう・・・」
そう思う時も攻撃は続き

「照準よしッ!!」
砲術長がいう中
「〔艦長、「イージス」とは驕りです〕」
いうのだった。
「射ッ!!」
最後の第４目標に向けて発砲し
「「スラーグ」接近、距離２３ｷﾛ、針路変わらず」
耳で聞きつつ目はモニター見て第４撃が敵艦主砲砲塔に命中した事を確認し
「第４目標命中確認ッ」
それを聞き
「砲術長、次の目標、接近中の「スラーグ」の前甲板主砲砲塔」
俺は言い
「「スラーグ」の主砲砲塔?!」
砲術長が困惑するが
「こいつは射線確保の手間はない、ぶちかませッ」
俺は言い
「はっ、目標「スラーグ」主砲砲塔」
「はぐろ」主砲砲塔が旋回する時とほぼ同じく艦内に警報音が鳴り
「「スラーグ」からレーダー波照射、ロックオンされました」
乗員が言い
「照準よしッ」
モニターの主砲照準が接近する「スラーグ」の主砲を捉え
「射ッ!!」
砲撃はほぼ同時だった、自艦の放った砲撃と向こうの砲撃は
「う・・撃ってきた」
乗員が言い、俺は間髪入れずに
「機関後進全速ッ、バックだッ!!」
叫ぶように言い
「機関後進全速ッ、了」
艦橋に居る航海長の山本三佐が言い敵砲弾が迫る中「はぐろ」は

バックを始めるそして
　ズーーーン
　振動と共に海水のしぶきが艦を包みこみ
「か・・・かわしたッ」
　周りの乗員が言う中モニターを素早く確認し、放たれた砲弾は接近中の「スラーグ」の前甲板主砲砲塔を綺麗に破壊していった
「スラーグ、主砲砲塔命中確認しました」
　砲術長は言い
「よーーし、よくやった砲術長、勝負は此処からだ、こっちの機動性と操艦技術に物を言わせて一気に攻める、「スラーグ」の右舷に回り込み射線を再度確保ッ」
　言い
「取り舵９０。、こちらの射線３０キロを確保」
　言い
「了、取り舵９０。３０キロの距離を維持ッ」
　艦橋の山本航海長が復唱し艦は一気に動く。
「向こうの対艦ミサイル・魚雷反撃の間を与えるな、一気に叩くぞ」
　俺は言い
「第二目標、「スラーグ」対艦ミサイル発射筒照準よしッ!!」
　砲術長は言い再び砲撃が再開された。

　第６護衛隊群　旗艦「ずいかく」
　ＣＩＣ
「「はぐろ」「スラーグ」への射線を確保」
「砲撃開始ッ」
　これをモニターで見ていた風吹艦長と白谷群司令は
「先の有事以来の海戦を制したか・・・・一ノ瀬艦長、ギリギリの判断と意志だっただろう。」
　言い
「これで「はぐろ」は我が第９４航空団の出番を作ってくれました」
　風吹艦長は言い、作戦は第２段階に移行するのだった。

第５０話～春島空爆戦～

第６護衛隊群　旗艦「ずいかく」
「深山航空団司令、艦長室においで下さい、繰り返します・・・・」
艦内放送の後
「深山入ります」
艦長室に航空団司令の深山一佐が入室する
「ご苦労」
風吹一佐が言い
「やりますか？」
机に広げられている地図を見て単刀直入に深山一佐は言い、それに
「やる」
風吹一佐も答え
「「はぐろ」の砲撃で東亜連邦海軍艦艇の兵装は無力化できた。いよいよ春島に配備されてるミサイル陣を叩く、こいつを潰さねば上陸を目指して迫っている水陸機動団が身動きが取れなくなる、問題は衛星で確認が出来ない車載式の移動発射装置その特定だ。我々の作戦では一ノ瀬一佐が指揮を執るイージス艦「はぐろ」がさらに春島に接近し囮となり、東亜連邦側の対艦ミサイル発射を誘発する」
風吹一佐は言い地図を指しつつ説明し
「発射すればその位置は補足できる、特定すれば上空からＦ―３５の空対地ミサイルが撃ち込めピンポイントで破壊する事が出来る。無論イージス艦「はぐろ」のミサイルでも可能だ、だが、詳しい状況がわからぬ現段階では住民に被害が出ない保証がない。人的被害を・誤射を避けるためにも空から攻撃するよりほかない」
風吹一佐は深山一佐を見ていい
「尚、本作戦はＦ―３５予備機５機のうちの２機を使う」
風吹一佐が言い
「待って下さい、風吹一佐、順当に行けば「ファルコン隊」がこの任務にあたるべきかと」
深山一佐は言い

「確かに順当に行けばそうだろう、だがこの任務は1個飛行小隊8機で当たらねばならぬほどの大掛かりなものでもない。現状ミサイルの破壊が最優先目標である事だ。」

風吹一佐が言い

「では隊長は誰を選任するおつもりですか?」

深山一佐は尋ね

「実績、技量から言えば二条三佐」

風吹一佐は言いそれに対し

「艦長!」

深山一佐は言い

「島に偵察衛星の情報ですが対艦ミサイルや対空ミサイルなど重火力を備えていると報告があります、その上敵の装備の配置状況を確認しつつピンポイトでの破壊となると、危険な超低空飛行が要求されます、下手すればハチの巣では済みませんよ」

深山一佐は言い

「それに二条三佐は今現在もプレデター隊を率いています、組み上げたパトロールのローテーションを崩すべきではないかと思います。」

深山一佐は言い

「では航空団司令、適任者は?」

風吹一佐は尋ねると

「目の前に!!」

なんと深山航空団司令は自信を指していったのだ。

「・・・・・・・・・・・」

「・・・・・・・・・・・・・」

互いに数秒の無言の後

「「勇猛果敢」「支離滅裂」、航空自衛隊を揶揄するレッテルだ、その勇猛の裏にある指揮官としての冷静な責任感に期待したい」

風吹一佐は深山一佐を見て

「5インチ砲で敵艦の兵装を全て破壊したイージス艦「はぐろ」の意志を完遂サウルのは貴官しかいないだろう、航空団司令が作戦に参加というのはイレギュラーだが深山一佐」

その問いに
「はっ」
深山一佐は言い
「本作戦の作戦指揮官を命ずる。僚機搭乗員の選出は一任する、春島の東亜連邦軍対艦ミサイル陣地を全てスクラップにして必ずこの「ずいかく」に帰艦してきてくれ」
風吹一佐は深山一佐に言い
「はっ」
深山一佐は言うのだった。

第５１話～忍び寄る影～

第６護衛隊群　旗艦「ずいかく」
ＣＩＣ
「イージス艦が一隻抜けてるからな対空・対潜警戒を厳とせよ」
矢口二佐が指示を出し
「攻撃隊の出撃準備はどうか」
風吹一佐も格納庫に無線で問う中海中では

東亜連邦海軍潜水艦
「艦長、捉えました。敵空母「ずいかく」です」
北方艦隊に随伴する潜水艦の最後の生き残りが艦隊を捉える距離まで来ていたのだ。
「遼艦を２隻も撃沈されて黙っていられるほど我々も人間が出来てないものでな」
艦長は言い
「この位置ならば敵空母「ずいかく」を狙えます」
乗員も言い
「魚雷発射管注水、目標敵空母「ずいかく」発射チャンスは一度っきりだ。外すなよ」
艦長が言い
「お任せ下さい」
水雷長が言い東亜連邦潜水艦は魚雷発射のチャンスをうかがいそして
「発射ッ」
「急速潜航ッ」
魚雷を発射と同時に急速潜航し敵の補足を逃れるように潜った。

その頃
艦隊左舷
汎用護衛艦ＤＤ１１６「てるづき」

「艦長ッ、魚雷発射音探知・・・・目標は「ずいかく」ですッ！」
はるづき艦長の加藤貴明二佐は
「デコイ発射、対潜戦闘用意ッ」
艦内に警報が鳴り対潜戦闘の配置に乗組員が付く。
加藤二佐の指示でデコイが発射され
「・・・・・・艦長、敵魚雷はデコイに食いつきました、魚雷デコイを追尾していきます。」
魚雷がターンし囮に食いつく。数十秒後
「艦長、魚雷が再ターンずいかくに向かっていきます」
ソナー要員の報告と同時に
「「ずいかく」ＣＩＣより「てるづき」ＣＩＣへ対潜戦闘敵潜魚雷へ対処を」
指示に
「了解ッ」
加藤二佐は返答し
「甲板ＶＬＳ、０７式対潜ミサイル発射用意ッ」
命令を出し
「撃てッーー」
発射命令に前甲板のＶＬＳより０７式対潜ミサイルが発射され敵潜が発射した魚雷に向け走行する。数秒後に
「誘爆かくに・・・・」
ソナー要員が言おうとした時だった。
「一発すり抜けました、「ずいかく」に向かいます艦長」
その時加藤二佐の脳裏では
「〔距離的にもう間に合わない・・・・かくなる上は・・・・〕」
覚悟を決め
「総員テッパチを着用、左舷要員は艦尾へ退避急げッ、機関最大最大戦速ッ」
命令を出し
「我が「てるづき」を持ってして「ずいかく」を守るッお前らも艦尾へ逃げろッ」

加藤二佐はＣＩＣに居る乗員へも言うが
「それは出来ません、」
乗組員が言い
「艦長に我々は教わりました、「いついかなる時も持ち場を離れるな」と」
それに
「お前ら・・・」
加藤二佐は言い直ぐに席に座り
「総員、衝撃に備えーーーッ」
乗員が来る衝撃へと備えるそして・・・・・

ドォーーーーン

衝撃と共に「てるづき」に魚雷が命中し
「うぉッ」
艦は凄まじい衝撃に見舞われ
「艦長、魚雷被弾ッ、浸水が激しくブロックの閉鎖が追いつきませんッ」
「艦が傾斜していきますッ・・・・艦が沈みますッ」
加藤二佐に報告が上がり
「艦長より総員へ、速やかに乗員は退艦せよッ・・・繰り返す速やかに乗員は退艦せよッ」
指示を出し
「お前らも行け、俺も後で追いつく」
加藤二佐は指示を出したのだった。

第６護衛隊群　旗艦　「ずいかく」

「白谷司令、・・・・「てるづき」が沈みます・・・・・」

モニターからの映像に誰もが息をのみ
「てるづきの乗員救助急げッ」
「手の空いてる奴は急げッッ」
矢口二佐が無線を握り絞めて言い
「発艦作業一時中断、繰り返す中断ッ」
風吹一佐が発艦中断の指示を出す中
飛行甲板でもその光景が見え
「「てるづき」が沈んでく・・・・・」
機に搭乗しようとしていた深山航空団司令もその光景を見ていた。救命胴衣を装着した「てるづき」乗員らが海に飛び込む中、爆炎を上げその船体が少しづつ傾斜していく。

艦隊防空イージス護衛艦ＤＤＧ１７９「まや」
ＣＩＣ
「対潜警戒を厳としつつ救助を急がせろ内火艇を下ろせ、急げッ」
木村一佐の指示で対潜経警戒をしつつ「てるづき」の乗員救助に奔走していると
「艦長、「てるづき」が・・・・沈んでいきます・・・」
モニター見ると傾斜していた船体がだんだんと海に沈んで行っていた。
「・・・・・・・・・」
言葉が出なかった、なんとアレを表現すればいいのかわからなった。そしてこの報は先行するイージス護衛艦「はぐろ」にも

艦隊防空イージス護衛艦ＤＤＧ１８０「はぐろ」
ＣＩＣ
「バカな・・・・」
俺もモニターを見て沈没していく「てるづき」を見ながら言い離れているがゆえに助ける事の出来ないもどかしさを感じて居た。そこに

「「ずいかく」より入電。発艦作業を一時中断、作戦待機繰り返す待機せよとの事です」
副長の高本二佐が言い
「不意を突かれた・・・・」
俺は仲間が心配だった。皆退艦する事は出来たのだろうか、負傷者や考えたくもないが死者の有無は・・・・考えるときりがなかったが
「ずいかくに打電「現状待機了解」と」
通信員に打電を命じ
モニターを見つつ俺は艦長席から立ちあがり
すっ・・・・
沈没していく「てるづき」に…母艦を守る為に盾となった「てるづき」に敬礼をするＣＩＣ内部の乗員らも俺と同様にモニター越しではあるものの敬礼をしその任を最後まで全うした艦の最期の雄姿を見送った。そして
「このツケは高く付くからな・・・・・・・・東亜連邦ッ」
この海域に潜むであろう東亜連邦北方艦隊随伴の最後の生き残りの潜水艦へとつぶやいたのだった。

第５２話～拡大する戦火～

横須賀統合任務部隊司令部
「てるづき」が撃沈されただと?!」
司令部にもたらされた報告に杉本司令は言い
「ハイ、先ほど第６護衛隊群司令の白谷群司令より報告があり、死傷者が多数出ております」
海上自衛隊側の幹部が報告し
「この襲撃で春島の対艦ミサイル陣を空爆しようと発艦準備にかかっていた第９４航空団は発艦待機、並びに先行しているイージス護衛艦「はぐろ」も現状待機しております」
奉告を受け
「艦隊の現状は?」
杉本司令官は言い
「陣形の変更を行い、そのうえで任務を続行するとの事ですが、懸念材料もあります」
１人の海自幹部が言い
「何か?」
杉本司令は言い
「負傷者の後送の方法です、今の艦隊の対空防御に対潜警戒とこれ以上の艦を減らす事は出来ません。ＳＨ―６０Ｋでのピストン輸送も検討しましたが、不可能と判断しました。」
海自幹部は報告し
「分かった、陸自・空自からは?」
杉本司令官は陸自・空自側の幹部の報告を伺い
「輸送機にて、特殊作戦群・特別警備隊が西ノ島に向かっていますが、艦隊の再編に伴い降下の延期も含め作戦の見直しを行っております。」
陸自側の特殊作戦群群長と海自特別警備隊司令が言い
「我々空自側は現段階では特段作戦に関しては問題はありません、尚「ずいかく」搭載の艦載機のＦ―３５ＪＢの損耗に備え予備機３０機

を整備完了済みで待機中です」
　報告が上がり
「第６護衛隊群に代替え艦の派遣は？」
　杉本司令が言い
「難しいいですね・・・・今現状バックアップに第２護衛隊群が向かっていますがそこから防空艦をとなると・・・・・」
　海自幹部も頭を抱える。先の有事で勝利したはいいもの艦の数を増やしたり自衛官の増員と時間のかかる事はそう簡単にいかない。
「・・・・・・・・・・・・・・・・・」
「・・・・・・・・・・・・・・・・」
　その光景を黙ってみていた二人の軍人が居た。オブザーバーとして司令部に居る
　在日アメリカ大使館駐在武官　海軍大佐ジャック・マスタング大佐
「〔ふむ・・盟友が困難に直面している・・同盟国として助けねば・・・〕」

　在日中国大使館駐在武官　海軍大校　張英久
「〔日本に対し恩を返すならば今を置いて他にはない・・・艦隊の出撃のカードを切るならば今だ。〕」

「よろしいですか、杉本司令官殿」
　中国武官の張大校は手を上げ、大校に視線が集まり
「今この状況を鑑みて貴軍の支援の為に艦隊を派遣するならば今しかないと判断できます。司令官殿、伊部総理閣下にお目通りできませんでしょうか？」
　張大校は言い
「中国海軍が我々を支援すると？」
　杉本司令官は言い
「ハイ、必要ならば負傷者後送にとどまらず、艦隊を自衛隊空母機動部隊に合流させ
　日中共同で作戦行動にあたる事も可能です。。」
　張大校は言った。単純計算でもイージス艦が＋６隻、艦載機が＋６

０機合計でイージス艦は８隻、艦載機は空母２を合わせて１０５機、防空網はイージス艦が８隻とぬかりなし。艦載機も１００機を超えるとなると向こうもおいそれと戦う事は出来ない。だが

「ご厚意感謝する、今の意見は上にあげます。」

杉本司令官は言ったが内心

「〔中国の参戦を招けば核戦争になりかねない・・・それだけは回避せねば・・〕」

杉本司令官も焦っていた。

第５３話～決断～

官邸

「何?!」

伊部は護衛艦「てるづき」撃沈の報を受けると同時に

「オブザーバーとして司令部にいる中国武官からで艦隊を自衛隊支援の為に出撃を認めてほしいと」

「・・・・・・・・・・・・・・」

伊部総理は考え込み

「西郷防衛大臣、現場海域のバックアップの第２護衛隊群から代替え艦はなんとかならんのか?」

伊部総理は言い

「第二護衛隊群も水陸起動団の上陸支援と第６護衛隊群と共に海上優勢確保の任があります、手一杯の状態です。そもそも、水陸機動団も第２護衛隊群と「ずいかく」第９４航空団の支援がなければ上陸作戦も難しくなります。」

西郷防衛大臣は説明し

「・・・・・・・・・」

伊部総理は考え込み

「総理、我々にとれる選択肢は３つです。」

西郷防衛大臣は言い

「１日本海から第５護衛隊群を呼び戻し、第６護衛隊群の支援に向かわせる」

「２既に申し出があった中国と共に共同戦線を張る。即ち艦隊の支援を要請する」

「３同盟国の米軍に支援を要請する。」

西郷防衛大臣は言い

「デメリットは」

伊部総理は言い

「・・・・ハイ」

西郷防衛大臣は

「1に関しては、まず日本海側が手薄になり半島が何をしでかすかわからないという事です南も北も、そして第5護衛隊群が向かうとなると距離がありすぎるという事途中での補給が欠かせない状況になります。要するに時間がかかりすぎると言う事です」
「2に関してですが、これは戦う意味では有利でしょうがこれは即ち、「現場の自衛官達を我々は信用していない」というメッセージを与えかねないと言う事です。」
「3に関してはアメリカに体のいいように利用される上に水面下で莫大な「金」を請求されかねないでしょう某アニメ風に言えば「お助け料」とでもいったほうが良いでしょうか?」

西郷防衛大臣は説明し
「どれをとっても難しい判断だな・・・・西郷クン、君ならどれを選択する」
伊部総理は言い
「ハイ・・・・私はあえて「毒を持って毒を制する」やり方を取ろうと思います」
西郷防衛大臣は言い
「・・・・・・・・・西郷クン・・・・・」
伊部総理は言い
「私はこの国あっての国民と思います。この有事をまずは収束させる事を最優先します、現場で奮闘している全自衛官への謝罪や弁明はその後でも十分にできます。ですがこの有事で敗北すれば春馬群島だけではない、住民の生命や今後の日本すらどうなるかわからないような事態に発展します。我々政治家は国民の負託を受けて此処に居ます、ならば我々がする仕事はその国民に対して「責任」を取る事です。いかな形であれ」
伊部総理は西郷防衛大臣の話を聞き
「西郷クン・・・・・・・・・」
言ったのち頷き
「諸君、この全責任は私にある」

伊部が受話器を取ろうとした時
「総理一人に腹切りはさせません、我々皆お供します」
関係閣僚は頷きあい
「諸君、・・・・ありがとう」
伊部総理は言い
受話器を取り、とある場所へと連絡を入れるのだった。

第５４話～最良の一手と信じて～

日本海　第５護衛隊群　旗艦「いぶき」
ＣＩＣ
「秋津群司令、お電話です」
隊員が言い
「ハイ、司令の秋津です」
秋津群司令が電話に出る
「秋津群司令、総理からの緊急の命令だ全艦春馬群島に急行してほしい」
西郷防衛大臣からの指示に
「防衛大臣、失礼ですが本艦隊が此処を離れれば誰が半島監視の任を引きつぐのですか？」
群司令の秋津海将補は尋ね
「それに関してだが、総理自身が直接お話をされたいそうだ。代わります。」
そう言い受話器を変わったのだろう
「秋津司令、伊部です。至急艦隊には春馬群島に急行して頂きたい。第６護衛隊群の事は？」
伊部総理は秋津海将補に言い
「ハイ、伺ってます。護衛艦「てるづき」が撃沈され死傷者が多数出ていると」
秋津は答え
「その通りだ、秋津司令。現在現場海域に向かってる第２護衛隊群だけではカバーしきれないのが現状だ。それらの状況を鑑みて春馬群島に急行してほしい。補給艦も手配も行う。」
伊部総理は言い
「了解しました。補給予定地は統合任務部隊司令部に送ります。」
秋津司令は言い、最後に
「で、総理誰が我々の監視の引継ぎを？」
その答えに

「・・・・・・」
「!!」
　秋津群司令も驚きを隠せないようだった。しかし
「昨日の敵は今日の友・・・か」
　受話器を置いた後呟き
「新波艦長、全艦に打電これよ本艦隊は海域を離脱、春馬群島に急行する。全艦転舵命令を」
　それに新波一佐も
「了解ッ」
　命令を出すのだった。

　遡る事数時間前

「総理、中国大使館大使代理と武官がお見えになられました」
　外務省職員に言われ部屋に入り
「わざわざありがとうございます」
　伊部総理は言い
「隣国の友が窮地に立たされているのなら助けるのは当然の事です。これは貴国から我々は学びました。」
　大使代理は言い
「伊部総理、駆逐艦「てるづき」の乗員に哀悼の意を捧げます。日本の船乗りはいつの世も勇敢でシーマンシップにのっとっているのだと歴史が証明しております。」
　武官張大校が頭を下げ
「ありがとうございます」
　伊部総理も頭を下げる。そして
「伊部総理、自衛隊と日本はどのように作戦を今後進めていくおつもりですか?」
　中国大使代理は聞き
「ハイ、日本海より、秋津海将補率いる「第5護衛隊群」を「第6護衛隊群」のサポートの為向かわせます。」

中国大使代理は
「成る程、伊部総理は秋津少将率いる第５艦隊が抜ける穴を我が国の機動部隊でカバーしてほしいと」
中国大使代理は言い
「ハイ、お力を貸して頂きたいと」
伊部総理は言い
「分かりました。本国の首席閣下に直ぐにでもお伝えいたします。我々としてもこの有事のどさくさに紛れて何か問題を起こされたらたまったものではありませんからね
それと貴国の期待に応えるとお約束致します。それからこれはおせっかいかもしれませんが我が海軍から病院船とその護衛の為のミサイル駆逐艦を派遣し第５艦隊に合流させて頂ければと思うのですが」
中国大使代理は言いその申し出に
「{これなら「てるづき」乗員の治療も行える!!}」
伊部総理は内心思い
「感謝致します」
伊部総理も言ったなぜなら自衛隊には病院船は配備されておらずこれまで協議はされてきたがその都度配備はお流れになっていたからだ。そして互いに固く握手を交わし正式に中国が支援に動く事を約束してくれたのだった。

第５５話～第５護衛隊群、春馬群島へ～

第５護衛隊群　旗艦「いぶき」
ＣＩＣ
「艦長、補給ポイントを統合任務部隊司令部に打診します」
「格納庫、機体整備状況を確認しろ。」
「艦長、群司令は・・・・・」
乗員が新波一佐に
「司令なら「あそこ」だろう。さて、呼んでくるか・・・」
苦笑しながら新波一佐はＣＩＣから「そこ」にむかった。
艦内が戦場となる中・・・・
格納庫
「いぶき」搭載機Ｆ―３５ＪＢ×１２機
内訳
ナイトホール隊×５機
デルタホーク隊×５機
予備機２機
合計１２機

整備が急ピッチで進められていた。
「ガンポットの装着急げ」
「２５㎜弾持って来い、足りないぞッ」
「弾庫にミサイルを装備しろ」
「燃料の補充急げッ」
格納庫に秋津司令の姿はあった。
「迫水一佐、進捗状況はどうか？」
秋津群司令は迫水一佐に尋ね
「ハイ、機体は整備は完了している状態でしたので武装と燃料の補充です。流石に「ずいかく」に比べると些か寂しいですね、Ｆ―３５ＪＢが１２機しかないというのはあちらは確か・・・・・」
「４５機だ」

秋津司令は答え
「こちらの3倍以上の機数を搭載しているんですよね」
唸る迫水一佐に対し
「現場も奮闘している。我々は先の「尖閣有事」を経験しているが敵も「東亜連邦」も我々が増援として出てくることを予想はしているのではないか？」
秋津群司令は言い
「ハイ、」
迫水一佐は頷き
「ですが司令、間に合いますかね？我々が現場に到着するまで・・・」
迫水一佐は言い
「我々はお守りのようなものだろう。第６護衛隊群にも我々が向かっていると分かれば自分達の後ろにバックアップが控えているという事で安心感が生まれ心に余裕ができるだろう。」
秋津群司令は迫水一佐の肩に手を置き言った。そこに
「群司令、やはり此処ですか？」
背後から声が聞こえさ、迫水一佐と秋津群司令が振り返るとそこに新波一佐が居た。
「やれやれ、艦長は鋭い」
秋津群司令は言い
「何年の付き合いと思っていますか？」
新波一佐は言い
「迫水一佐、第９２航空団の機体のほうはどうか」
聞き
「今しがた秋津群司令も報告しましたが、機体の整備はほぼ完了していたので武装の装備と燃料の補充を行っています。海域につく前に部隊は出撃可能になります。」
迫水一佐は報告し
「相手はＭＩＧ３５だとか」
迫水一佐は言い
「ああ、情報では既に東亜連邦は第９４航空団「プレデター隊」「アー

ノルド隊」との戦闘で９機を損耗し更なる空戦で合計１０機以上を撃墜されている。こちらの損害は護衛艦を一隻を失ったが機体の損害は出ていない。」
　秋津群司令は言い
「プレデター隊・・・・指揮官は確か・・・・二条三佐か・・・・」
　迫水一佐は言い
「知ってるのか？」
　新波一佐が尋ね
「ええ、訓練課程でも実績でもピカイチですよ。私が鍛えたパイロットの一人ですからね。二条三佐は。」
　迫水一佐は答え。
「成る程、教え子の活躍は教官としてもうれしいか？」
　秋津司令も言う中
「半々ですね」
　迫水一佐も答え
「さて、群司令そろそろＣＩＣに戻りましょう。統合任務部隊司令部に補給ポイントを打診しないと」
　新波一佐に引きずられるように戦闘機格納庫から秋津群司令は連れていかれたのだった。

第５６話～流動的状況～

ロシア
東亜連邦外交代表部
「何?!、その情報は確かか!!」
東亜連邦代表は言い
「ハイ、確かです。日本海に展開していたはずの「第５護衛隊群」が全艦転舵。恐らくは春馬群島へと向かうと思われます」
「目的は・・・・」
「第６護衛隊群の支援かと思われます。」
言い
「駆逐艦「てるづき」の撃沈がとうとう日本を本気で怒らせたと思われます。先の有事の英雄と言われた秋津少将が指揮を執る艦隊です。」
「バカな、たった１２機のＦ―３５ＪＢで何ができる。」
「ですが代表、日本艦隊の駆逐艦を撃沈したとは言え空母は無傷です。日本第６艦隊の旗艦「ずいかく」の４５機に「いぶき」の１２機が合流されると合計で５７機戦力差はほぼほぼ０ですむしろこっちが不利になります。」
外交部員の説明を聞き
「先の有事の英雄、秋津竜太少将・・・元戦闘機乗りで空自から海自へと配属転換。」
資料を読み
「完全に日本にしてやられた・・・先の有事のレジェンド「いぶき」を送り込んでくるとは」
代表は言い
「ハイ、これは私達も全く想定していませんでした。米軍は第７艦隊の準備にもたついていますし中国の広東艦隊はいまだ即応態勢のままのようです。」
状況を確認していると
「大変です、代表!!」
もう一人外交部員が入ってくる

「こんどはなんだ!!」
　言うと急いでテレビをつけると
「我が中国は日本伊部総理の援助要請を受け艦隊派遣の判断を下したことを此処にご
　報告致します。」
　日本の報道陣を前に言い
「艦隊は春馬群島に急行する「第５護衛隊群」の半島監視任務を引き継ぐ形を取りますがそれとは別に「病院船」と護衛の「ミサイル駆逐艦」２隻を途中に第５護衛隊群に合流させ現場海域で日本自衛隊の支援活動を行います、また、この病院船とミサイル駆逐艦は日本自衛隊統合任務部隊司令部の指揮下に入ります。」
　中国大使代理は言いそれに
「大使代理、先の有事で自衛隊と中国軍は戦っておりますがそこに葛藤などは感じないのでしょうか!!」
　その問いに
「失礼、貴方はいつの時の事を言っているのですか?某半島国家ではあるまいし、我々日中は共に前に進むためにあの局地紛争を最後に公式調印を交わしました。逆に問いますが「助けてくれ」という事に対し「昔一戦交えた相手だから」なんてことを理由に断る事をしますか?」
「・・・・・・・・・・・・」
　日本の記者は黙り込み
「自衛隊空母艦隊に合流後はそのまま現場海域へと速やかに急行します。海域においてはミサイル駆逐艦の護衛の元、負傷者の処置にあたります。」
　中国大使代理は説明し
「今現在、現場で突破口を開こうと陸海空自衛隊員らが奮闘しています。政府は状況を包み隠さず国民の皆様にご報告いたします。変なデマやうわさに惑わされることのないようにお願い致します。」
　この会見を見た東亜連邦外国部は
「何?!、中国が自衛隊の支援に動くだと!!」

「こんな事想定外だぞ!!」
　喚くも
「落ち着けッ、所詮は中国製だ。あてになるものか」
　言う周りは
「・・・・・・・・・・・・・・」
「・・・・・・・・・・・・・・」
「・・・・・・・・・・・・・・」
　沈んでいるのがよくわかる光景だった。

　所変わって　米国　ホワイトハウス　大統領執務室
「ファ○ク、ファ○ク、ファーーー○クッ」
　ドランプ大統領は発狂し
「海軍のドンガメ共は何をもたつている!!中国に先を越されるとは!!!」
　悪態を付くも
「見方によってはラッキーです。中国が貧乏くじを引いてくれたおかげで我々は痴話喧嘩で東亜連邦を日本・中国と共に罵ればいいだけなのですから」
　官僚の一人が言うが
「ですが、これはボイデン陣営に利用されなければいいのですが、「日本はドランプを見限ったのだと」「ドランプが無能だから日本は中国を選んだ」などこうならななければいいのですが」
　不安そうに言い
「在日米軍の司令官に伝えろ、艦隊の準備が完了次第直ちに伊部総理に武官を通じて自衛隊戦闘支援の為に出航すると」
　言い、官僚が出ていくと
「裏切者めが・・・・・」
　テレビを見つつぼそっとつぶやいたのだった。

第５７話～東亜連邦北方艦隊～

東亜連邦北方艦隊　旗艦　グルシャ
ＣＩＣ
自衛隊護衛艦「てるづき」を雷撃で撃沈し、その一報に沸くＣＩＣだったが同時に凶報ももたらされる
「司令、自衛隊空母を仕留める事は出来ませんでしたが駆逐艦１隻を撃沈しました」
艦長からの報告を聞き司令官は
「フム・・・・流石対潜防御は伊達ではないか・・・だが駆逐艦１隻を撃沈したのは大きい。自衛隊の准空母の護衛はイージス巡洋艦２隻、汎用駆逐艦２隻、そのうちの１隻を潰したのは大きい戦果だ、焦る事はない。こちらは護衛の駆逐、巡洋艦艦数は６、艦載機もまだ補充が効く分こっちが勝っている。」
司令官はこの段階では余裕を持っていたが
「艦長、司令、本国より入電です」
通信員が言い
「読み上げろ」
艦長は言い
「はッ、増援の為、日本海より「第５艦隊」が本海域に向けて進出してくると事、注意されたし、尚中国が日本支援を表明し、人民解放海軍艦隊の出動を確認」
電文を読み上げ、内容を聞いた艦長と司令官は
「やはりでてきたか・・・・第５艦隊・・秋津竜太少将・・・」
司令官は言い
「先の有事の英雄と言われた「いぶき」当時の艦長、今現在司令官のですか・・・」
艦長も言い
「今現在の「空母いぶき」のデータはあるか？」
乗員に言い
「はい、先の有事以降、戦闘のデータを検証後に艦載機の搭載機数を減

らしてます。初期段階では予備機含め１７機でしたが、今現在での搭載機数は予備機含め１２機恐らくは２個飛行小隊規模と思われます、艦載機を減らした分哨戒用の汎用ヘリの機数を増やしています。」
　データを確認し乗員は言い
「１飛行小隊としても５機編成の１０機２個飛行隊の・・・・予備機が２機か」
　艦長は腕を組み
「だが経験が豊富な厄介な艦隊だ、「質と知恵」で「数の暴力」に勝利した、これは無視できない要因だ」
　司令官も言った。東亜連邦にとっては「第６護衛隊群」も厄介な存在ではあるがそれよりも厄介な存在が「第５護衛隊群」だった。確かに搭載艦載機機数は圧倒的に自陣が有利ではあるが慢心すれば先の尖閣有事の中国と同じ末路を辿る事になる。
「ですが、汎用駆逐艦を沈めても空母も護衛のイージス巡洋艦も無傷です。よく自衛隊の潜水艦にかぎつけられなかったと思いましたよ」
　艦長は言い
「ああ、その通りだ。だがこれで時間を稼ぐ事は出来るはずだ。増援が来ると言っても直ぐにという訳でもない。それに駆逐艦の乗員救助と艦隊の陣形の変更の為に時間を食うはずだ」
　腕を組みモニター上にフリップとして表示されている「第６護衛隊群」を見て言い
「では、混乱に乗じて一気に叩きますか?」
　艦長は言ったが
「いや、艦長敵は恐らくはそこまでは混乱はしていないだろう。敵艦隊は極めて優秀でいてそして沈着冷静だろう、今攻撃すれば余計な損害を増やすだけだ。しかしだし艦載機の損耗によるダメージは大きすぎるな。やはり航空自衛隊と我が国のパイロットの練度の差は開きが大きすぎる。これでは予定をかなり繰り上げて本国に補充機の要請をしないといけないかもしれんな・・・」
　司令官は言い
「私も同意見です、最初の小手先調べで２０機上げましたが約半分の

９機が撃墜されるも自衛隊空母が発艦させたＦ―３５Ｊ／Ｂに損耗を与える事は出来ませんでした、１６機中只の１機にもです」
　艦長も同調し
「やはり「敵艦隊」、「敵航空団」実に侮りがたしだな」
　司令官は頷きつつ言った。
「中国艦隊も動くと言う事だが規模は？」
　尋ね
「はっ、北海艦隊広東艦隊が自衛隊空母部隊の代わりに半島監視任務を肩代わりしつつ病院船がミサイル駆逐艦２隻に護衛される形で第５艦隊に合流しこちらに向かってくると思われます」
　乗員は司令官に言った。
「厄介だな・・・・第５艦隊に増援として合流か・・・・」
　司令官は艦長に
「艦長、貴官なら最初にどっちを叩く？、「第５」か「第６」か」
　尋ね
「・・・・・・・・・・・・・・」
　少し考えたのち
「私ならば「第５艦隊」を先に叩きます。「第６艦隊」も脅威ではありますが脅威レベルが違います。それに合流されれば大艦隊になる上に我々だけでは手に余り太刀打ちできなくなります。准・軽空母が２隻、日中イージス巡洋・駆逐艦も６隻、汎用駆逐艦も３隻、潜水艦３隻、艦載機機数も２隻合計で５７機ほぼ互角になります。」
　艦長は自身の考えを司令官に伝え
「攻撃するとなると、日本自衛隊第６艦隊のイージスレーダーや早期警戒機のレーダーを避けて飛行し「第５艦隊」を叩く事になるな」
　司令官は言い
「はい、ですがこれは博打です。万が一発見されれば・・・いえ発艦する際に早期警戒機に発見されるでしょうからそこからいかに姿をくらまし、かつ第６艦隊の防空網に引っかからずに行けるか・・・ですかねほぼほぼ不可能なレベルですよ」
　ため息を付きつつ艦長は答え

「だが、この「第５艦隊」にも対処せねんばならない、我々に時間はあまり多くは残されてないだろうな、上も恐らくは我々に発破をかけてくるだろう」
　司令官は言い
「増援が来る前に自衛隊空母艦隊を全滅させろと言う事ですか・・・・」
　艦長も言い
「ああ、所詮政治屋は現場の事など何も理解はしていないだろう、まぁそういう所では私も日本の自衛隊員らに同情はするがね。上が無能ならば苦労するのはいつも現場だ。それを忘れてはならない」
　司令官は言い
「そう思えれば司令の言う通り、日本の自衛隊員らも同志のようなものですね」
　モニターに映る自衛隊艦隊を見て二人は言うのであった。

番外編～航空機搭載型護衛艦「ずいかく」諸元～

ＤＤＶ１９４　「航空機搭載型護衛艦」
艦種分類　「中型空母」
艦名「ずいかく」
由来　旧海軍空母「瑞鶴」より引用
諸元
基準排水量　４５０００トン
満載排水量　６５５００トン
全長　２８６メートル
最大幅　７４メートル
水線幅　３８メートル
・
吃水　９メートル・
機関・ＣＯＧＡＧ方式
ＬＭ２５００ＩＥＣガスタービンエンジン　４基
スクリュープロペラ・２軸
電源・ＬＭ５００—Ｇ０７ガスタービン主発電機　４基
速力・最大３０ノット
乗員・約４７０名（乗員のみの数字で、航空要員は含まない）
（約９７０名：便乗者等含む［４］）
兵装・高性能２０ｍｍ機関砲（ＣＩＷＳ）・２基
ＳｅａＲＡＭ　近ＳＡＭシステム・２基
艦載機・
Ｆ—３５ＪＢ又はＦ—３ＪＢ　４５機　予備機含む
汎用・救難ヘリコプター・５機
〔任務内容に応じて随時艦載機機数の調整等なども可能〕
最大積載機数・５０機
Ｃ４Ｉ・洋上ターミナル（ＭＴＡ）
ＯＹＱ—１２　戦術情報処理装置
レーダー・ＯＰＳ—５０　３次元式

（ＡＥＳＡアンテナ×４面）・１基
ＯＰＳ―２８Ｆ　対水上捜索用・１基
ＯＰＳ―２０Ｅ　航海用・１基
ソナー・ＯＱＱ―２３　艦首装備式・１基
電子戦・
対抗手段・ＮＯＬＱ―３Ｄ―１　電波探知妨害装置
Ｍｋ．１３７　６連装デコイ発射機・６基
ＯＬＱ―１　魚雷防御装置
（ＭＯＤ＋ＦＡＪ）
発艦方式　スキージャンプ台

先の尖閣諸島における、対中国人民解放海軍との戦闘で先方を担い最前線で戦った自衛隊初となる「空母いぶき」の戦闘データをあらゆる角度から検証し建造されるに至った。軽空母に当たる「いぶき」とは違、幅広い任務用途に対応できるようにと艦を大型させその分艦載機を当時の１５機より３倍の４５機に増加。汎用ヘリを含めその搭載機数は計５０機と当面における日本海上自衛隊における主力「空母」となる。尚、同型艦の建造を日本政府は今現在４隻体制を目指し残りの３隻の建造を進めているものである。運用は「いぶき」同様に航空自衛隊からパイロット並びに航空管制を海上自衛隊が操艦運用を行う。

歴任人事
艦隊群司令
白谷圭一海将補→木村哲郎海将補〔ＴＨＥ　ＧＲＥＡＴ　ＧＡＭＥ〕より
艦隊副群司令〔新人事枠〕
一ノ瀬優希　准海将補〔ＴＨＥ　ＧＲＥＡＴ　ＧＡＭＥ〕より
艦長
風吹　空　一等海佐→山本裕樹一等海佐〔ＴＨＥ　ＧＲＥＡＴ　ＧＡＭＥ〕より
航空団司令

深山一等空佐→久保田一等空佐（ＴＨＥ　ＧＲＥＡＴ　ＧＡＭＥ）より

アジアにおける新たな火薬庫になりつつある「東亜連邦」問題への対処が期待されていたが、演習中に発生してしまった「春馬群島有事」において初の実戦出動を迎える事となる。

第５８話～島民の様子～

春島　公民館

東亜連邦軍の侵攻により拘束された島民らはと言うと

「思いのほか、不自由な思いはしないですね村長」

公民館の中に避難している島民は言い

「そうじゃな、此処に拘束されるときはどうなる事かと思ったが・・・」

シートを敷き、家族ごとにそれぞれ、荷物を置き、布団を敷いていた。

「村長、正直どんな野蛮人が来るかと恐れて今したが・・・」

言うも

「意外とジェントルマンのようだね」

言うも

「ですが、一応我々は「捕虜」扱いです、迂闊な事をすれば大変な事になりますよ」

横に座る島民が言い

「違いない」

村長も語るのだった。

数時間前

島民は全員が此処公民館に集められるが

「島民の皆さま、不自由な思いをさせてしまい申し訳ありません。ですが、作戦が完了次第、即刻皆様を日本本島に強制送還と言う形になりますがお送りさせて頂きます。それまではこの公民館内で過ごして頂く事になりますが、皆様の衣食住は全て我軍で負担致しますのでご安心下さい。最後に誓って皆様に危害を加えない事を部隊指揮官として確約致します。また必要な物があれば遠慮なさらず巡回している兵士にお声がけ下さい」

部隊指揮官は言うと部下にも島民をぞんざいに扱うなと厳命し部隊指揮テントの方へと戻って言ったのだ。その後、拘束はされている物の食料品や日用品など必要な物を受け取り、公民館内は比較的自由

に動け、外に出る際のみ、東亜連邦軍兵士同伴と言う条件付きで自宅等に必要な物を取りにもどれたりもしたのだ。

「これから、どうなる事やら・・・・」

島民が言い

「大丈夫だよ、先の尖閣有事も2週間はかかったけれども自衛隊が勝ってちゃんと解放されたじゃないか」

「そうだよ、それにこんな大事な事態になってるんだよ自衛隊の空母機動部隊が現場に向かってるし少しの辛抱だよ」

「第6護衛隊群かぁ・・・・」

「[ずいかく」だろ」

「ああ、直ぐにあんな共産圏のお古のボンコツ空母なんて蹴散らして俺達を助けに来てくれるさ、最新鋭の空母だぜ。」

「うん、そうだよね。自衛隊の人達を信じて俺達は此処で待つしかないよ」

若者も言い

「この有事が終わったら俺、自衛隊に就職するわ」

そう言う若者もいたそうな・・・・・・

西ノ島

「この、大バカ者ッ」

バキッ

公民館前で部隊指揮官が部下を殴りつけていた。

「あれほど島民に手を出すなと厳命されていただろうに!!」

部隊長は言い、その後ろでストレッチャーに乗せられて警官の遺体と自国軍兵士の遺体が運ばれてくる

「で、ですが、状況が状況なだけに・・・・」

兵士が言うが

「自動小銃構えながらいきなり行けば撃たれるのは当たり前だ、荒事は避けろと命令されていただろうが」

部隊指揮官は言い、目のまえを通る日本の警察官の遺体を乗せたストレッチャーを前に
「待てッ」
言い、
「・・・・・・・・・・・・・・・」
ご遺体を前にし手を合わせた、周りの部下達も指揮官に合わせるように遺体に手を合わせ合唱する。そして
「いいか、島民に手出しするのは厳禁だ、よいな厳命する！」
部下たちに言い、遺体を運ぶ隊員らにも
「丁重に弔なってやってくれ」
言い
「了解しました」
隊員らは言うと遺体を運んで行った。島民の公民館への軟禁を完了するも損害が生じてしまい
「これでは、島民が我々に反抗的な行動を取る事が容易に想像できるぞ。」
頭を抱えて言っていると
「隊長、報告します。」
隊員が駆け寄り
「自衛隊の空母艦隊が我が海軍の妨害を突破して、更に海軍航空団との空戦を突破し現場へと到着したと報告が入りました」
言い
「くッ!!海軍も頼りない、自衛隊の艦隊の遅延させると言っていただろうに」
言い
「我軍の損害は潜水艦2隻が撃沈され航空団の戦闘機が数十機撃墜されました。更に哨戒駆逐艦2隻が航行不能状態に置かれています。」
その報告に
「軍の上層部や議会の連中の大半が日本を自衛隊を過小評価している、このまま行けばあと数時間後には自衛隊の特殊部隊や海兵隊に空挺師団など奪還部隊が上陸してくるぞ」

毒付き
「ハイ、ですが地上戦は避ける事が出来ません」
部下も言い
「それは仕方がない。自衛隊の部隊と戦闘は避けられない。」
言い
「どう転ぶかは神のみぞ知る・・・・」
部隊の指揮官は空を見上げて言うのだった。